



宮城の協同組合人

― 三三三の足跡 ―

宮城県協同組合こんわ会

宮城の協同組合人

― 三人の足跡 ―

発刊の言葉

宮城県協同組合こんわ会は、設立二五周年の節目を迎え、宮城の協同組合の発展に貢献した先人たちの功績を後世に伝えるべく、『宮城の協同組合人 一三人の足跡』を発刊する運びとなりました。

これまで協同組合運動およびこんわ会活動を支えてこられた先人および関係者の皆様方のご労苦に心より深く感謝を申し上げます。

一九九一（平成三）年に県内協同組合間の連携を深めることを目的に設立されて以来、協同組合間相互の交流と組合員の生活・文化の向上を図り、豊かで明るい地域社会と農業をはじめとする地場産業の持続的発展を目指して、さまざまな活動を展開して参りました。

人と自然の調和がとれた「共生」が求められる時代、協同組合理念・基本的原則に基づき、互いに連携し合い、市民レベルの運動の提案と実践を通じて、各種の課題解決に向けて取り組みを進めてきたところです。

そして、二五周年の節目に、先人の足跡をたどり、その功績をここにまとめ上げることで、協同組合の価値を次世代（後世）に引きついで参りたいとの思いで発刊いたしました。

今日に至るまでの二五年間、我が国の社会情勢と協同組合を取り巻く環境は、激動の繰り返しでありました。

低所得労働者の増大、新しい貧困層の出現、奪われる機会の平等など、格差社会の拡大や地域

社会の崩壊が課題となっている現代だからこそ、「協同」「連帯」「相互扶助」等を理念に掲げる協同組合の真価が求められています。

「温故知新」とは論語の教えですが、人間が主体である限り、歴史は繰り返すものであるとの戒めでもあり、歴史の中から進むべき手がかりを教えられるものであると確信しております。

その意味でこの人物史が、協同組合関係者の座右の書として広く貢献できれば、望外の幸です。そして、幾多の先人の労苦が後世に伝えられ、協同組合の未来に向けた姿を見据える一つの契機になり、協同組合運動の前進が図られるよう願うものであります。

最後に、本県の協同組合を支えてこられた先輩諸氏に感謝を申し上げ、今後の協同組合の健全な発展を祈念し、発刊の言葉といたします。

宮城県協同組合こんわ会会長

(宮城県農業協同組合中央会会長)

石川 壽一

発刊の言葉

1 農を拓く 宮城県農業協同組合中央会

県内隅々を巡る、その情熱に導かれて農協育つ……	袋	光雄	11
「私は百姓」の誇りを胸に敢然と逆風に立ち向かう……	木村	秀壽	21
日本農業の激動期に道を照らした気骨のリーダー……	駒口	盛	31
貧しさから農民を救いたい 一組合長として初心を貫く……	武田	六郎	41

2 海に生きる 宮城県漁業協同組合

曇りなき知性と人の結合で、理想の漁業をつくる……	菊田	隆一	53
揺らぐ漁業に新しい風をもたらした気骨と先見性……	柴原	博	63
海との調和をふたたび 凧 <small>なま</small> の人が果たした漁業の転換……	阿部	國夫	73

育み鍛えた男気と冷静で地域漁業を支える……………小山 亀吉 83

3 森林^{もり}をつくる 宮城県森林組合連合会

貫いた治山治水の信念 足跡にひこばえ萌える……………高橋 友衛 95

「三出し運動」を道標に人と組織を導いた実践者……………三浦 義孝 105

山が水と空気をつくる 天衣無縫に生きた五四年……………高橋 満雄 115

組合の枠を超え、「谷間の村」に安心と利便性を……………片田 勝雄 125

4 商を築く 日専連宮城県連合会

困難を連携と発展の糧に仙台のにぎわいを築く……………三原 庄太 137

成長と協同理念を縦横に美しき理想を編む……………伏見 亮 147

報恩の誓いを力に結束と発展を推し進める……………高橋 確 157

5 暮らしを結ぶ 宮城県生活協同組合連合会

協同組合の星を目指して歩み続けた神戸の宮城人……………	涌井安太郎	171
草創期の東北大学生協と民法学の泰斗、中善先生……………	中川善之助	183
多くの生協活動家を育てた心優しきリベラリスト……………	坂本 正幸	193
協同組合運動に新しい地平を拓いた、土壌の人……………	吉田 寛一	203
果敢な再建策で危機を救った新生学校生協の生みの親……………	木下 義一	213
学校生協再建を支え、家庭班活動の先駆けとなる……………	高橋多賀子	223
道なき地上を歩き、求めた生協運動という希望……………	内館 晟	233
知縁のグループ活動と多様な組合員活動に道を拓く……………	外尾 幸子	245

特集 吉野作造と協同組合―賀川豊彦との協同―

吉野作造記念館館長 大川 真 255

宮城の協同組合略史

協同組合とは.....264

宮城の協同組合略史.....268

取材協力者.....284

主な参考文献.....285

あとがき.....288

宮城県協同組合こんわ会について

一九九一（平成三）年六月三日に設立された協同組合間連携の組織です。
宮城県農業協同組合中央会、宮城県生活協同組合連合会、宮城県漁業協同組合、宮城県森林組合連合会、日専連宮城県連合会の五団体で構成されています。

凡例

- ◎人物は、団体ごとに、前身を含めて関与時期の古い順をベースに、組織の別などを考慮し、適宜配列した。
- ◎人名はすべて敬称を略した。
- ◎組織・団体名は原則として初出のみ正式名称とし、以降は略した。
- ◎旧市町村名、旧団体名は原則として（ ）に現名称を表記した。
- ◎略歴は、特別に記載のある項目以外は就任年とし、退任年、議員歴、叙勲歴は省いた。生・没年月日、生地等は判明している場合のみ記載した。
- ◎年（年度）の表記は和暦を採った。ただし生・没年、元号の初出、法律公布年については「西暦（和暦）」で表記した。また特集「吉野作造と賀川豊彦」、「宮城の協同組合略史」については原則として西暦・和暦併記にした。
- ◎個人・団体から提供していただいた写真は説明文に付記した。宮城県協同組合こんわ会構成団体所有（発行物より複製したものを含む）の写真、および故人の追悼集や記念誌などから複製した写真は、これを省いた。

1

農を拓く

宮城県農業協同組合中央会

宮城県農業協同組合中央会第三代会長
宮城県信用農業協同組合連合会会長

袋 光雄

県内隅々を巡る、
その情熱に導かれて農協育つ

【ふくろ みつお】

-
- 1906(明治39)年 9月17日、北方村
(現登米市)に生まれる
 - 1926(大正15)年 北方村産業組合に奉職
 - 1946(昭和21)年 北方村村長
 - 1948(昭和23)年 北方村農業協同組合組合長
宮城県信用農業協同組合連合会
専務理事
 - 1954(昭和29)年 宮城県信用農協連会長
 - 1955(昭和30)年 宮城県共済農業協同組合連合会会長
 - 1965(昭和40)年 農林省米価審議会委員
 - 1966(昭和41)年 宮城県農業協同組合中央会第三代会長
 - 1995(平成7)年 3月22日死去

飯住まいから朝草刈りへ出発

袋光雄はその朝も飯寓の床のなかで目を覚ました。未明の空は暗く、星が弱い光を放っていた。

身支度を整えていると、近くに下宿する部下が袋を迎えに来た。車に清酒とモナカを積み、朝草刈りに出発する。県内の農協組合長を訪問し、貯蓄増強運動や共済事業への協力を要請するためだ。朝草刈りは、朝早く起きて出かけることを農作業になぞらえた呼称で、清酒とモナカは訪問先への手土産だった。

袋が堤通り（現上杉一丁目）の宮城県養蚕農業協同組合連合会の一室を飯住まいに定めたのは、一九五五（昭和三〇）年、宮城県信用農業協同組合連合会（以下県信連）と宮城県共済農業協同組合連合会（以下県共済連）の会長を兼務するようになってからだ。

県信連は設立から七年、県共済連は発足したばかりで、体制も基盤もせい弱だった。任務をまっとうするには寸暇を惜しまず働かなければならないと考えての単身赴任生活だった。

実家で農業を手伝っていたころ、霜を踏んで野良仕事に行き、満天の星を仰ぎながら帰路につくことが何度もあった。早起きはまったく苦にならない。「時間は有効に使え」が信条でもあった。自宅のある迫町（現登米市）には東北本線の駅があるが、

通いでは早朝から仕事に励むことができない。袋は、土曜日には車で迫町に帰宅し、日曜日には仙台に戻る日々を己に課した。粘り強さが袋の人生を貫く流儀だった。

夜も昼も時間を惜しんで働く日々

袋の生家、三浦家は、自作地のほかに小作地も耕す、いわゆる「手作り地主」で北方村（現登米市）でも指折りの耕作農家だった。

北方村農業補習学校を卒業後は当然のように農業に従事していたが、二〇歳のとき北方村産業組合佐々木庄太郎組合長の懇請を受け同組合に奉職する。二二歳で袋宮子と結婚して袋姓に変わり、才気を買われて二七歳で産業組合中央会宮城支会の指導員に抜擢される。

当時、東北の農村は昭和恐慌の直撃を受けて農産物や米の価格が下落し、苦境に陥っていた。産業組合は疲弊した農村を建て直すため、全農家加入や事業量拡充などを柱とする「産業組合拡充五か年計画」を策定、実践。袋も、町村をまわって産業組合の設立を呼びかけるなど、熱心に組合運動の推進にあたった。

まだ二七歳だったが若い人たちに人望があり、よく一緒に横山不動尊参りをしたという。「徹夜してでも家業と組合の仕事を濟ませ、青年たちにはその苦勞を見せないで付き合っていた」と、当時の袋を知る者が語っている。

日中戦争、太平洋戦争をくぐり抜けたあと、袋は四〇歳で北方村村長に就任。昭和二三年には北方村農業協同組合の初代組合長に就き、村長との兼務で職責を果たす。

ちょうど戦後の食糧難の時代で、農家は強制的に米を供出させられていた。台風で稲作が打撃を受けるなか、袋は供出米の割り当て完遂という難しい仕事に取り組む。夜は役場に泊まり込み、昼は農家を訪問して供米の督励をする毎日だったという。ここが勝負と定めたときは身を粉にして働く、そんな袋の一途さが垣間見える。

さらに組合長就任と期を一にして、袋は県信連の初代専務理事に選任される。一人で二役も三役もこなす奮闘ぶりに袋の評価は一層高まった。

県信連の礎となった農家資金対策運動

一九三万町歩とは、どのぐらいの広さになるのだろうか。終戦直後、GHQ（進駐軍）の指示で行われた農地解放は、農業史を塗り替える大改革だった。

昭和二〇年から二五年にかけて国所有の土地を含め一九三万町歩もの農地が小作農家へ売り渡され、多くの自作農を生み出した。封建的な地主制度を解体し、民主的な農村社会を目指すことが目的だった。

しかし袋は、自作農になった農民の生活が実際は天災や不況でひっ迫していることを知っていた。

「農家の暮らしを良くする決め手は米の生産力を高め、無駄を省いて貯蓄を進めていくことにある」

秋の米代金で借金を精算する習慣をあらため、自分で計画的に資金をまかない、災害にも備える。それが農業経営の安定につながる。そう確信していた。

県信連の専務に就いた袋は、「農家資金対策運動」（農協貯蓄増強運動）に取り組む。はじめに「備荒・たすけあい・納税準備・肥料・農機具・耕作・家畜・買い物・医療・婚礼」の一〇種の貯金を提案し、さらに「割増金付き定期預金」「一日皆貯金」など次々とアイデアを形にしていた。

県信連には農協から預かったお金を原資に、他の農協へ融資する組合系統金融の任務がある。

ところが県内の農協はどこも戦時中の債権処理や重税対策でゆとりがなく、一向に貯金は集まらない。貯金より融資が上回るオーバーローンの状況が続く、県信連自体も資金繰りに四苦八苦する有り様だった。

あるとき融資担当者が、農業手形の精算ができそうにないと農協への融資を断った。「資金繰りの窮屈な時代でした。融資せずの措置をとったら、袋さんに呼び出され、系統金融はお互い苦しいなかで面倒見てやらなければダメなんだよ」と叱られました」

袋の信念が伝わるエピソードである。

袋は「一日でも早く金融事業が円滑にまわるよう改善を図らなければならぬ」と、一層農家資金対策運動に力を入れた。「どうすれば貯蓄増強の周知徹底を図れるだろう、どうすればもっと理解が進むだろう」。必死にアイデアを絞り出す。

「宣伝にトラックを使おう」と思いつくとすぐ実行に移した。自分が経営する佐沼トラック株式会社からトラックを一台調達して横に横断幕を張り、蓄音機を鳴らして県内の農村を宣伝にまわらせた。後年はヘリコプターやセスナ機を飛ばして県内の農村を巡り、感激を持って迎えられている。

昭和二九年、県信連の会長に昇格した袋は、貯蓄督励の「農協巡り」に本腰を入れる。清酒二本やモナカの手土産はこのころからの習慣だ。

昭和三二年には「売り買いも貯金も共済もみな農協へ」と唱え、農協の役員や青年部、婦人部総ぐるみの推進体制をつくって県下一斉に運動を展開した。

県信連八代目の会長大江富一郎は『農協一筋 袋光雄伝』のなかで「こうした積み重ねが基礎になって農協貯蓄のイメージアップが図られ、現在（昭和六三年）の七千億円の貯金高につながった」と袋の功績を讃えている。

賀川豊彦の教えを胸に取り組んだ共済事業

「渡辺、明日は四時半出発だよ」。袋から何度、そう声をかけられたことか。朝草刈

りと称する組合長宅訪問に随行するのは、共済事業の生き字引とも言われる渡辺小十郎だ。

「共済事業に腰をあげない組合長宅を訪問し、事業への協力を説いてまわった。実に熱心で馬力のある会長さんだと思った」と渡辺は言っている。

一九五五（昭和三〇）年、県共済連が設立された。県信連の二代目会長であり、宮城県農業協同組合中央会（以下県中央会）の初代会長を務めた齋藤圭助の尽力によるものだった。

組合金融は信連を窓口に一本化した方が良いと考えていた袋は思い切って会長選に出馬し、県共済連の初代会長に選任される。

「資金運用を巡って農協系統に混乱が起きてはならない。県信連と県共済連の会長を兼務すれば、事業を進めやすくなる」。そう熟慮してのことだった。

袋は、日本の協同組合運動の先駆者である賀川豊彦の思想に深く共鳴していた。賀川は、戦前から「保険事業なくして日本の協同組合は発展しない」と主張し、全国共済農協連合会の設立後は、自ら全国を歩いて農協が共済事業に取り組みことの必要性を訴えていた。

昭和二九年夏、袋は仙台に賀川を招いて共済事業の講演会を開催。その熱い思いに触れている。

「農家から出るお金は農家へ還元しよう」。農協共済の父と呼ばれる賀川の呼びかけ

に感動した袋は、農協組合長宅の訪問や農協での講演など精力的に仕事をこなし、共済事業の地盤を固めていった。

当時県内には二二〇前後の農協があった。早朝仙台を発ち、組合長宅を順繰りにまわっていく。しかも、昼の時間帯は県信連会長として貯蓄増強推進のための農協巡りにあてるようにしていた。まさに大車輪の活躍だった。

政策面では、当初の計画通り共済資金のうち積立掛金をすべて県信連預かりとし、これを原資に農家への還元融資に踏み切った。挙積高と積立準備金の割合を基準に農家へ還元融資する方法で、共済事業、組合金融、双方に効果をもたらした。

昭和三二年には無医村地域の不安を解消するため、各農協にはたらきかけ、東北大学附属病院との提携で一日農村巡回医療診療所を開設した。県共済連が巡回診療班を派遣し、農協がそれを受け入れるという方式だった。

袋が打ち出した政策は、創業期の共済事業の支えとなってその後の発展を促している。

勤労農民の手で率いた農協運動

袋は幼年期に罹った小児まひの影響で左手が不自由だった。農作業ではその不自由さを負けん気と工夫でカバーし、懸命に働いた。

「俺の手を見る」。岩松清美（県信連五代目会長）はあるとき、袋から右手を差し出された。それは、「田打ちで鍛えた手だから事務屋のような手でない。勤労農民の手だった」。

米価運動ではいつも鉢巻き姿で先頭に立ち、食糧管理制度の堅持を訴えた。

大江は米価運動で上京した際の袋の姿を覚えている。「よれよれの服で我々を出迎えにきたことがあった。何日も東京に寝泊まりして家には帰ってなかったんですよ。それほど米価運動で頑張っていた」。

農民の暮らしを良くしたい。その一念で農協運動をけん引してきた。

昭和四〇年には二年の任期で農水省（現農林水産省）の米価審議会委員となり、交渉成功の喜びも、挫折の無念も味わった。昭和四一年には連合会役員の完全兼務制（共通役員制）発足で、県中央会・連合会のトップである共通会長に就任し、手腕を振るった。

政策を遂行するため、ときには駆け引きや根回し、権力争いにも身を投じたが、部下への気配りを怠ることはなかった。

袋の自宅近くに観音寺という水に恵まれた集落があり、質の良いセリを産していた。袋はこのセリと、近郷の長沼湖で採れる小エビ、じゅんさいを年に二回、小包にして県信連と県共済連の主だった部下に配った。ずんだ餅会を開催して慰労することもあったという。組織を大切にし、人の労に報いることを重んじるリーダーだった。

県農協連共通会長引退後のある日。

「やあ、実家に帰ってきたような気持ちがあるなあ」

農協ビルの一室に声が響く。職員がふり返ると袋の姿がある。

袋は会長職から身を退いた後も、たびたび農協ビルを訪れては、懐古談に興じた。仮寓のあった仙台と仕事の舞台となった農協ビルは心のふるさとだった。自宅のある北方にいても無性に仙台が恋しくなり、後輩たちに会いに駆け付けた。

袋の思いはまっすぐに、半生を過ごした県農協連へ向かっていた。

袋光雄、享年九〇歳。荒れた畑を耕すように、がむしゃらに農協の仕事に打ち込んだ人生だった。

宮城県農業協同組合中央会第五代会長

木村 秀壽

「私は百姓」の誇りを胸に
敢然と逆風に立ち向かう

【きむら しゅうじゅ】

-
- 1914(大正3)年 7月15日、鳴瀬村下新田
(現加美町)に生まれる
1936(昭和11)年 鳴瀬村産業組合に奉職
1957(昭和32)年 鳴瀬村農業協同組合専務理事
1969(昭和44)年 中新田町農業協同組合組合長
1978(昭和53)年 宮城県農業協同組合中央会第五代会長
1980(昭和55)年 全国農協中央会理事
1981(昭和56)年 農協米穀対策中央本部副本部長
1987(昭和62)年 9月23日死去

葉は落ちて根に還り養分となる

「葉落帰根」は、中国の禅僧慧能の言葉と伝えられ、葉は自然と落ちて根に還り養分となる、または、いつか故郷に帰るという意味で人口に膾炙する。

木村は戦時中に中国大陸でこの言葉を知り、生涯、座右に置いた。人を思いやる心、百姓であることの誇り、故郷への思い、すべてを包み込んだ上で、そのとき居る場所に情熱を傾けた。

農協人としての木村の源流は、鳴瀬村産業組合と復員後の農村再建活動にある。

一〇代の終わり、経済的な理由で盛岡農林高等学校（現岩手大学）を中退した木村は、農作業のかたわら鳴瀬川で砂金掘りをして家計を助けた。しかし困窮した生活に冷害が追い打ちをかける。日々の食べ物も事欠くなか、木村は「農民は一人では駄目だ。百人、五百人と力を合わせれば信用力も高まり、理想の農村をつくれるはずだ」との思いを持つ。

一九三六（昭和一一）年、高利貸や悪徳米肥商人の横暴から農村を守ろうとの決意を胸に、鳴瀬村産業組合に奉職した木村は、産業組合の置かれた厳しい環境に悪戦苦闘しながら、夜は一人でも同志を増やそうと村の青年たちを集め語り合った。

昭和一四年、現地の人心安定を任務とする宣撫班の一員として中国に渡り、終戦の直前に原隊復帰。ふたたび農業に従事する。

「貧乏人がいないふるさと、無学の人がいないふるさと、病人のいないふるさとを俺たちの手でつくっていかねければならない」

村の仲間と仏教青年会を結成し、戦後の農村の窮状を打開するため農業再生に取り組み一方で、空き地などでの野菜づくりを奨励し、野菜栽培組合をつくって野菜生産の先進地視察にも赴いた。

農業再生が口だけでないことは、木村の田んぼを見れば分かったという。旧友のひとは「木村さんの田んぼはいつも畦畔の草がきれいに刈り取られ、他の模範だった」と回顧する。

経営の複合化を目指す

昭和二四年、木村は鳴瀬村農業協同組合の理事に当選。新河原開田組合をつくって鳴瀬川の堤外畑に二〇ヘクタールの水田を拓き、「大勢で力を合わせれば河川敷にも田んぼができる」と、普段口にしている協同の理念を実践してみた。下新田蔬菜組合を結成し、ネギ苗の片屋根栽培の普及や優良種子の導入に力を入れたのもこのころである。

数々の取り組みが評価され、鳴瀬村農協は昭和三三年に「全国優良農協」の表彰を受けている。

議論が好きで、専務理事になっても「一〇年先の農業はどうなる」「所得向上に役立つ作物は何か」と職員へ問いかけた。常に職員のなかに身を置き、一緒にものを考えた。自ずと信頼が集まり、大崎、遠田の農協からも一目置かれるようになっていた。昭和四一年、木村は農協の理事たちに推されて組合長に就任する。

木村には専務理事時代に温めていた開発プランがあった。当時農業は稲作の機械化や出稼ぎ者の増加などで畑の開墾が後手にまわっていた。

「町内の林野を開墾して畑にすれば、経営を複合化できる」

木村は、中野地区にある町有林二九・四ヘクタールの払い下げを受け、中野畑作パイロット事業に着手する。参加農家は二七戸に厳選し、切り拓いた畑にまずアスパラガスを植えた。これは土壌の問題で失敗したがその後も加工トマト、採種用ダイコン、葉タバコなどさまざまな作物を導入していった。

さらに「これからは米だけではダメだ、野菜も畜産もやろう」と複合経営を説いた。養豚部会の会員は、木村が「市場まで足を運んで、中新田の豚をよろしく頼みますとひとり一人に頭を下げてくれたことが忘れられない」と語っている。

しかし木村の思いとは裏腹に、専業農家の減少は止まらず農村の都市化は進む一方だった。危機感を抱いた木村は、地場農産物の良さを伝えていくことのできる農協経営のスーパーマーケット「くみあいマーケット」をオープンする。農協組合員がつくった新鮮な野菜を店頭に並べ、馴染みの薄い野菜は料理教室を開いて普及に努めた。朝、

採った野菜を夕べに食べることでできる産地直送方式が地域の住民に喜ばれ、売上げは順調に伸びていった。

組織も、中新田・広原・鳴瀬三農協の合併による中新田町農業協同組合（現JA加美よつば）の誕生で経営力強化が図られた。

同時に、木村の活躍の舞台は宮城県の農協全体を率いる場へと広がっていく。宮城県農業協同組合長会会長、そして宮城県農業協同組合中央会（以下県中央会）第五代会長へ。大役を拝命して、木村の日常はますます多忙になった。

減反政策に立ち向かう

仙台市北四番丁通りの路上に、毎朝停まる一台の車があった。木村の自家用車だ。国道四号線の渋滞を避けるため、木村はいつも早朝五時から六時のあいだに中新田の自宅を出発した。出勤が早すぎるとは職員に気を使わせてしまう。勝山公園の近くに車を止め、八時になるまで時を過ごした。

車内が書斎になった。仕事の計画を練り、テーブルコーダーに耳を傾けた。カセットテープのなかには、その日の朝礼や会議で話す予定の文章を、あらかじめ自分で吹き込んだものが録音されていた。セミナーなどで喋った内容を録音し、後から聴いて反省点を探すこともあれば、家族を聴衆に話の内容をチェックすることもあったとい

う。組織にとってリーダーのメッセージがいかにかに重要か、熟知していればこそその習慣だった。

戦後、日本の農業は食生活の変化や貿易自由化など内憂外患の状態が続いていた。

木村が県中央会会長・農協米穀対策中央本部（以下米対本部）副本部長にあった時期も同様で、「水田利用再編対策（減反政策）」や農産物の市場開放論、米価問題に捨て身で向き合わなければならなかった。

昭和五五年夏、異常低温が東北を襲った。不稔が多発し、まったく収穫できない地区さえあった。県内の穀倉地帯を見て回った木村の脳裏に戦前の冷害の記憶がよみがえる。「あの辛酸をふたたび味わうことになるのか…」。

五六年度から始まる第二期水田利用再編対策の転作目標面積は一万七四三〇ヘクタール。「冷害で米が収穫できないのだから、転作面積は減らすべきだ」。木村は、山本壮一郎宮城県知事とともに何度も農水省（現農林水産省）へ出向き、折衝を重ねた。木村たちの熱意が通じ、転作面積は目標の約七十二パーセントまで削減することができた。

木村・山本の連携プレーは五九、六一年度の転作面積削減交渉でも力を発揮し、宮城県は全国一低い転作率を実現している。

とはいえ転作は米どころ宮城にとって辛い決断にほかならず、木村はいつも「どう展開していけば農家が安心して農業に励めるんだろうか」と農家の不安を思いやつ

た。

一方で「転作や減反を避けて通れないのであれば、奨励補助金などを活用して逆に農業生産の拡大を図るべきだろう」と合理的な指針を示すことも忘れなかった。

全国の米価運動の先頭に立つ

「今年はこれで何度目の上京だろう」。昭和五七年に東北新幹線が上野まで開業してからは大分楽になったが以前は片道四、五時間もかかっていた。農政運動のため、朝から晩まで農水省や議員会館をまわり、鶯谷の県農協宿舎に帰るころにはシャツも背広もよれよれになった。

昭和五六年、米対策本部副本部長に就任した木村は、全国の米価運動の先頭に立つて旗を振ることになった。

木村は、副本部長として各都道府県の意見を集約・調整し、代表して何度も政府との折衝に出た。各県の会長に頭を下げて内部の意思統一を図り、闘い方を決めた。宮城の農業者たちの主張を抑え、米对本部の方針に従う道筋をつけることもあった。

昭和五八年の米価運動も例年通り荒れた。政府の据え置き方針に対し、米对本部は、要求米価を物価賃金スライド方式で六〇キログラム一万八七六円とした。

ところが五七年と同じ生産費・所得補償方式で計算すると、二万二九〇六円になる。

県内では「この米価で要求すべきだ」という声があがっていたが、宮城県の考えはすでに木村が米対本部で主張し、少数派の意見として退けられていた。木村は「一度決まったことなのだから、本部の決定に従おう」と根気よく説得を続けた。

木村には、一地域の長としてより、全国の農業者を率いる者として、一段高い視点が求められた。

そんな木村の孤高に打たれるものがあつたのだろう。県米価大会の場で青年部と揉み合いになる木村を、ガードするように立つ若者たちの姿があつた。地元中新田町農協青年部のメンバーだ。「俺たちも暴れたい。しかしおらほの組合長を守るのが先だ」。彼らは中新田親衛隊と呼ばれ、その後の県米価大会でも壇の下で待機するようになる。親衛隊の一人は、「木村会長の泰然自若として自信に満ち、何が来ても除けようとしなない姿勢に大きなものを感じた」と当時をふり返っている。

百姓は土地がある限り減びない

「一の肥やしは主の足跡」という言葉を、木村は気に入っていた。少年時代から、良い米をつくろうと泥田を這いずり回り、除草に追われる日々を送ってきた。いつも米づくりに知恵をしばり身体を動かしてきた。

県中央会のトップになった木村は、良質米づくりの熱意を「日本一うまいササニシ

キ」の展開や「宮城県農協米づくり六〇〇キログラム穫り運動」の提唱へ向けた。運動は、生産者・農協・県経済連が一体となって盛り上がった。

米の消費量の減少や農産物の自由化など逆風が吹き荒れるなか、良質米づくりは「私は百姓」と自負する木村の信念でもあった。

政府は米の消費拡大を目的に、昭和五年から米飯給食を導入していた。木村は県内の米飯給食をさらに推進するため、「給食用米の国庫補助引き上げ」「ササニシキの供給措置」を提案した。こうした動きが功を奏し、昭和六年多賀城市が全国に先駆けて宮城の良質米ササニシキを学校給食に導入。パンと比べて割高になる差額分を県中央会と地元農協、行政が負担する方式は「多賀城方式」と呼ばれ、評判になった。

昭和六一年、木村のもとに「未来の東北博覧会」出展の企画書が届いた。日本の食料基地である宮城の農業と米づくりについて伝える内容だった。当時は良質米奨励金の削減や八・五水害などで県内農業全体が暗いムードに覆われていたが、「萎縮してばかりいてはダメだ。宮城の農家の主張をササニシキに託して明るく訴えよう」と出展を決意した。パビリオン名は「ササニシキ館」とした。

博覧会は昭和六二年七月から仙台市の港地区を会場に開催され、ササニシキ館は稲穂人形のオーケストラやササニシキクイズで好評を博した。博覧会全体の来場者数は約三〇〇万人を記録。予想を超える盛況ぶりに木村は「日本一うまいササニシキのピーアールになった」と大満足だった。

木村が心筋梗塞に倒れ、身罷ったのは、奇しくも博覧会が終了した日の深夜、九月二八日午前一時五五分のことだった。

木村はよく「百姓は土着して生業を立てている。土地と一緒に生存している。土地がある限り、人間が生存する限り滅びはしない」と言っていた。

落ちた葉は根に還ってゆたかな土地となり、そこに土着する者を育てていく。木村秀壽という一葉が落ちた土地はいま県中央会に受け継がれ、次の葉を育てている。

宮城県農業協同組合中央会第六代会長

駒口 盛

日本農業の激動期に 道を照らした 気骨のリーダー

【こまぐち さかり】

-
- 1928(昭和3)年 7月15日、南郷町
(現美里町)に生まれる
- 1943(昭和18)年 農業に従事
- 1957(昭和32)年 南郷町農業協同組合理事
宮城南郷農協組合長、みどりの農協
会長を歴任
- 1987(昭和62)年 宮城県農業協同組合中央会第六代会長
- 1990(平成2)年 全国農業協同組合中央会理事
全国農協中央会水田農業確立対策
本部長
- 1993(平成5)年 宮城県農協中央会・県信用農協連・
県経済農協連・県共済農協連の共通
会長
- 2012(平成24)年 1月5日死去

三二歳の若さで南郷農協の専務に選出

「あの家もこの家も家宅搜索を受けた。これでは戦時中の米の強制供出と同じだ」

戦後の食糧難時代に行なわれた米の強制供出は、占領軍の權威を嵩にきた「ジープ供出」という言葉があったほど苛酷だった。義憤に駆られた南郷村の日本農民組合青年部（以下日農青年部）のメンバーは、一九四八（昭和二三）年初頭のある夜、村役場に乗り込んで米供出の強権発動に抗議する。

「供出米の割当そのものがおかしい」「地方事務所のやり方は人権を無視している」
地方事務所長と談判し、ようやく違法な家宅搜索の非を認めさせた。その青年集団のなかに二〇歳の駒口盛の姿もあった。

鳴瀬川沿いに広がる南郷の水田は、町面積の四分の三を占め、積雪の冬、耕土の春、早苗の夏、黄金の秋と色を変え、平野を彩った。農業の隆盛は住民の生活の繁栄を意味した。

戦時中のくびきから放たれ自立性を高めた農家は、新しく誕生した南郷村の農協に期待を寄せ、日農青年部のメンバーも自分の家のように農協へ出入りして事業に協力する。農協の定款作成委員会に参加した駒口も、先輩の指導を受けながら農協運動に自分の進路を見出していた。村を襲った大水害を乗り越え、新しい革袋には新しい水をと農協文庫を開設し、青年部を設立した。町制が施行された昭和二九年からは共済

事業に取り組んだ。

昭和三五年に駒口は南郷町農業協同組合（現JAみどりの）の専務に選出される。三二歳の若さでの抜擢だった。

月給貯金農家と借金肩代わりで信用事業の基礎を築く

一年単位で暮らしを営む専業の米作農家にとっては、秋に収穫した米の代金が年間所得のすべてだった。そこから借金を返し、正月やお盆の準備をし、残りを生活費に充てるのだが、最も物入りな肥料や生産資材・労賃などの春耕資金は借金に頼るしかなく、ふたたび借りては秋の米代金で精算した。毎年その繰り返しだった。

駒口はこの悪循環を改善するため、「月給貯金農家」と農家の借金を農協が肩代わりをする仕組みをつくる。ちょうど宮城県信用農業協同組合連合会（以下県信連）が自営農家の育成をめざして「月給貯金制度」を呼びかけていた時期でもあった。

農協に年一回の米代金を預けた農家は一定の生産費と税金を除いて残りを一二等分し、毎月一定額を支出して生計を維持する。いわば「月給取り」の暮らしで家計の安定を図ろうとする試みで、農協も積極的に月給貯金農家への加入を奨めた。

問題は借金の方だった。農協が融資に消極的だったため、農家は資金の不足分を高利貸しから調達した。駒口自身も「借金農家」で、返済に追われる辛さを知っていた。

南郷農協が昭和三〇年に県内一位の一億六千万円の貯金を達成していたこともあり、駒口は「借金は農協から」と呼びかけて、借金の肩代わり、つまり高利貸しから農協への借り換え運動を進める。

しかし農協の理事たちはこれに強い難色を示した。県信連から借りる肩代わり資金には農協理事全員の個人保証が求められたからだ。組合員が返済できなければ代わりに理事が県信連に支払わなければならない。議論は紛糾したが、最終的には駒口が立案した「月給貯金農家制度を活用し、農協が営農指導から生活指導まで対応して借金を返済する」との計画が通り、実行されることになった。

産みの苦しみはあったが、この取り組みは南郷農協の「信用事業」の基礎になった。さらに農家の収入を増やすため駒口は、米作・養豚・野菜栽培の複合経営を推進する。米づくりでは水稲営農団地を設置して集団栽培を行ない、生育状況を揃えてイモチ病の町内一斉防除を実現した。養豚では専任指導員の増員や仙台に食肉直売所を出店するなど振興を試みた。養豚事業はその後輸入自由化などで縮小したが、生産者グループによる手造りハムの加工工場設立へと発展した。野菜づくりは昭和四〇年代に減反政策の一環としてミツバ栽培を開始、昭和五二年には駒口が「夢のまた夢」と言った販売実績五千万円を挙げるに至った。

貯金・貸付の「信用事業」から派生した系は、こうして生産・販売という「経済事業」へとつながったのである。

時勢はもう量から質の時代へ来ている

終戦後、食糧事情がひっ迫するなかで日本は大規模な土地改良や用排水機場の整備などに国を挙げて取り組んだ。「もはや戦後ではない」と言われた昭和三〇年代、一人当たりの白米消費量は一日ご飯茶碗五杯に達した。日本は高度経済成長時代へと突入し、出稼ぎが増えた農村では農業機械がじいちゃん・ばあちゃん・かあちゃんのお三ちゃん農業をカバーした。宮城県は「部落ぐるみ米増産運動」を提唱して、生産拡大に力を注いだ。あぜ道に立つ「部落ぐるみ米増産運動」の旗は、農家の意欲を駆り立てるに十分な掛け声だったろう。

しかし国民の主食である米を積んだ船は、昭和三〇年代半ばから政府の針路変更によって厳しい航海を強いられるようになる。

駒口は農協人生の大半を、この船のかじ取りに費やした。

一九六一（昭和三六）年七月、農業界は、河野一郎農林大臣の自由米構想に足元を揺さぶられる。自由米構想は、日本の食糧政策の柱である「食糧管理制度」（以下食糧管理制度）を改悪するのに等しい、そう捉えた全国の農業団体は反対運動に立ち上がった。

河野大臣来仙時には、県内はもとより近県からも農業関係者や農協組合員が大勢集まってシユプレヒコールをあげ、自由米構想にノーを突きつけた。全国農業協同組合

中央会（以下全中）をはじめ全国の農業団体の勢いに押されて構想は流れた。しかし、この後一〇年を待たずに農業政策は、政府管理米から自主流通米へ、増産から減反政策へと大きく触先の向きを変えるのである。

農政のターニングポイントに立った駒口は、時代の流れに抗おうとする農協組合員と心情を共有しながらも大局を見ていた。

昭和四五年、全中が自主流通米制度の反対運動を展開したときのこと。宮城県農業協同組合中央会（以下県中央会）も運動の先頭に立って闘ったが、農林省の見切り発車で制度は動き始める。一方、制度に是是非非で対応した宮城県経済連は、このときすでに全国のトップを切って自主流通米を出荷する準備を整えていた。その先手必勝の奇策を打ったのが駒口だった。

駒口は当時のことを「時勢はもう量から質の時代へ来ている。いったんそのような方向にいったら確実に消費者の情勢は変わると思っていた。幸いにも宮城県にはササニシキがある。一歩先駆けた方が絶対勝つ。そのような気持ちだった」と語っている。

減反政策にも同様に、「一年前まで増産運動の旗振りをしていたのに減反政策が始まるのはいたたまれなかった。反対運動が起きるのは当然だった」としながらも、いつまでも食管制度を守るための農政運動でいいのか、新たな発想が必要ではないかと自問自答するようになっていた。

農業の歴史が次々書き換えられた時代に

「会長は米に人一倍強い思い入れを持っていた」。県中央会の安齋明修はそう回顧する。会長とは駒口のことだ。米どころ南郷の出身で、宮城がササニシキの産地であることに誇りを持っていた。米は農協運動を推進する心の拠りどころでもあったろう。しかし……。会長は農協人生の後半で、食糧制度の見直しや米の部分自由化など自分の気持ちとはまったく相反する局面に巡り合ってしまった」と安齋は言う。

昭和六二年、駒口は政治に明るくリーダーシップにも優れていることから、県中央会の第六代会長に選出される。また一九九〇（平成二）年には全中の水田農業確立対策中央本部長に就き、J Aグループ米対策の全国の代表という重責を担う。

農業にかつてない試練が降りかかっていた、まさに激動の時代だった。牛肉・オレンジ輸入自由化など農産物の市場開放を求めていたアメリカの矛先は、昭和六一年ついに米へ及び、世界貿易機関のウルグアイ・ラウンド交渉に引き継がれる。

J Aグループは米輸入自由化阻止を掲げて反対運動に立ち上がるが、平成五年、全国平均作況指数七四の大冷害を契機に米不足が露呈し、「平成の米パニック」が発生。作況指数三七の宮城県は県外に一俵の米も出荷できず、営々と築いてきた宮城県米市場をたった一年で失ってしまう。

緊急事態を受け、政府は米の輸入に踏み切る。

そこからは一気だった。国内消費量八パーセントのミニマムアクセス米受入れ、国による自主流通米の全量管理、食糧制度の廃止と新食糧法の制定・施行と、日本の農業史が次々に書き換えられていった。

農業の未来を信じて身体を張ってきた駒口にとって、この歴史的な大転換はどんなに悔しかったことか。愚痴こそ言わなかったが、ことばの端々に「農協も組合員も生産調整に懸命に応え、米を守ろうと頑張ってきたのに、なぜ世の中は無情に変化してくのか」、そんな無念さが滲み出るのだった。

駒口は、水田農業確立対策中央本部長として平成六年度以降の米づくり対策を立案。三年間で最低一五〇万トン以上の在庫造成や作付面積の拡大などの要請をとりまわって運動を展開し、政府から転作面積の削減を取り付ける。

激変する農業環境は、農家はもちろん農協の存立基盤も脅かすものだった。県中央会は、農協の生き残りをかけて「一一広域農協合併構想」を進める。駒口は先頭に立って各農協を督励して回り、まず地元大崎地区一〇農協の合併による「JAみどりの」発足で道を開いた。

実務を知って、理念を追う

台東区鶯谷にあった県JAグループの宿泊所を、駒口は上京の際の定宿とした。県中央会や農協の職員も、米価運動や関係省庁との会議などで上京したときは鶯谷の宿泊所を拠点に活動してまわった。

若い職員にとって駒口は雲上人だったが、本人はいたって気さくで宿泊所で一緒になるとよく酒を酌み交わした。駒口と行動をともにすることが多かった安齋もその席に加わり、駒口の話に耳を傾けた。

「米の話、農協の話。日本の農業政策の背景に何があるのか、情報を豊富な知識で分析し、若い職員も分かるようにかみ砕いて教えてくれた」

語り口は熱く、「原因と結果を見極める」と諭された。起きたことを国や政治家のせいにはせず、なぜそうなったか、さらに掘り下げたところで現状を分析し、安齋たちにその構図を絵解きしてみせた。気骨にあふれ、ぐいぐいと部下を引っ張っていく、そんなリーダーだった。

駒口は農業を通して協同組合はどうあるべきかをずっと追求し続けてきた。

「農協は、いわゆる実務を知って理念を追う、というかたちにしなければならない」それが座右の銘だった。『理念』の重要性は近藤康男の『貧しさからの解放』に、『実務』の大切さは東畑精一の『協同組合論』に学んだという。

若いころ、設立に関わった南郷農協がたちまち苦境に陥るのを見て、「農協の経営は生易しいものではない。理想だけを追って実務を知らないではダメだ」と痛感した。正しいと信じる自分の理論も、それを超える社会の動きで容易に政治経済の流れに呑み込まれてしまう。そうした体験から、農協は理念を追い求めながらも社会や政治の変化に耐えうる体力を身に付けて置かなければならないと考え、実践しようと努力した。

また、県中央会に「市場競争の進むなかでは、協同の精神」をどのように發揮していくか、協同の精神に制度的にどう応えていくかがこれから大事になる」と期待を寄せた。

「この政策はまだまだこれからだから、あんなたちに頼むぞ」と若い職員たちに託した希望は、いまでも消えずに難局を照らす道標となっている。

角田市農業協同組合第四代組合長
仙南農産加工農業協同組合連合会第二代会長

武田 六郎

貧しさから農民を救いたい
一組合長として初心を貫く

【たけだ ろくろう】

-
- 1915(大正4)年 1月1日、藤尾村
(現角田市)に生まれる
1955(昭和30)年 藤尾農業協同組合理事
1957(昭和32)年 藤尾農協組合長
1963(昭和38)年 角田市農業協同組合常務理事
1964(昭和39)年 角田市農協専務理事
1970(昭和45)年 角田市農協第四代組合長
1972(昭和47)年 仙南農産加工農業協同組合連合会
副会長
1982(昭和57)年 仙南農産加工連第二代会長
1986(昭和61)年 11月18日死去

二度と水呑み百姓になりたくない

いつ買いかめたか、その煤けた文庫本は書架の一隅にあつて過去を照らしていた。なぜ貧困が生じるのか、貧富の差はどう解決すべきかを説いた『貧乏物語』（河上肇）は、武田六郎が生まれたころに新聞連載の上、出版された大正のベストセラーだ。戦後に文庫化され何度も版を重ねる。武田の書棚にあつたのもその一冊だろう。

「二度と水呑み百姓になりたくない」

悲痛なまでのその思いが武田の原点だった。「百姓をこれ以上貧乏にしてはならない」と言い続け、農協運動に人生を捧げた。

裕福だった武田家が傾いたのは大正の終わりごろだ。雑貨屋を営みながら農家相手に肥料も商っていた父親は、農村不況のあおりを受けて苦境に立つ。二男良男は早稲田大学に進んだが、末子六郎は授業料を納めることができず角田中学校（現角田高校）を途中退学する。しばらく家で農作業に従事するが、一八歳のとき母屋が火事で全焼し、家は没落する。

兄良男は、無産政党の活動家として知られる宮崎龍介・柳原白蓮夫妻と知り合い、農民運動に身を投じていた。帰郷して藤尾農民組合をつくり、毎夜人を家に集めては「多数の力が団結しなければ」と訴えた。

姉のたきは、「六郎に農民運動への志が起きたとすれば良男兄からの影響もあった」

と語っている。

武田には兄の心情を受け止める素地があった。

「私が社会に目を向け始めた一五、六歳のころは農村が極度に困憊したときで農業恐慌に入ろうとする矢先でした。昭和九年には冷害、凶作に追い込まれ、この辺の地区からも娘さんたちや学校の児童ぐらゐの者までが、桐生、足利あたりに機織り方向に年季奉公で皆持つていかれました。そういう東北のみじめな姿というものを肌にかけていました」（『武田六郎追悼集 二度と水呑み百姓になりたくない』）

生家没落の引き鉄となった農村不況、身近に見聞きした農民の苦しみ、みじめさ。そうした現実が若い武田の胸に奔流のように流れ込み、農民のために生きることを決意させたのではないか。

一九四八（昭和二三）年、武田は藤尾農業協同組合の発起人代表となって設立に関わり、戦後の民主的な農協運動へ向けて第一歩を踏み出す。

農協は絶対赤字を出してはいけない

意気揚々と船出した藤尾農協だが、七年目に早くも暗礁に乗り上げる。戦時下体制の「農業会」から引き継いだ不良資産や不良購買品の割当仕入れなどで、約九〇〇万円もの累積赤字が判明したのだ。粉飾決算だった。

会計担当から相談を受けた武田は、不安が的中したことを知る。役員が資金繰りに奔走する姿を見て、「赤字になってなければ良いが」と心配していたからだ。

昭和三〇年の通常総会は騒然となった。毎年二〇万円の利益を出しても再建には四年かかると言われ、藤尾農協は解散寸前まで追い詰められる。

「お前らが借金したんだらう」と責める組合員たちを前に、武田は火中の栗を拾う決意をする。総辞職した役員たちに代わって理事に就任。宮城県中央会の応援を得て「再建整備五カ年計画」を掲げ、農協再建の道を歩み始める。さらに昭和三二年には藤尾農協の組合長に就き、ひたすら再建に打ち込む。

武田は当時の頑張りを「血みどろの闘い」と形容する。職員の給与は据え置き、貯金の支払いは停止。宮城県信用農協連合会に相談しても、当時は県信連自体が資金繰りに追われており、武田は「自力で立ち上がるほかはない」と覚悟を決める。農協を再建できなければ組合員に貯金は戻せない。武田は組合員に懸命に協力を呼びかけた。職員たちは暖房もない事務所薄給に耐えながら、組合長の武田を援けた。

当時農協職員だった浅山みのは、米俵をかつぐ武田の姿を覚えている。「米の供出時は、職員と一緒に夜遅くまで米俵を担いで手伝ってくれた。六〇キロ入りの米俵を担いで歩み板を昇り、倉庫の天井まで積み上げる。そんな組合長さん、ほかにいるでしょうか」。

藤尾農協の再建整備は順調に進み、五年を待たずに赤字を解消した。

この体験は武田に重い教訓を残す。赤字になれば信用は地に落ち、農協にお金を預ける人はいなくなる。赤字から信用を回復するのは一生かかっても難しい。

武田は「農協は絶対赤字を出してはいけない」と誓い、ことあるごとに口にしていた。いわく、役員は資本に責任を持って、内部留保のできる経営をせよ、組合員から預かっている出資金には絶対責任を持って一定の利益を確保しなければならない、自己資本の充実、つまり経営の健全化こそが組合員への最大のサービスだ。

その考えは、のちに角田市農業協同組合（現JAみやぎ仙南）の組合長となっても、また「経営主義」の批判を受けても揺らぐことはなかった。

宮城県内随一のマンモス農協発足

昭和三八年春、河北新報に「マンモス農協発足」の記事が載った。

四月二七日、角田市内の七農協（枝野・角田・北郷・桜・西根・東根・藤尾）が合併し、組合員四五八三名を擁する宮城県内随一の大規模農協が誕生したのだ。

武田は、藤尾農協再建の目途がついたころから近隣農協との合併を考えるようになっていた。昭和三〇年代、機械化と専業農家の減少で農協は変化を求められていた。さらに、一九六一（昭和三六）年の農業基本法公布が武田の考えを後押しした。

零細な規模の農協では、多様化・高度化する組合員の要望に 대응することができない。「農民が安心して任せられる農協にするには合併すべきではないか」。武田は近隣の農協へそう提唱した。ちょうど角田市が第一次農業構造改善事業の地域指定を受け、受け皿を検討していた時期でもあった。

武田は、当時角田市の助役を務めていた三文字正次から相談を受ける。三文字は角田中学校時代の同級生であり、角田町農協で参事を務めたこともある優秀な能吏だった。三文字は、構造改善事業を進めるには農協の合併が必要と言う。もとより武田に異論はない。

「これを機に、農協がさらに力をつけて角田市の農業の近代化を図ろう」

思いは一致した。他の農協組合長の多くも賛同した。一部の農協から上がった合併反対の声も三文字が丁寧に説得して回り合意を得た。

「宮城に角田農協あり」と言われるほど規模も経営内容も優れた農協は、こうして発展の扉を開いたのである。

合併のメリットを活かした事業を展開

組織の拡大はスケールメリットをもたらす。角田農協は、生産・流通の共同利用施設やコミュニティ施設の建設など次々と合併のメリットを活かした事業を展開した。

先頭にはいつも武田の姿があった。

ライスセンターの建設は、生産・流通の合理化を促す施設として構造改善事業の目玉のひとつだった。しかし建設予定地の地主がなかなか首を縦にふらず、敷地の獲得交渉は難航した。聞けば田畑をつぶしてまで売りたくないと言う。ならばやむを得ないと、武田は自分の水田を代替地として提供することで地主の了承を取り付けた。

大型機械も共同利用になる。トラクター一四台導入の知らせを受けた農協青年部から、武田に訴えがあった。「ぜひ自分たちに免許を取らせてほしい」。武田の許可を得た青年部部長たちは阿武隈川河川敷で運転の練習を行ない、無事免許を取得した。

昭和五三年から始まった第一期水田利用再編対策では、武田と当時角田市長になっていた三文字のコンビがふたたび息のあったところを見せる。

武田は「減反問題は避けて通れないだろう」と三文字から聞かされていた。水田利用再編対策は、転作を奨励する政策へシフトしている。

「転作をやるう。まず一〇〇ヘクタールに麦を播こう」

武田は集落座談会の場へ何度も足を運んで取り組みの内容を伝え、組合員の理解を得て「集団転作組合」を組織した。昭和五二年の秋、一足早く一〇〇ヘクタールの水田に麦を播き、翌夏に麦秋を実現させたのである。

県の構想を先取りするかたちで集団転作組合をつくり、転作を成功に導いたこの方法は、「角田方式」として一躍評判になっている。

〳組織の協同活動〴〵を、〳農協間の協同活動〴〵へ

バイクが武田の通勤手段だった。公用車を薦められても「百姓だと思うと何でもない」とバイク通勤を続けた。役員であるにも関わらず、自ら職員より安い報酬で働いていた時期もある。質素で堅実で「公」を優先した。

吉田松陰に「私を役して公に殉う者を大人と為し〜」の格言があるが、武田はまさに、私を役して公に殉う、つまり徹底して自分を公のために役立てた人物だった。

武田は「農協の主人公は組合員だ」と言い、農協運動を組織運動と位置づけて経営にあたった。

「組合という組織は、組合員が良くなつて組合員が結集しなければ成り立たない」裏表なく、誰にでも分け隔てなく接する武田の言葉は、自然と人の心に染み入り、職員や組合員を動かした。その機動力が角田農協の強さでもあった。

協同活動の中心は、稲作の集落組織である興農組合だ。そこに畜産・野菜などの作物部会、婦人部や青年部がつながり、まさに「組合員を主人公」に大きな農協運動の渦を形成していた。米の収量を上げるため青年部で共励会をつくると農協では米作課を設けて活動を支援。米づくりは角田に学べ〜と言われるほどの高収量を記録した。

武田は、こうした〳組織の協同活動〴〵を、〳農協間の協同活動〴〵に広げようと考える。

仙南地区ではすでに、武田や白石農協の三澤賢吾、宮城県農協中央会の阿部長寿な

どが中心となり、二市七町（角田市・白石市・七ヶ宿町・柴田町・大河原町・村田町・川崎町・蔵王町・丸森町）でつくる「仙南地区広域営農団地」が事業の方向を模索し始めていた。

昭和四七年には、営農団地の構想をもとに仙南農産加工農業協同組合連合会（現株式会社加工連）が発足。同時に、これからの農業振興は消費者と結びつくことが重要と判断し、日本生活協同組合連合会に加入した。

角田農協は昭和四五年から宮城県民生協・宮城県学校生協（現みやぎ生協）とのあいだで肉と鶏卵の取引を始めていて、生協組合員と農家の交流を通じた産消提携を進めていた。仙南農産加工連の誕生で、その活動がよりスムーズになった。

「自分たちがつくったものに付加価値を付け、自分たちで販売していく」ことを目指していた武田は、生産者と消費者の連携による新しい協同活動に大きな期待を寄せたに違いない。

産消提携はのちに仙南農産加工連の常務理事となった窪田立土をはじめ、多くの生産者や職員、生協組合員の努力でより大きな運動へと発展する。

昭和六一年、阿武隈急行開業で湧く角田のまちに恒例の農協祭の季節が訪れた。一月一五日・一六日は風が冷たく寒い日だったが、武田は祭の会場に足を運んだ。毎年の農協祭は武田にとって「市ぐるみの協同活動」だった。親しい顔、懐かしい顔と笑みを交わし、祭の賑わいに目を細めた。武田が急逝したのはその二日後、一月一

八日のことだった。

県農協連合会のトップに推されても泰然として動かず、「自分は角田農協の組合長だ。角田農協の組合員を守るのが仕事なんだ」と、生涯、一農協の組合長を貫いた。里山の森に根を張って夏は木陰をつくり冬は薪を与える、そんな大樹のような人生だった。

2

海に生きる

宮城県漁業協同組合

宮城県漁業協同組合連合会第三代会長
全国漁業協同組合連合会第四代会長

菊田 隆一

曇りなき知性と人の結合で、
理想の漁業をつくる

【きくた りゅういち】

- 1904(明治37)年 7月7日、階上村
(現気仙沼市)に生まれる
- 1939(昭和14)年 階上村助役
- 1946(昭和21)年 宮城県水産業会理事
- 1952(昭和27)年 宮城県信用漁業協同組合連合会会長
- 1958(昭和33)年 宮城県漁業協同組合連合会第三代会長
- 1971(昭和46)年 全国漁業協同組合連合会第四代会長
- 1988(昭和63)年 12月25日死去

故郷と時代、そして災害

気仙沼市波路上の地福寺からは、岩井崎の海が望める。東日本大震災が起きるまで風景の手前には集落が広がっていたが、津波が暮らしの痕跡を消し去ってしまった。だから、海の眺めにも温かみがない。

寺の門前には一九六五（昭和四〇）年の三陸大海嘯七〇回忌法要に際し、菊田隆一が中心となって建てた『海嘯記念碑』がある。碑は幸い流失を免れたが、ほかは流され、行方が分からないという。

この一八九六（明治二九）年の明治三陸大津波により階上村明戸では、全八九戸のうち八六戸が流失し、住民五八八人のうち四三三名が死亡。集落のほぼすべてを消し去った大津波は、人々の心にも大きな傷跡を残した。

七〇回忌回向の日、宮城県漁業協同組合連合会（以下県漁連）のリーダーとして故郷の海に向かう菊田の胸にはどんな思いが去来していたか。

彼の足跡を追うとその歩みは、戦後、民主団体として成長した県漁連の歴史そのものだということが分かる。まさに県漁連の成長を支えた人。その努力を養ったのは「故郷」と「時代」であったが、その歩みを邪魔するように「災害」が幾度も横たわることになる。

学問を修め、ふたたび故郷の海に向かう

菊田隆一は明治三七年、階上村波路上（現気仙沼市波路上）に生まれた。

明治三陸大津波から八年後である。当時、父の倉之助は村長を務めていて、尋常高等小学校の設置や凶作救済事業などで功績を残すが、そうした父の働きは、のちに隆一の進路に影響することになる。子どものころは、波路上から大島まで潮境の海を泳ぎ渡ったなど放胆な逸話がある一方で、勉学も人より秀でた。

一九二六（大正一五）年、菊田は二二歳で仙台の第二高等学校に入学する。当時、高等学校の就学は一六歳からで、二〇歳を過ぎての入学は異例だ。それ以前は階上小学校の代用教員をしていたというから、働きながら進学を目指したのだろう。学籍記録からは、大学入試資格検定に合格して入学したことが分かる。その試験に合格するのは「駱駝が針の穴を通るより難しい」とされたので、苦学の形容さえもどかしいほどの努力だった。

二校卒業後は東北帝国大学（現東北大学）法文学部に進んだ。同学部は、当時東北帝大で最も新しい学部だから、門を叩いた菊田の心は、最高学府で最新の学問を学ぶ高揚と誇りに満たされていたに違いない。

だが、それほど学問にこだわったのはなぜか。

明治の末から昭和にかけて階上村は貧しかった。とくに菊田が生まれたころは凶作

が続き、故郷を見限り北海道に移る者もいた。父、倉之助の凶作救済事業は、これに対応するものだった。一方、漁業は磯物が中心で、ノリ養殖も湾内のほかの浜より劣った。

『気仙沼市史』では昭和初期の階上村を「極度の節約でもなおかつ貧しい」と断言しているが、菊田はそんな故郷のために学問を修めたいと考えたのか、あるいは純粹に知識への憧れがあったのか。

昭和八年三月、菊田は東北帝大を卒業する。ちょうどそのとき、昭和三陸地震が発生し津波がふたたび村を襲う。菊田は最高学府で最先端の思想、文化に触れながら、都会で活躍するような華やかな進路を選ばなかったが、幼いころに聞いた津波の恐怖と戦慄がその津波でよみがえり、帰郷を決意したのかもしれない。

津波による階上村での人的被害は最小限で済んだが、ノリの柴建ては壊滅した。しかし漁民は被害を乗り越え、昭和一年に新しいノリ養殖法を導入、昭和一六年には生産額が日本一になり、「海苔王国」と呼ばれるまでに復興させた。

この間に村の助役を務めた菊田は、共同販売を前提にした競争入札を提案、仲買による買い叩きを防ぎ、ノリの取引価格向上に貢献した。そしてこうした実績が、のちに全県でのノリの共同販売導入につながっていく。

戦後の新しい漁業秩序をつくる

戦時中に宮城県水産課に勤務した菊田は、終戦の翌年に宮城県水産業会（以下県水）の理事になる。

県水は、戦前に誕生した宮城県漁業組合連合会（以下旧漁連）の後継団体である。戦争の長期化で協同組合としての機能を失っていた旧漁連を、昭和一八年、戦時状況に合わせて改組した。しかし終戦後、水産業団体から行政官庁の権限がほぼ排除されることが決まり、組合組織はふたたび民主的な活動ができることになった。

菊田が県水の理事になったのは、戦時組織の古い殻を脱ぎ捨て、羽化しようとするそのときだった。

一九五〇（昭和二五）年一月一四日、民主化を掲げた水産業協同組合法と漁業法の改正によって県漁連は誕生した。菊田は設立世話人代表に選ばれ、獅子奮迅の働きをした。彼はその晩年も水産業協同組合法のすべてを諳んじることができたというが、そこからもこのときの努力が分かる。

こうして誕生した県漁連だが、『宮城県漁連五十年史』によれば、生まれながらにして病弱だった。

理由は戦争によって漁村の暮らしが疲弊していたこと。ゆえに会員からの出資が十分でないことや、前身の県水の負債を引き継いだことなどがある。結果、県漁連は創

立の翌年に、農漁業協同組合再建整備法の適用を受けることになる。

ようやく生まれた新しい組合が、順調に育たないことに菊田はじりじりした。誕生に関わった者として専任し、成長を見届けたい思いもあっただろうが、その能力を頼る声は多く、昭和二七年には、宮城県信用漁業協同組合連合会（以下信漁連）の会長に就任し、漁業経営の課題に取り組むことになる。

信漁連での最初の仕事は、戦後の新しい漁業制度での漁業権への理解を得ることだったが、旧来の漁業権を整理し、新しい漁業秩序をつくることに反発する者もいた。

「おれの漁場はそんなカネじゃ渡せない」

そう突つ張る猛者たちをなだめ、ともに漁業を支え合う大切さを説き、まとめるのも菊田の仕事だった。

そんな矢先に、津波がまた漁業を襲う。三月に十勝沖地震、一月にはカムチャツカ半島沖地震が発生し、カキいかだやノリ養殖施設などが被害を受けた。津波被害からの復旧対策も仕事に加わり、菊田の苦労は続いた。しかしその一方で、立て続けの津波被害は、はからずも海に向かうものたちの連携を育んだ。自然災害に立ち向かうには漁協と漁民が一体にならなければならない。そんな機運が盛り上がり、協同運動を支えた。

再建のときを襲った津波

昭和三十三年二月、菊田は県漁連の会長に就く。設立から九年目を迎えていたが、組織は健康体にはほど遠かった。設立間もないときの整備計画はすでに達成したが、財務内容は悪化していて、新たな整備促進法で再建を図ることになった。

菊田は、真に健全な組織として理想の漁業をつくることを目標に、本丸ともいふべき難題に挑んだ。

このころ専務理事として菊田を支えた萩尾堅が再建計画について話している。ここでは、漁連は「漁民に協力を押し付けているわけではない」と断った上で、「漁連の経営を他人事のように考えず団結すべき」こと。そして計画達成のために「漁連事業を全利用してほしい」と訴えている。すなわち各々が独善的に漁業を行なうのではなく、連携した系統運動こそが県漁連を立て直し、漁業を育てるとしている。

萩尾の言葉通り、県漁連も身を削った。人員削減、給与改訂、経費節減を断行した。さらに事業対策でノリ、ワカメなど浅海養殖に注力したことが功を奏し、計画から四年で八千万円の利益を計上し、一〇ヶ年の再建計画を四年で達成させた。

このころ菊田がノリの共販やワカメの養殖事業を推し進めたのは、経営が不安定になりやすい沿岸漁業の基盤を整えるためだが、そこには津波で幾度も壊滅的な被害を受けてきた故郷への思いがあったに違いない。そしてこの尽力が、宮城県の養殖漁業

の繁栄につながっているのである。

昭和三五年、故郷に念願だった波路上漁港が完成した。これは財政難にあえぐ村に代わり階上村漁協が主体となって整備を進めたもので、全国初の取り組みに菊田は計画当初から尽力した。このころは高度成長の影響で県漁連の再建も順調に進み、漁業も故郷も自身も、まさに順風な日々だった。

そんな成長の流れを止めるように、南米チリで発生した地震が津波を起こし沿岸を襲った。昭和三陸大津波以来の大災害。県内の水産被害は二億円以上。前年には伊勢湾台風に襲われたばかりだった。漁港には船が打ち上げられ、漁民は呆然と立ち尽くすしかなかった。

チリ地震津波の翌日、昭和三五年五月二四日の新聞記事には、沿岸漁民の救済を訴える菊田のコメントがある。

「政府が根本的な救済策を行なわない限り、多くの沿岸漁民は二度と立ち上がれないだろう。これまでのようにスズメの涙ほどの融資ではとても手ぬるい。(中略) 思い切った助成金をさすべきだ」

菊田はすぐに行動した。同二七日から東京で開かれる全漁連の総会に問題を持ち込み、各方面へ陳情を重ねた。

この日の新聞の見出しは『融資より助成を 県漁連が政府に運動』とあるが、それは菊田と被災した漁民たちの、ぎりぎりの願いであったに違いない。

若き日、二高と東北帝大に学び、故郷を豊かにしようとした青年の志は、四〇年近い歳月を経て、被災した故郷の人々の願いを全国に届け、故郷・宮城の漁業を救おうという決意に変わっていた。それはある意味、組合人としての集大成であり、これまで背負ってきたものの大きさを思えば、陳情の言葉もしぜんと激しくなった。

菊田らの運動を受けた政府は、特別立法により漁業施設や漁船の高率補助など最大限の援助措置を講じた。

人の社会的結合を追い求めて

その学歴のせいか、教員を務めたためか、または地域を牽引した実績の所以か、彼を知る階上の人々は、いまでも「菊隆先生」と呼ぶ。県漁連会長、全漁連会長と上の立場になるほどその足は故郷から遠のいたが、年に一度か二度、漁協事務所に顔を出した。迎える側は皆、直立不動だったが、本人はいつも笑顔を絶やさなかったという。新人職員であろうと分け隔てせず、相手の名に「君」か「さん」をつけて呼んだ。

小柄で少し太め。おだやかな物腰は、先生の呼び名が意外にも感じられたが、やはり威厳はあった。

一方で、信念の強さも人一倍だった。チリ地震津波の前年、菊田は『階上村史』に序文を捧げている。その冒頭に、漁業のために尽くした菊田の凝縮した信念を見るこ

とができる。

「人は孤立して生存し得ざる存在であり、必ずや社会的結合を為さねばならぬであろう。従って人の人たる所以は結合にありと断ぜざるを得ない。」

昭和の初めからいまに至る漁業の歩みは、津波など災害との闘いの歴史であり、戦後の漁業団体の歩みもそれに沿っている。

度重なる困難を乗り越えて漁業を鍛え、その成長を支えた人。菊田隆一は、曇りなき知性と人の結合で、理想の漁業を追い求めた人だった。

宮城県漁業協同組合連合会第五代会長

柴原 博

揺らぐ漁業に新しい風を
もたらした気骨と先見性

【しばはら ひろし】

-
- 1922(大正11)年 塩竈町(現塩竈市)に生まれる
 - 1956(昭和31)年 塩釜市漁業協同組合理事
 - 1960(昭和35)年 塩釜市漁協組合長
 - 1970(昭和45)年 宮城県信用漁業協同組合連合会副会長
 - 1975(昭和50)年 宮城県漁業協同組合連合会理事
 - 1978(昭和53)年 宮城県漁連第五代会長
 - 2001(平成13)年 10月30日死去

心底、腹の据わった人

「舟入」という詩的な趣のある地名は、仙台藩二代藩主忠宗によって開削された「御舟入堀」に由来する。塩釜湾と現在の仙台港を結ぶ水路は貞山運河の一部で、北上川や鳴瀬川を下り、仙台を目指す舟を通した。完成するまで物資は塩竈に揚げられたので、水路によって輸送は随分便利になった。

一九二二（大正一一）年、柴原博は舟運の名残が残るこの運河沿いに生まれた。父、五郎は塩釜湾でノリや種ガキの養殖を営んでいた。松島、塩竈はいまでこそノリの産地として名高いが、県内での起こりは遅く、生産が本格化するのは大正の半ばだから、五郎はその黎明期を支えた人だと分かる。

自宅前の「御舟入堀」を通い、湾に出てノリや種ガキを採り、自宅前に水揚げする。そばにはノリ加工場があり、博の代になってもしばらく使ったという。住まいと漁場と加工場は運河でつながる、そんな地の利が柴原の家を塩竈でも有数のノリ屋にした。柴原がこうした利便性に優れ、合理的な環境で育ったことに注目したい。

中学と高校は私学に通った。高校はキリスト教系の学校だった。ときは開戦目前、ナシヨナリズムの高まりは頂点に達し、キリスト教は敵性宗教とされた。柴原がその学校を選んだのは特別な信念があったわけではないというが、時代の波と進路の落差をどう感じていたか。本心はともかく、卒業後間もなく柴原は南方ビルマへ赴く。

太平洋戦争で最も悲惨な戦場といわれた修羅場を生き延びた柴原は、戦後も捕虜となり収容所に抑留された。戦闘の激しさに加え、降伏後の屈辱は、銃傷のほかにどれほどの傷を負わせただろう。ひと言、大変だった、と言う以上は何も話さなかったが、それが体験の壮絶さを強く感じさせた。

「心底、腹の据わった人」

柴原の妻、和子は亡き夫をそう思い返す。それは壮絶な体験によって否が応でも鍛えられたものかもしれないが、のちに災いを福に転じて戦争経験からはほど遠い斬新なアイデアで、宮城の漁業に新しい風を吹き込むことになる。

父としての厳しき、夫としての優しき

ビルマでおよそ二年にわたり捕虜として生きた柴原の終戦は、人より遅くやってきた。復員したのち、出征前にほんのひととき勤めた東北興業株式会社に復職した。

同社は凶作や津波被害で疲弊し開発が遅れた東北の殖産興業を目的に、一九三六（昭和一一）年に政府が設立した。事業目的には天然資源の開発・活用がうたわれ、水産資源開発も含まれたが、柴原はそうした分野で活躍したいと考えたのだろうか。

しかし程なくしてサラリーマン生活を辞めた。和子が聞いたところでは、復員して久しぶりに目にした父五郎の働く姿が心に響いたからだという。父は日焼けし、汗と

潮にまみれながら銃後の暮らしを守ってくれた。その感謝と申し訳なさから家業を継いだという。

和子との縁談も父が持つてきてくれた。

当時、和子の父は輸出種ガキ養殖業者でつくる組合の参事を務めていて、柴原の父と付き合いがあった。

「うちに復員してブラブラしてるのがいるが、誰かいい人はいないか」

「それならうちにちょうどいいのがある」

父親同士の何気ない世間話から、縁談は呆気なくまとまった。むかしの出会いなんてそんなものよ、と和子は笑いながら振り返る。初めて会ったときの印象は、ああ、あたしはこんな色黒で背の小さい人と一緒になるんだなあ、というものだった。

結婚の直前、柴原は和子に手紙を書いている。そこには、母は厳しい人だから覚悟して来いと書かれていた。なんでそんなことを知らせるのか、その前に言うことがあるだろうと思っただが、のちにそれは夫なりの気遣いだと分かった。

和子は仙台生まれの仙台育ち。おまけにしつかりした学歴も持っていた。柴原にとっては縁の遠い、都会育ちのお嬢さんだった。そんな人が養殖漁師の家に嫁いでくれる。うれしさ反面の心配がそんな手紙を書かせたのだろう。

程なく長男が生まれた。父としての柴原はとても厳しかった。言葉づかいや身なりにうるさく、けじめを大切にした。

「岩場の一本松のように強い気持ちを持って」

よくそんなことを口にしたが、それは風雪に耐えながら己を律せよということだった。無論、卑怯な振る舞いは許さなかった。学生時代から続けた剣道の心得が身に付いていた。

それでも、和子には優しかった。

後年、塩釜市漁業協同組合（以下塩釜市漁協）の会長になってからは自宅に部下を迎えることが多くなったが、ちょっととした挨拶でも身なりを整えろと言った。立場上、恥をかかすなという気持ちもあったのだろうが、それ以外でも身なりを気にかけてくれたから、夫なりの優しさだったのだろうと、和子は言う。言葉尻だけだと優しい感じはないし、他人は奥さんにも厳しい人と受け取ったかもしれないが、そうではない。してくれることにはいつも思いやりがあったという。

付加価値をつけて売ろう

松島湾のノリ養殖は、柴原が結婚した昭和二〇年代半ばから四〇年代初めまでが最盛期だった。和子も自宅脇の加工場でノリ漉きや乾ノリづくりには汗を流した。毎年、繁忙期には山形から住み込みの出稼ぎ人も来たので食事の世話もした。家事と子育てはその片手間に済ませた。

昭和二八年、宮城県漁業協同組合連合会（以下県漁連）は松島で初めて乾ノリの共同販売を実施した。それまでの個別販売では漁の好不調で価格が変動した。さらに漁場の違いや販売機会の多寡が生産者の間に格差を生んだ。何よりの問題は、価格が買手の言い値になってしまふことだった。共同販売では買い叩きを防ぎ高値安定を目指したが、柴原はその導入に積極的に関わった。

養殖の研究にも熱心だった。昭和二九年、県漁連が中心となり宮城県漁業青年研究連絡協議会を結成、その年の第一回研究発表大会で、柴原の塩釜市漁協「漁成会」は、ノリの採取前管理をテーマに研究発表を行なっている。さらに翌年には水産庁主催の研究発表会で優秀発表者として表彰された。このときもノリ養殖が研究テーマだった。

柴原はノリ養殖を発展させるため、生産力向上と販売力強化に努めた。

生産力向上では水産試験場との連携による科学的検証で研究精度を高めた。このころ、気仙沼の人たちとよく交流したという。昭和三〇年代の初めに気仙沼水産試験場でノリの人工採苗技術が確立されたので、その導入や活用が交流の目的だったのだらう。

一方販売面では、共同販売のほかに商品価値を向上させることを提案した。昭和三〇年代半ばになると、松島、塩釜での乾ノリ生産額は記録的に伸びるが、それは全国的な傾向だった。ノリが十分流通するようになれば、市場は品質と価格以上の価値を

求める。柴原は市場の変化を先読みしていた。良いノリをつくるだけでなく、工夫すればもつと売れる。つくったノリの良さをいちばん知っているのが生産者なら、その価値を高められるのも生産者だろう。

昭和三五年、塩釜市漁協の組合長になった柴原はリーダーとしてそう説き、生産者自らが加工し、「付加価値をつけて売ろう」と言った。付加価値を付けての販売はいまでこそビジネスの常套句だが、戦後漁業の誕生から一〇年ほどの時代に明確なビジョンを持っていたことに驚く。

柴原は有志によるノリ加工業者の集まりを組織し、焼きノリの加工場をつくった。それは生産者自らがノリの価値を高める取り組みであり、現在の高次産業化にも通じるチャレンジだった。

宮城の漁業に新しい風を

高度成長の時代になると、風景と暮らしも少しずつ変化した。柴原の自宅前にあった沼は県道の拡張工事のために埋め立てられ、自宅から貞山運河が少し遠のいた。

柴原はモーターゼーションを先取りし、自動車学校経営を手がける。しばらくはノリ養殖と兼業するが、昭和四〇年代後半に松島湾でのノリ生産量が減り始めると、船を出す機会も少なくなった。

一方で全国のノリ生産量は昭和四〇年代も伸び、品質と価格以上の価値が問われ、産地間の競争は激しくなっていた。付加価値の必要性を説いた柴原の提案はここに至って広く一般のものとなるが、すでに地域漁業全般を指揮する立場にあったため、その先見性は次のステージで生かされることになる。

昭和五〇年、柴原は自ら名乗りを上げ県漁連の理事になるが、それは漁業の先行きに危機感を感じての決断だったろうか。そして三年後の昭和五三年には県漁連の会長になる。

『宮城県漁連五十年史』によればこのころは、「苦難の時代」にあたる。昭和四八年のオイルショックにより成長はマイナスに転じ、続く二〇〇海里規制は、県内はもとよりわが国の漁業に大きな転換を求めた。

世界中が水産資源の確保に走ったこの規制は、じわじわと水産業全体を苦しめていくが、不安に真っ先に反応したのは市場だった。規制が本格化すれば市場から魚が消える。そんな予測から一部の流通業者が買い占めに走り、魚価は異常に高騰、結果消費者の魚ばなれを生んだ。しかし、消費者は魚が嫌いになったのではなかった。新鮮で美味しい食の需要は強まっていたし、産地直送のフレーズは惹句にもなっていた。

良いものは工夫すれば売れる。

時流をそう判断した県漁連は、自ら流通チャネルを開拓し、県水産物の売り込みに

出向いた。柴原の提案は、漁業の危機に際しふたたび生きたのだ。

直販の最初の舞台は、首都圏に当時七八店舗を有した大手スーパーチェーンだった。昭和五三年五月、ちょうど柴原が県漁連会長に就いた直後に開催した「みやぎ漁連まつり」では、カツオやニシンなどの鮮魚に加え、かまぼこなど数十品目を売ったが、とくに三万個を無償提供したホヤの独特の味と香りは、都会の人々に宮城の海の豊かさを強く印象付けた。

戦後漁業の黎明期から見れば、生産者が販売に関わることは共同販売でさえ画期的であり、さらに一步踏み出し流通事業まで進出したのは、まさに壮挙の言葉がふさわしい。しかし、戦地で命を捨てる覚悟を持った柴原にとっては、慣例にとらわれず新しいことに取り組むなどわけのないことだったろう。また収容所生活でのぎりぎりの駆け引きは、動静を読む才覚を鍛えたのではないか。

柴原が先頭に立ち取り組んだ流通事業は、平成になってから郵便事業やコンビニエンスストアとの連携に進化発展し、県水産物のブランド化につながった。

人に恵まれ、伴侶に恵まれて

結婚して間もなく、和子は、茶の間のテーブルに事業資金の借用書があるのを見つけた。サラリーマン家庭で実直に育った身には、金額と借用書が無造作に置いてある

ことに驚いた。

こんな借金して大丈夫なのか。恐る恐る夫に聞くと、「たとえ今日一円借りても明日一〇円稼げばいいじゃないか」と言った。そんなものか、と思う一方でそれが事業家の考え方かと納得した。それだけなら無謀な賭けをする人のようにも聞こえるが、実際は慎重な人だった。石橋は叩いて渡るし、交渉ごとでは「近江商人のごとく即答は避ける」と話し、しっかり計画を立てて進めた。

県漁連の会長を退く数年前からふたりで登山をはじめたが、どの山に登るかは毎年正月二日に決めた。遊びでも計画性を大事にしたし、それを正月にするのも夫らしいと思う。

利尻山、大雪山、秋田駒ヶ岳、早池峰山、月山。富士山は高山病で登れなかったが、夫は三回登ったはずだ。どこへもふたりクルマで出かけた。山登りを楽しみ、温泉宿でしばしのんびり過ごした。

塩釜市漁協でも、県漁連でも夫はたくさんの人と関わった。仕事柄、対立もあった。味方千人、敵千人というが、ひっくるめれば人に恵まれたと思う。それでもね、やはり、いちばんの理解者は私だったのよ、そういって和子は笑った。

宮城県漁業協同組合連合会第六代会長
全国漁業協同組合連合会理事

阿部 國夫

【あべ くにお】

-
- 1921(大正10)年 4月10日、荻浜村小竹浜
(現石巻市)に生まれる
- 1962(昭和37)年 小竹浜漁業協同組合組合長
- 1972(昭和47)年 宮城県漁業協同組合連合会理事
- 1978(昭和53)年 宮城県漁連副会長理事
- 1990(平成2)年 宮城県漁連第六代会長
- 1992(平成4)年 全国漁業協同組合連合会理事
- 2008(平成20)年 2月18日死去

海との調和をふたたび
なぎ
凧の人が果たした漁業の転換

船主の長男が描いた夢

牡鹿半島の付け根にある小竹浜は、入江が浅く外洋の影響を受けやすい。船を舫い、漁を営むには波を抑えなければならぬが、入江に蓋をするように浮かぶ弁天島が浜を良港とした。ゆえに人々は、島に龍神でもある弁天様を祀る。

阿部國夫はこの波穏やかな浜で、漁船の船主の長男として生まれた。五人きょうだいの四番目で、三人の姉と妹がいた。

小竹浜では家を屋号で呼ぶ風習があるが、船主は船が豊かさのしるしとなったので、國夫の生家は、持ち船の「萬亀丸」という名が家の通り名になっていた。

※ばんきまるのくにおさん

そう呼ばれることは、浜の人々に敬われ、慕われたことを物語っていたのだ。

國夫は渡波の宮城県水産学校（現宮城県水産高校）を出ると、函館水産高等学校（現北海道大学水産学部）へ進む。

後年、彼は新聞のインタビュで、子どものころの夢は捕鯨船の砲手になって南氷洋に行くことで、函館の学校へ行ったのも「船長の免状をとって砲手になるつもりだった」からと話している。船主の長男ながら夢のために学問を修めることができたのは、何より生家が裕福だった証だろう。

しかし捕鯨船の砲手になって南氷洋に行く夢は叶わなかった。高校在学中に志願し

て入隊、南方戦線に赴いたが病を得て帰還し、戦後しばらく療養したからだ。さらに、わが子の健康を不安とした父母は、國夫に家業を継がせず、長女に婿を迎え継がせた。

ここでもし彼が病を得なかつたら、と考えてみる。家業を継いだか、あるいは思い描いた通り捕鯨船の砲手になっただろうか。

阿部を「くにおさん」や「あべくにさん」と呼ぶ人やともに仕事をした人は皆、彼を「温厚で優しい人だった」と言う。いつも笑顔を絶やさなかつたと思いきす人もいる。彼がもし違う人生を歩んでいたら、背広で仕事をする 것도、組織のトップとして苦勞することもなかつただろう。しかし一方で、その人柄を思い起こし、彼について語る人もこれほどはいなかつたかもしれない。

弁天様の海に育まれて

療養し健康を取り戻した阿部だが、実家の船は徴用のため失い、沖に出るすべはなかつた。それでも小船に乗って刺し網をすれば、食うには困らない程度の漁はあつた。小竹浜漁業協同組合に入り、漁のかたわら事務員として働いた。そして昭和二十七年、専務理事になる。

その年の五月一八日の夜、小竹浜は大火に見舞われた。翌日は小学校分校の遠足の

予定だったので、枕元に用意していたリュックを持って逃げた、と思いつく人もいる。一一〇戸余りのうち六三戸を焼失した火事は、『石巻市史』にあるように、全滅的火災だった。

このとき浜のリーダー的立場にあった阿部は、被災した住民の再建資金を確保するため、一人、県庁や仙台の農林中央金庫に向いたという。どんな条件で幾ら借り入れたか記録はないが、百円紙幣をリュックいっぱい詰めて帰ってきた度胸と行動力に、浜の人々は度肝を抜かれた。

漁でも尽力した。自らが「定置網の新しいやり方」と語った建網を導入したことで豊漁が続き、住民たちは再建のために借り入れた分を返済した上に、生活も上向いたという。

さらに昭和五〇年頃には「粕谷式定置網」を宮城県内で初めて導入し、浜をふたたび活気づかせた。内湾の回遊魚漁に適した定置網は西日本で実績を上げていて、評判を耳にした阿部はその可能性に賭けた。

「波穏やかな小竹浜にはうつつけの網だろう」。読みは当たり、浜は空前のニシン景気に沸いた。

吉野八重子は、小竹浜漁協のころから阿部とともに働いてきた。当時の様子を振り返る。

「國夫さんには、新しいものをどんどん取り入れる先見性があったと思います。新

しい網にしてからニシンが面白いように獲れて、おかげで家を新築した人もいました。町へ行つて、小竹浜の者だと言うと、ああ、ニシン御殿の、と言われることもありました」

こうして浜を豊かにした阿部が人望を集めたのは言うまでもない。彼の働きを支えたのは、穏やかで豊かな弁天様の海だ。この時代、浜の生態系と暮らしのリズムは調和していたが、同じころ、日本の漁業は二〇〇海里問題に直面し、大きな岐路に立たされていた。そして阿部はこの後、宮城県漁業協同組合連合会（以下県漁連）の会長として転換を迫られる地域漁業を率いることになる。

漁業に突きつけられた責務

一九九〇（平成二）年、阿部は県漁連会長に就任した。

資源ナシヨナリズムに端を発した二〇〇海里規制は、わが国の漁船を外国の領海から締め出し、操業の場を公海へ移動させたが、公海での他国との漁獲競争が強まると、このころには乱獲と漁法が問題になった。

二〇〇海里問題はもはや感情の対立ではなく、資源保護問題として漁業に転換を迫ったのだ。これによりスケソウダラ漁が大幅に削減され、希少生物の混獲防止を目的に規制を繰り返してきた流し網漁も幕を閉じ、漁師の豪勢なイメージとともに一時

代を築いた北洋漁業は衰退した。

阿部は会長就任に際し、機関紙に厳しい環境にある漁業を変える決意を寄せているが、そこでは資源管理型漁業の充実をとくに訴えている。

「底引き網が発達した。定置網とは違い、待つて獲るのではなく、産卵場もごっそり引いてしまう」

漁業資源の問題を述べ、育てる漁業への取り組みが重要とした考えの裏には、小竹浜で実践した定置網への思いがあったかもしれない。もちろんすべての漁業が定置網で間に合うはずもないが、漁業に自然との調和を取り戻すことが重要だと強く意識していたに違いない。

また阿部が戸惑いを感じると話した漁業技術の進歩は、環境問題となって表れた。漁具はどんどん改良され、効率のためつねに新しいものの利用を求めたが、廃棄物処理問題は、漁場や浜の環境を壊し漁業自身を苦しめた。

一九九二（平成四）年、阿部は浜に野積みされ悪臭の原因になっていたカキ殻の再利用に取り組んだ。

当時建設がスタートした日和港（石巻市）の埋め立てと防波堤建設への再利用を提案すると採用が決まり、カキ殻は建設資材として再生した。これはリサイクルと省資源の建設を推進する一石二鳥の事業モデルとして全国から注目を集めた。

資源と環境保護の流れは、日本の漁業に大きな転換を促した。これ以前の漁業は思

いのままにできたから仕事は洋上で完結したが、時代の波は漁業を漁獲だけでは済まないものに変えた。漁業は新しい債務を突きつけられたのだ。阿部はそうした波を乗り越え、調和によって漁業に新しいチャンスをもたらした。

人の調和で漁業を守る

船渡隆平は県漁連に長く勤め、部下そして専務理事として阿部をサポートしてきた。仙台と石巻、県内各地を行き来する車中でいろいろな話を聞いたが、阿部はいつも「漁業は協同の力で守るべき」と話した。

阿部のライフワークにもなっていた沿岸漁業での資源管理型漁業への取り組みは、獲る魚の大きさを規制することで地区ごとに進められた。しかしバラバラな規制は、ある地区の規制が、他の地区の漁の妨げになるという新たな問題を生んだ。

これを象徴するのが、回帰サケ・マスの漁獲問題だ。サケ・マスは川に帰さなければならぬが、遡上を前に沖合網で漁獲されることが多かった。それではサケ・マスは育たない。そこで回帰時期に網を引き上げることが求められた。しかし回帰を確実にするには、県内のすべての網主が同時に行なわなければならない。魚が網を避けて川を目指すわけではないからだ。

「サケ・マス回帰のために、一斉網上げを実現しよう」

もはや漁業にエゴは許されない。阿部は、新しい漁業には海との調和の前に、人の調和も必要と語り、自ら県内の定置網業者を訪れ、説得に当たった。こうして県内一斉の網上げを実現させ、内水面ふ化場の経営安定と資源育成に貢献した。

漁業における協同の大切さを説いた阿部は、県内三一の地区漁協が合併することを強く望み、会長を退いた後も活動を続けた。そして平成一九年、願いが叶い、三一の漁協と県漁連、さらに宮城県信用漁業協同組合連合会を包括して宮城県漁業協同組合が誕生した。それは、阿部國夫がこの世を去る前年のことだった。

心に凧の海を持つ人

阿部哲は、國夫の甥にあたる。宮城県水産高校の後輩でもある。卒業後は、無線通信を学び、捕鯨船に乗った。甥は叔父の夢を叶えたのである。

そんなつもりはなかったけどね、と言いながら、哲は叔父のことを話す。

「同じ道を望んだのも血筋なのかな。叔父もそう考えたことがあったとは聞いたが、そのために学校に行ったとはね。夢だったんだね」

阿部は、同じ夢を持つ甥に口うるさく言うことはなかった。ただ、仲間の伝を頼り、甥の夢がうまく運ぶように支えた。伝えたいことは幾らでもあったろうに、そうせずに見守ってくれたのも、くにおじらしいな、と話す。

いつも穏やかだった阿部だが、仕事のことになると熱く語り、ときには話が止まらなくなることもあったという。とくに漁業関係者の団結が求められるような問題では、言葉が激しくなることもあった。

哲の妻明子は、あるとき、漁のことで叔父の口調がいつになく激しいのが気になり、さりげなく意見したことがある。黙って聞く叔父を前に、怒られるかと思ったら、急に笑顔になり、冗談話を始めたという。そのときは、話を通じないからとごまかしたのだろうと思つたが、いまになると身内に心配をかけまいとする叔父の気遣いだったのだと思うという。

県漁連会長という重責では、言葉にできない鬱積もあつたに違ひなく、穏やかな笑顔の内には、鉛のように重いものを抱えていただろう。激務のかたわら、暇を見つけて海に出て網を立てたというが、それが何より心を癒した。

「魚の顔を見るとホッとする」

冗談めかしてそんなことも言っているが、気苦労を思うと、それは半ば本心だったのだろう。

仕事での阿部は、奢らず、好悪を表にするのを良しとしなかった。そこには、自分の主張を抑えて周囲を気遣う、静かで強い意志があつた。

「部下としていろいろサポートしてきたけど、今思うと、あの笑顔にこつちが支えられていたように思う」。船渡は、〃会長〃や〃あべくにさん〃と慕った人の心の大き

さに思いを馳せる。

吉野は、定置網の建て方にも優しさが表れていたと話す。「ニシン漁が盛んなころ、沖では網が立て込んでいました。やり方次第では自分に良いように網を立てることもできましたが、國夫さんは、なるべく多くの網に漁があるようにしました」。

その人柄を偲ぶ言葉から思い浮かべるのは、穏やかな海の景色だ。静かで、強くて、大きくて、優しい海。そこは、どんな問いを投げ入れても決して波立たない。阿部國夫は、そんな風の海のような人であった。

宮城県信用漁業協同組合連合会第五代会長

小山 亀吉

育み鍛えた男気と冷静で
地域漁業を支える

【おやま かめきち】

-
- 1925(大正14)年 気仙沼町(現気仙沼市)に生まれる
 - 1941(昭和16)年 家業の水産加工業に従事
 - 1968(昭和43)年 気仙沼漁業協同組合理事
 - 1969(昭和44)年 気仙沼冷凍水産加工業協同組合
初代組合長
 - 1981(昭和56)年 気仙沼センター水産加工業
協同組合組合長理事
 - 1984(昭和59)年 気仙沼漁協組合長
 - 1994(平成6)年 宮城県信用漁業協同組合連合会
第五代会長
 - 2011(平成23)年 1月12日死去

男気と冷静を使い分けて

ピンク色のシャツがよく似合い、明るいベージュ色の外車に乗る洒落た人。愛妻家で、東京への出張によく奥さんをともなった。幼いころに母親を亡くし寂しい思いをしたので、同じ境遇の子どもには親身に世話を焼いた。

趣味も多彩だった。麻雀、カラオケ、日本舞踊を習い、黒田節が得意。またゴルフに至っては、「気仙沼でオレが一番に始めた」と豪語するほどのめりこんだ。

無論、酒席も好んだ。仕事の酒は相手がもう飲めないというまでつきあい、心を開き語り合えば事はうまく運ぶ、といった。気仙沼漁業協同組合の組合長になってからは長身でスマートな体型もだいぶ貫禄がついたが、それは付き合い酒もおいしく飲めた代償だったか。それでは続かないとタバコをやめ、健康にも気を配るバランス感覚の持ち主。

義理堅く、情にもろい。相手の事情を斟酌し、損は承知で男気を見せるが、その一方で人の心を見抜き交渉する駆け引きの上手さもあつた。また間に立つ場合は一方に肩入れせず、つねに公平を旨とした。利害がぶつかるなら双方の意見を聞き、冷静な判断を下した。結果、多くの人望を集めた。男気と冷静。それが小山亀吉の原動力だった。

小山家と漁業の関わりは明治の末に父、亀一郎が水産加工と海運を手がけたことに

始まり、のちに魚問屋を兼ねるようになる。気仙沼の魚問屋の特徴は、魚の売買だけでなく海産物の加工も手がけたことで、夏のカツオ節、冬のちくわ製造が主力だった。大正一五年発行の町勢を紹介する冊子では、竹輪蒲鉾製造業の欄に「金メー海産物製造場」小山亀一郎の名前がある。ちくわ製造は、明治に始められたサメ漁から発展し、大正の半ばには全国一の生産量を誇る気仙沼の名物になる。海運業から身を起こした亀一郎は、亀吉が生まれるころにはその第一人者になっていた。

また金メー（以下カネシメイチ）はほかの魚問屋同様に、漁業者への融資もしていた。魚問屋の融資事業は加工業より前に成立し、融資は船の建造、修理や資材提供などの現物給付に依った。返済には魚の売り上げが充てられたが、重要なのは、貸し手である魚問屋と借り手の漁業者の信頼関係である。当時の魚問屋について個々が現在の漁協のような役割を担っていたというが、いわば魚問屋は資本家であり港町のキーマンであった。

昭和に入るとカネシメイチはさらに事業を広げ、加工業のほかに船の仕込みや船宿を兼ねるようになった。動力船の登場で、遠く四国や紀州の船がやってくるようになったからで、長い漁のために船具や食料を整え、船乗りたちに宿を与えた。風呂を沸かし、酒席を用意し、洗濯も引き受ける。ケガや具合の悪いものがあれば病院も世話した。

亀吉は、船乗りたちのために世話を焼く家族や町の人々に触れながら育った。のち

の男気と冷静の根っこには、漁業を支え、港の世話役として働く家業の風景があったのだ。

ホームグラウンドをつくる

一九五五（昭和三〇）年、カネシメイチは冷凍冷蔵業を始める。このとき、小山は三〇歳。弟ともに家業を仕切り、隆盛とともにその名は広く知られるようになっていた。この翌年には気仙沼魚市場が完成、昭和三三年からは一二年に渡ってサンマの水揚げ量日本一を記録するなど、サンマは港町の高度成長を象徴した。しかしサンマは足の早い魚で、遠くまで流通させるには鮮度を保つことが重要だった。小山はそこに着目し、冷凍サンマなどで新しい事業を起こしたのだ。

このころの小山は、自ら「やんちゃだった」と語ったようによく遊んだ。メグロ製のバイクにまたがり塩竈の浦霞コースへゴルフに出かけたが、仲間には魚問屋の後継ぎたちがいた。昭和四四年、小山は気仙沼冷凍水産加工業協同組合（以下冷加工）を設立、初代組合長になるが、彼らはその設立メンバーにもなった。同じ稼業、同じ時代に育った者同士は馬が合った。小山は冷加工設立後、生涯組合長を退くことなく、周りも誰一人辞めさせる気もなかったというほどそこはホームグラウンドといえる場だったが、愛着には仲間の存在があったのだ。

小山が冷加工を設立した背景には遠洋漁業の活況がある。インド洋から大西洋、そして北洋へと遠洋漁船が版図を拡大した昭和三八年、カネシメイチはカツオ一本釣りで漁船経営に乗り出した。しばらく大漁が続いたが、当時の気仙沼魚市場は規模は十分だったものの豊富な水揚げに應える冷凍設備が不足していた。そのため静岡の焼津や清水に水揚げせざるを得ず豊漁の喜びも半減した。北転船のスケソウダラも好調だったが、多くは石巻や塩竈に水揚げしていた。

漁船漁業は花ざかり、しかし気仙沼は役不足で水揚げできない。そんな事情が冷加工を立ち上げた理由だった。

冷加工では共同の冷凍設備と一次加工場を持ち、遠洋漁業者の受け皿となることとした。また融資事業や組合員の経営安定と相互扶助のための活動も行なうとした。目標は単純明快、「漁協に負けない組合にしよう」で、それを言ったのはもちろん、小山である。理屈やへつらうことを嫌った彼らしい言葉は、分かりやすく、仲間を結束させる力強さを持っていた。

親分肌の気概で大規模漁協を率いる

漁船経営の好調と冷加工の立ち上げなど、小山を躍進させた風は、漁業全体のものでもあった。

しかし昭和四八年のオイルショックを契機に風向きは大きく変わる。燃料や資材が高騰する一方で魚は売れず価格は低迷、さらに二〇〇海里問題が漁業を逆風にさらした。

もちろん小山も例外ではいらなかった。本業では漁船の不振を加工業でカバーしたが業績は振るわず、昭和五九年五月に気仙沼漁協の組合長になってからは、地域漁業全体についても考えなければならなかったので心労も重なった。

そもそも気仙沼漁協は、日本有数の水揚げを誇る魚市場を運営するため地域漁協とはいえ規模は他を圧倒し、さまざまな業者が会員に名を連ねた。関わるものと取扱量、金額が大きくなれば利害がぶつかり、結果、それを束ねる組合長には相応の力量が求められた。度胸と腕力を恃みに己の意思を押し通そうとする猛者を諫めながら、ほかの要望を聞き、公平な判断で議論を収束させる。組合長には親分肌の気概が求められたが、かつての魚問屋の風景を根っこに持つ小山にとっては、たやすい仕事だったかもしれない。そして、経験を重ねるごとに、兼ね備えていた能力を磨いていった。

気仙沼漁協の組合長になったのと前後して小山は団体の理事や役員を務めることが多くなったが、仕事の基盤は漁協においた。毎朝九時に出勤し、夕方まで組合員とともに働いた。出かけることも多かったが、自席か会議室、あるいは応接室にその姿があった。当時職員は一二〇名を超えていたが、小山は全員の様子と性格まで把握していたという。

もちろん厳しさもあった。職員にミスがあれば人前でも注意した。しかし長く引きずることはなかった。怒ると怖いが笑顔もひとときわ印象的だった。冗談も飛ばした。冷加工で口にした目標は「漁協に負けない組合にしよう」だが、漁協職員によく言ったのは「石巻や塩竈に負けるな」だった。ここでもまた単純明快。分かりやすい目標を与え、職員のやる気と結束力を高めるのが小山のやり方だった。

感情を抑え、ただ目的のために

小山が宮城県信用漁業協同組合連合会（以下信漁連）の理事に就いたのは、一九九一（平成三）年で、三年後には会長になった。

信漁連は漁協の信用事業を手がけ、県内の地区漁協などを会員に構成された。「浜の金融機関」といわれるように、直接的な取引は沿岸漁業者や小規模な漁業経営者であることが多く、会長は会員漁協の組合長が務めるのが慣例だった。

一方、小山は気仙沼漁協の組合長ではあったが、大型漁船と加工業の経営者である。慣例通りなら小山より会長にふさわしい人もいただろう。冷加工と信漁連のつながりは事業の隆盛とともに結びつきを強くしていたが、慣例から外れるのは画期的なことではなかったか。しかし会員たちは総意をもって小山を会長に選んだ。見方を変えれば、小山の人望が広く漁業者に知られていたということでもある。

とはいえ金融事業は専門性が高く、素人が簡単に把握できるものではない。しかも時代はバブル崩壊を経て、金融ビッグバンが始まろうとするときに混迷を深めていた。その認識は小山にもあり、専門的なことは専務理事以下に任せ、自分は大所から事業をコントロールするようにした。

オレががんばりすぎると、下の者がやりづらくなるからほどほどにする。そんなふうにも言ったように、小山は冷静な判断を謙遜で包むセンスも持ち合わせていた。

信漁連の会長になって間もなく、県内の漁協で負債による経営危機が表面化した。そうした問題は以前にもあったが、負債額が桁違いだった。原因は昭和四〇年代に発生した会員の大型倒産と貸付金や購入未収金など、固定化した債権の整理で累積欠損金を抱えてしまったためだが、好不調の波がある養殖で挽回しようとしたことが傷口を大きくした。数字上ではもはや存続できない状態だったが、放置することは養殖と沿岸漁業で暮らす地域漁民を見殺しにすることである。世間では自己責任の言葉が聞かれたころだが、それを漁民に問うのは酷だった。

「漁協系統一体となって支えよう」

それは支援を決めた運営検討委員会の総意だったが、小山は信漁連会長として特に熱く支援を訴えた。そして再建のために漁協系統団体と行政により支援基金を創設し、運用利息を支援に回すこととした。

この問題に直面したとき、小山は何を思ったか。長く小山を支えた人は「予断や感

情を排除し、ひたすら目的のために働いたのではないか」と言う。

積年の負債を見過ごした責任を問う気持ちや、あるいは漁民がかわいそうといった情に流されることなく、まっすぐに課題を見つめ、最も合理的な方法で解決に取り組む。この場合なら、漁協を救うことだけを考え進む。つねに公正公平であった小山ならそうしただろうと思える。

港町のキーマンとして記憶に生きる

金融も手がけた魚問屋稼業に育ち、その六〇年後に「浜の金融機関」のトップになった。その縁について本人は特段気にすることもなかったが、家業の風景は信漁連の仕事を支えていたはずだ。

小山は長い経歴において、さまざまな立場に身を置いた。幼いころに船員の苦労を間近にし、後年はその経営者になった。魚問屋としては魚を卸す側に、加工業者としては買う側になった。金融では貸し手と借り手になった。相対する両方の立場を経験したがゆえに、小山は対立し揺れる人の心を理解できたのだ。彼に備わった公平さ、男気と冷静を使い分けるバランス感覚はそこに由来しているのだろう。

平成一四年、小山は気仙沼漁協の会長を退き、翌年には信漁連会長を退いた。それから八年が過ぎた平成二三年、年が明けて間もなく小山は突然この世を去った。冷加

工の新年会で昔なじみのメンバーに囲まれ、飲んで、食べて、笑い過ごしたすぐあとのことだった。

老いたとはいえきびきびした所作や口ぶりは相変わらずだったので、突然の別れをたくさんの人が惜しんだ。

小山が亡くなって間もなく気仙沼は、東日本大震災の津波と火災で壊滅的な被害を受けた。そこで小山を思い出し、あの津波を見ていたら死ぬに死に切れなかったろうから、見ずに逝ったのも考えようでは幸いだったかもしれない、と言う人がいる。一方で、あの人なら被災もバネにふたたび立ち上がっただろうと言う人もいる。そんな会話にわずかにやりきれなさを残しつつ、港町のキーマンは、いまでも多くの人々の記憶に生きている。享年八七歳だった。

3

森^も林^りをつくる

宮城県森林組合連合会

宮城県森林組合連合会第五代会長
社団法人宮城県民の山造成会初代会長

高橋 友衛

貫いた治山治水の信念
足跡にひこばえ萌える

【たかはし ともえい】

1885(明治18)年 10月18日、大口村
(現大崎市)に生まれる
1949(昭和24)年 宮城県森林組合連合会第五代会長
1953(昭和28)年 社団法人宮城県民の山造成会初代会長
1970(昭和45)年 4月29日死去

一人米一升の抛金で造林を

進駐軍払下げの幌付きジープが一台、土ぼこりを上げて街道を走ってゆく。目指すのは県内市町村の公民館や集会所だ。

夕暮れどき「文楽と映画の夕べ」の告知が張り出された会場に、一日の仕事を終えた人々が集まってくる。鳴子町中山平の住人による文楽と借りてきたフィルムの上映会に合わせ「宮城県民の山造成会」（以下造成会）への加入呼びかけが行なわれるのだ。

「水害から田畑を守るには造林による治山治水を進めなければなりません」
造成会の発案者、高橋友衛が熱弁をふるう。

「県民一人当たり米一升の抛金で県民の山を造成しましょう。あなたもお金を出すことで山持ちになります。ぜひ加入をお願いします」

繰り返し訴える高橋の姿に聴衆が惹き込まれていく。集会場に熱気がこもる。参加者に、造成会の強烈な印象を植え付けて会は文楽と映画の上映に移る。集会を終えて後片付けをし、宿に帰るのは早くて深夜一時、遅いときは零時を回ることもあった。

昼夜を分かたず続く巡行。冬は寒さに耐え夏は汗が流れるままジープで移動する。六〇代後半の高橋友衛にとってそれは決して楽な仕事ではなかったはずだが、造林運動の歩みを途中で止めることはなかった。

北上川の氾濫の原因は山にある

高橋友衛は一八八五（明治一八）年一〇月一八日、大口村（現大崎市鳴子町）に生まれた。生家は東鳴子温泉の老舗の温泉旅館で広大な森林を保有する資産家だった。

私塾の仙台数学院（現東北高校）に学んだ後、家業である旅館と建設・製材の会社を継いだ。

明治期の大口地区は湯治客が往来する鄙びた山村で、冬は雪に埋もれ長い越冬生活を強いられた。大正初期に開業した陸羽線が川渡、鳴子へと延伸されると人や物資の行き来も活発になったが、深い森と湯煙のたたずまいに変わりはなかった。

故郷で高橋は熱心に家業に打ち込む。誠実な人柄はやがて村民の信頼と支持を集め、一九二二（大正一一）年、川渡村の村議会議員に推されて当選。五期二二年を務めたのち玉造郡選出の宮城県議会議員となり、名を揚げた。

そんなとき宮城県をキャサリン台風が襲う。

一九四七（昭和二二）年九月、六日頃から断続的に降り続いた雨は次第に暴風雨へと発達し、北上川の水嵩を増やしていった。一五日には鬼首の荒雄川大橋が流出。鳴子温泉では地盤の緩みで山崩れが起き、一六日にはついに北上川の大泉堤防が決壊して、広い範囲が浸水した。警戒にあたっていた佐沼警察署の警察官一名が洪水の犠牲になり、登米町（現登米市）では耕地・人家が一〇日間水に浸かった。田畑も水没し、

農民を打ちのめした。

高橋は県議一年目にして自然災害の試練と向き合うことになった。

当時北方村（現登米市迫町）の村長だった袋光雄（のちの宮城県農協中央会長）が村内の被害状況を視察して庁舎に戻ってきたところ、高橋が訪れて、治山治水の必要性を熱く説き始めた。

「村長さんも良く分かっているでしょう。水害の原因は、戦争で山の木が乱伐されたことにある。このまま放置しては、いつまで経っても日本は再建できない。いまこそ本気になって造林を行なわなくてはいけないのです」

被害の大きさを目の当たりにしてきたばかりの袋は、「北上川の氾濫を抑えるために上流の造林を」と訴える高橋の信念に共感し、協力を約束する。

県民の山造成運動へと進路を取る

戦時中、軍事物資などの木材需要を満たすため森林の伐採が進んだ。さらに戦後は復興のために大量の木材が必要となり、次々と山から木が伐り出された。山は荒廃し、治水機能はぜい弱になる一方だった。

高橋の脳裏には、明治時代、暴れ天竜の異名を持つ天竜川を植林で治水した金原明善の運動があった。金原は天竜川の氾濫を治めるためには流域に健全な森林がなけれ

ばならないと考え植林事業を進めた静岡の人だった。金原の取り組みに感銘を受けていた高橋は、天竜川の試みを心の拠り所とし、さらに治山治水の信念を強くした。

高橋の子息、高橋祐幸は『県民の山30年の歩み』のなかで、「水害を防ぐためには何とかしなければと考え、進駐軍などにも接触してみても、造林運動を進める必要があると話したのです」と当時の状況を語っている。父子の会話を契機に造林運動は「県民の山造成運動」へと明確な像を結ぶ。

昭和二四年、高橋は宮城県森林組合連合会（以下県森連）の第五代会長に就任。会長の職を務めるかたわら、いや會長職に就いたからこそ使命はより重要性を帯びたであろう。高橋は、造成会設立に東奔西走の日々を送ることになる。

当時発行されていた林材新聞東北支社長の鈴木亀造は、高橋の姿を「この運動に関する限り異常とも思える熱心さで、街角でも、汽車の中でも誰れ彼れかまわず山の現状を語り、造林の必要性を説き、将来の資産増について語る姿がいまでも鮮明な記憶として残っており」と記している。

ちように「荒れた国土に緑の晴れ着を」をスローガンに第一回全国植樹祭（昭和二五年）が山梨県で開催され、植林への関心が高揚していた時期でもあった。

第三者による造林を認めた「造林臨時措置法」や「緑の羽根募金」、人づくり・村づくりを掲げる「学校植林運動」など次々と繰り出される林業政策に、高橋は我が意を得たりの思いだったのではないだろうか。

「協同」で植林し、川を治めていく事業

運動は、「植林よりも山林開発をすべき」といった意見や一度予算化された基金が町長改選で覆るなどの抵抗に遭いながらも、短期間のうちに賛同者を増やしていった。

造成会第三代会長の勝井昌徳はその理由に、高橋の人柄と林業経営の手腕、「高友（高橋友衛） 式間伐法」への高い評価を挙げている。

高橋は、樹高が高くても枝張りの不均衡な木は伐倒し、樹高が低くても枝葉量の多い木は残すという高友式間伐手法を編み出し、県下に普及させた、いわば林業のパイオニアだった。若手の林業家たちは高友式間伐法を習得するため、こぞって高友参りをしたという。「そこに県民の山という話がでてきた。私の父親は高友さんの行なうことに間違いはないからと言っていた。他の人もそう考えて信頼したのでしょう」。勝井はそう述べている。

昭和二八年五月二〇日、社団法人宮城県民の山造成会が設立され、高橋はその初代会長に就く。

会員は一口一〇〇円の基金を拠出するのだが、当時米一升の値段が約一〇〇円だった。そこで「県民一人当たり米一升の拠金で県民の山を造成しましょう」と呼びかけ、高橋も運営資金として一〇〇万円の私財を寄附した。

県民が基金を拠出して会員となり造林事業を実施する団体は珍しく、勝井は「狙い

は、林業に関係ない人たちにも山に関心を持ってもらおうと同時に、その森林の公益的な面、すなわち自然環境とか災害のときの役割といったものについて理解していただくための構想だったのですね」と述懐している。

会員になったとしても山林を私有できるわけではない。県民の山造成運動は、まさに「協同」で源流の山に木を植え、緑を増やし、氾濫する川を治めていこうとする事業だった。

五四〇ヘクタールの山に緑がよみがえる

造成会は、発足と同時に加入申し込みが始まり、昭和二八年度末には会員数二〇五人、基金額約三〇〇万円と幸先の良いスタートを切る。

造林地を求めて契約を交わし、一〇月一七日には川渡村大口の湯沼開拓農協が所有する山地で第一回の植樹式を開催した。

しかし昭和三〇年代の林業界は、燃料需要の変化で里山林がそれまでのように薪炭用林として利用されなくなるなど、転換期に差し掛かっていた。

基金が思うように集まらなくなった造成会は、結局当初計画していた二〇〇〇ヘクタールの造林費用を基金のみで賄うことはできないと判断。五四〇ヘクタールまで造林を進めたところで第一期事業を終了した。

高橋にとっては苦渋の決断だったろう。だが戦争で荒廃していた山林が県民の浄財によって再び緑の山に変わるといふ事実は、人々を大いに勇気づけたはずだ。

一方、高橋は県森連会長としても多忙な日々を送っていた。

昭和二六年、森林法の成立で県森連は協同組合として傘下に一一一組合を数える組織に生まれ変わる。

この森林組合を、真に協同組合の理念に立脚し、社会経済の変動や地域の情勢にも対応できるように体制を整えること。それが県森連の喫緊の課題となった。

高橋は陣頭に立って第一次・第二次の森林組合振興対策を策定し、各森林組合の経営基盤の改善に努めた。また県が管理する種苗圃場を借地して、戦争で一時中断していた苗畑経営を再開したのもこの時期である。

まさに縦横無尽の活躍だっただけに、健康には人一倍気をつけていたようだ。「あるとき下部を固定した自転車があったので、何をするのか聞いたところ、足腰が弱ってくるからこれで自転車乗りをし、足腰を強くするのだと申しておられました」。造成運動に奔走する高橋をジープでの移動や募金活動で支えた県森連の佐藤正三は、懐古談のなかでそうふり返っている。

一途に貫いた治山治水の信念

高橋は部下や後輩たちから敬愛を込めて「高橋翁」と呼ばれていた。「熱血漢、熱心な人」が周囲の共通した人物評である。

こんなことがあった。造成会の佐藤久弥理事が、仲間とともに高友旅館に宿泊したときのこと。宴会を始めようとした矢先、高橋が高友式間伐法の講義を始めた。唾を飛ばしながらの熱演に佐藤たちは言う言うの体で引き上げ、風呂に向かう。だが高橋は風呂まで付いてきて入浴中もずっと間伐法の講義を続ける。ようやく床についたと思ったらそこにも掛け布団を持参した高橋が来て一晩中びっしりと講義を聞かされたという。

また人情家の一面も持ち合わせていた。造成会設立のため開催していた「文楽と映画の夕べ」。演目は毎回同じなので、上演する方は台詞も頭に入り、感激も薄れる。しかし高橋は、お家騒動に母子の別れをからませた悲劇『傾城阿波鳴門』が上演されるたびに毎回涙を流していたという。人情の機微に通じていたからこそ、私心のない行為に身を賭すこともできたのだろう。

高橋は県民の山造成運動を始めるにあたって次のように趣意書をしたためている。

「私が提唱する『県民の山』造成は本県より水害を除くため、県民の熱情と赤誠の結集をもって荒廃せる山を緑化し、水害の抑って来たるべき根本を治め、その森林資

源の増殖を図り、等しく山林の恩恵に浴し、造成せられし森林は本運動に賛同せられし人々によって永く管理経営致し、水害を除きつつ森林資源の増殖を期す民主安定への建設運動であります」

一途に治山治水の信念を貫いた高橋友衛。

「山は祖父が植えて孫が利を得る」の習い通り、翁の歩いた跡には孫生えが萌えて故郷の山を潤し、川をなだめたのであった。

宮城県森林組合連合会第七代専務理事

三浦 義孝

「三出し運動」を道標に
人と組織を導いた実践者

【みうら よしたか】

-
- 1911(明治44)年 1月1日、一迫村(現栗原市)に
生まれる
- 1932(昭和7)年 朝鮮総督府に入府
- 1942(昭和17)年 華北交通(株)に入社
- 1946(昭和21)年 全国農業会東北支部に奉職
- 1948(昭和23)年 宮城県燃料配給統制組合に奉職
- 1953(昭和28)年 宮城県森林組合連合会に奉職
- 1967(昭和42)年 宮城県森連参事
- 1971(昭和46)年 宮城県森連第七代専務理事
- 1991(平成3)年 4月3日死去

薪炭倉庫で荷をさばく四二歳の新人

薪炭倉庫で真っ黒になりながら働く男たちの耳に、貨物車の汽笛が響く。東京へ向かう貨車だろうか。思いを巡らす間も手は休めない。五〇俵は関東へ、この一〇俵は仙台市内の小売店へ、これは学校と役場へー。てきぱきと荷をさばいていく。

国鉄長町駅から西へ約一キロ、長町八幡前（現長町八丁目）の一角。一四二二平方メートルの敷地に、宮城県森林組合連合会（以下県森連）の薪炭倉庫が三棟建つ。

当時は薪炭燃料全盛期で、生産も取引も活況を呈していた。県森連は薪炭事業の拡大を打ち出し、一九五三（昭和二八）年、長町に倉庫を整備して職員を増員する。

その新入職員の一人が三浦義孝だった。戦前・戦中の青年時代をソウルと北京で過ごした三浦は終戦とともに帰国。八年後、県森連に職を得る。すでに四二歳になっていた。瘦身で威厳のある風貌は近寄りがたい印象を与えたが、後輩の面倒見がよく、一緒に額に汗することを厭わなかった。

倉庫に荷はあっても専用のトラックや乗用車はない。薪炭を市内に配達するときは三浦たち職員があらかじめ自転車で届け先を探し、確認してから営業車に委託した。年末は三〇日まで、年明けは二日から働き始めた。三浦の人脈の広さを活かして薪炭の取扱量を大幅に増やし、昭和二五年事業開始時には約一万九千俵だった年間の取扱量を三〇年には約七万三千俵に押し上げた。農林中央金庫と粘り強い交渉を重ね、薪

炭の購入資金を調達した。

何事にも積極的で意志が強く、思ったらず実行に移す。強いリーダーの資質はすでにこのころから表出していた。

資金を出し、仕事を出し、意見を出す、三出し運動

終戦後しばらく県森連は、仙台市定禅寺通櫓丁（現春日町）のみすぼらしい木造建物を事務所にしていた。仙台市から「街の美観を損なうので何とかしてほしい」と言われるほどのたたずまいだったが、県森連の職員たちしてみれば大切な事業の拠点である。

三浦も木町通りの自宅から櫓丁の事務所へ通勤し、ここで定款諸規程の整備や組合の経営指導に携わりながら林業と県森連の将来図を描いた。

のちに三浦が提唱する「三出し運動」は、このころから構想が温められていたのだろうか。

「組合員は組合運営に必要な資金を出し、組合の利用で仕事を出し、経営に意見を出すの三出し運動で、個々の経営力を高めていく」

それは森林組合システム（組合・県森連・全森連）の連携と利用で、林業を発展に導こうとする長期的な戦略だった。

昭和四九年、全国森林組合連合会は「森林組合新生一〇カ年運動方針」を決議し、系統一丸となって厳しい局面を打開し、強靱な協同組合へ新生を図ることを宣言した。県森連はこれを受けて「宮城県森林組合新生一〇カ年運動推進要領」を策定。県内全組合の参加で運動を展開することになった。

「三出し運動」は、このとき三浦が提唱したものだ。「組合員に林業振興による豊かな地域社会建設の担い手である自覚を持ってもらい、三出し運動の実践で組織の充実と財務の健全化、経済事業の拡大を図っていく」。県森連の新生一〇カ年運動はそうして走り出した。以後、三出し運動は県森連や県内林業人たちの合言葉として事業の推進力となり、三浦の名とともに全国に知られるようになる。

また、三浦は総務課長から総務部長、参事、専務理事へと昇る過程で、系統強化の考えのもと、次々と成長の布石を打っていた。

ひとつは青年部の設立だ。

昭和三五年、政府の「貿易・為替自由化計画大綱」で丸太や製材、合单板等の輸入が自由化されると、国産材は需要が減少し、森林組合は厳しい経営を強いられるようになった。農山村から都市部への労働力流出が進み、過疎化や高齢化がさらに林業活動を停滞させた。将来に危機感を抱いた三浦は、昭和三九年、森林組合の青年部設立に向けて活動を始める。

「次代の民有林を担うのは、森林組合の後継者である、きみたち青壮年なんだ」

山を思い、協同組合を思う三浦の情熱が聞く者の胸を打つ。

当初は一部の組合にとどまっていた活動も三浦や職員たちの地道な努力で共感が広がり、昭和四九年ついに宮城県森林組合青年部連絡協議会が発足する。全国でも初めての出来事だった。

―若さをもって森林組合運動に参加する。十分な研さんを積み、有能な森林組合役員を輩出する。事業を積極的に推進するため実践活動に主眼を置く―

協議会は実践的な活動目標を掲げ、シイタケの取り扱いや共済事業を推進。県森連の活動の重要な一角を担い、やがて理事を多数輩出する機関へと成長していく。

共販、流通、協業の課題に向き合う

県森連は昭和四五年、仙台市上杉に会館を新築移転した。三浦のもとにはよく客人が訪れた。ときにはコーヒーを飲みながら、こんな話をすることもあった。

「素材生産は単位森林組合が行ない、県森連は流通面を担当すべきなのです。現在、県森連の木材共販所は仙台、石巻の二ヶ所だけです。あと五、六ヶ所は必要でしょう。取扱量も現在は三万立方メートル程度ですが、これを大幅に増加して県内生産量の三分の一ぐらいまで伸ばさなければなりません。そうすれば価格をリードできます」

木材共販事業は森林組合の中核となる事業だ。昭和三五年に定禅寺通櫓丁の事務所

と長町の薪炭倉庫で取り組みが始まり、その後仙台市中野と石巻市湊の二ヶ所を開設して定例市を実施してきた。

三浦は各ブロックごとに木材共販所が必要と考え、迫・仙北・仙南にそれぞれ一ヶ所ずつ共販所を設置。さらに大衡・津山へと拠点を増やし、販売網の拡大を図った。

特筆されるのは、木材共販所に単なる共販機能だけでなく、購買品のストックポイントや大型機械の駐留所などの役割も持たせたことである。当時は森林組合の協業体制確立運動が盛んだった。三浦は共販所を協業活動の拠点とすることで運動を後押ししようと考えたのだった。

昭和四八年、県森連は協業体制確立運動の一環として広域合併構想を打ち出した。

三浦がまず着手したのは、仙台地区と利府町、泉市根白石の三組合による協業実行組合の組織化だった。指導員の派遣や事業収入の平等分配、作業員の流動化など様々なルールを決めて組合を運営。月一回の委員会や関係職員の間日常的な交流で自然に合併の気運が高まり、昭和五一年、四市六町による宮城中央森林組合が発足した。

広域合併はこれを原動力に計画を進めていくことになる。この段階を踏んだ方法は通称「宮城方式」として全国的にも高い評価を呼んだ。

自信を持った先読みで別法人を設立

「明日広葉樹の山取りをするからトラックを用意しておいてくれ」

三浦の命令で若い職員たちが握り飯とスコップを持って山に向かった。イロハモミジやヤマボウシなどの広葉樹を掘ってトラックに積み、大衡の圃場に植栽する。三〇四日続けると、約三〇〇本もの樹木が集まった。緑化ブームが到来したのはそれから数年後のことである。山取りした約三〇〇本の樹木は一本残らず売れて職員たちを喜ばせた。

昭和四〇年代の高度成長期、仙台市では鶴ヶ谷や南光台、将監など大型団地の開発が相次ぎ、公園緑化や住宅の庭園緑化のニーズが高まった。

県森連ではこれに因應するため、庭園樹や花木、盆栽などの販売事業計画を立てた。また住宅着工数の急速な伸びを見て、国産材による木造住宅供給事業の構想を進めた。

この二つの計画を合流させる形で昭和四七年に設立したが、株式会社宮城県林業開発センターである。

三浦は同センターを系統事業の補完組織として位置付けたが、こんな話もしていたという。

「職員はいずれ定年を迎える。そのとき再就職できるような会社にしていくのが目的でもあるんだよ」

経験豊かな系統の人材にとつて活躍の場が用意されていることは安心にも励みにもなつたろう。三浦の先読みは合理的で、かつ情があつた。

昭和四九年、三浦はふたたび別法人の設立に取り組む。宮城チップ工業株式会社だ。当時パルプ会社の原材料受け入れは原木からチップに移行しつつあつた。三浦は県内森林組合のチップ生産や取引状況を見て、改善の必要性を感じ、製紙会社との共同経営によるチップ工場開設を模索する。つながつた相手は北越製紙株式会社で、三浦はさつそく会社設立を図る。

全国でも初の試みに、他のパルプ会社からは何度となく中止すべきだと声があがつたが、三浦は「拡大造林を進めるためにはどうしても必要な会社なのだ」と根気よく説得を続けた。

新会社には全森連と県森連が共同で出資。それまで森林組合が個別に実施していたパルプ材集荷の一元化と、チップの安定的な生産・供給、事業の効率化を図ることができた。

信念にゆるぎがなく、果敢に思うことを実践

三浦は徹底して実践の人だった。

「(三出し運動は)組合員に呼びかける具体的提案であり、評論家であるより実践者

たれということであったと思う。豊の上で泳ぐ練習をするより、水に飛び込めとそれは呼びかけているのである」

県森連会長で角田市長も務めた佐藤清吉は、平成元年に発行された『三浦義孝さんの退任を記念して 三出し運動の軌跡』のなかで、そう述べている。

普段は温厚だが、三出し運動や系統利用の話になると一転して厳しい態度で臨み、強靱な意志を見せつけた。

有言実行を重んじ、「組合に口ばかり出して仕事も金も出さない組合員は真の系統人ではない」と舌鋒鋭く批判することもあった。

赤字に陥った組合やチップ工場の建て直しに親身になって取り組む一方、金融事業などではときに鬼となつて無情な決断を下した。信念にゆるぎがなく、果敢に思うことを実践していった。それは軍人としての経験から得た人生訓であつたらうか、それとも持つて生まれた資質であつたらうか。

専務理事在任中、三浦は部下に「二四時間いつでも気の休まることはない」と吐露している。県森連のリーダーとしてつねに率先垂範を実行し、林業人としての矜持を保ち続けたゆえの言葉だろう。それは緊張のなかにも充実した日々だったに違いない。

三浦の足跡をたどると、いつも秀峰を身近に仰ぎながら生活していたことが分かる。生地一迫村の栗駒山、学生時代に盛岡の街から見たであろう岩手山。戦時下の異国で

はソウル盆地を囲む広州山脈や北京郊外の山脈に、故郷を思い出すこともあったかも知れない。

そして梶森連はまさに山が職場だった。

専務理事の職を退く前年、三浦は自ら緑化木の整枝・剪定をしようと大衡綜合センターに向かった。自宅から弁当を持参し、仙台発六時三〇分のバスに乘車。森林組合前バス停で下車し、センターが用意した迎いの車には乗らずに二キロの道を歩いて圃場に着く。圃場では作業員の陣頭に立ってハサミを持ち剪定作業を進めていく。それが夕方まで続いた。いくら山登りなどで鍛えてあるとはいえ、すでに七七歳。一日の作業が終了するころには、さすがに疲れて樹木の陰に腰をおろしていたという。

明治、大正、昭和を生きた三浦が、剪定の樹間の向こうに見た山は、望郷の山だったろうか。それとも梶森連時代に訪ね歩いた数々の山林だったろうか。林業界に偉大な足跡を残し、三浦が去ったのは昭和が終わって三年後だった。

登米町森林組合参事

高橋 満雄

山が水と空気をつくる
天衣無縫に生きた五四年

【たかはし みつお】

1925(大正14)年 12月19日、登米町
(現登米市)に生まれる
1955(昭和30)年 登米町森林組合に奉職
(就任年不明) 登米町森林組合参事
1979(昭和54)年 4月1日死去

山守の系譜に連なる伝説の大人たいじん

やることなすこと型破りで、遅刻、無断欠勤、意に介さず。髪はボサボサ、靴は磨かず、挨拶は「オウツ」の一言のみ。月に何冊も本を読み、ある日突然「中国に行つてくつから」と言い残して訪中の旅に出る。拡大造林を批判したかと思えば、単位森林組合がごく初期の形態だった時代に地域連携を持ちかける。林業の機械化を目論み、いち早く早くベンツ製木材運搬車ウニモグを購入する。

そんな男が登米町森林組合にいた。

高橋満雄。一九二五（大正一四）年二月一九日、登米町（現登米市）大字日根牛小池、高橋幸之助の三男として生まれ、登米町森林組合に数々の逸話を残す伝説の大人だ。

日根牛は、白石宗直を始祖とする登米伊達家領の一村。寺池城のある寺池村と北上川を挟んで並び、登米伊達領二万石の一角を担う豊かな土地だった。丘陵の頂きには小池館や舞鶴館と呼ばれる中世の館跡があり、入谷峠を越えれば志津川の海が見えた。あるとき登米伊達家の殿さまが一带の里山を集落に分け与えた。高橋家はそれを機に日根牛の「山守」を務めたと伝えられる。

森の番人の系譜を自覚していたかどうか、一度故郷を離れた高橋は病に倒れて日根牛に戻り、以降はずっと登米町森林組合と社会のために尽くすのである。

故郷の大面洞が天然のサナトリウムになった

高橋は、みんなから「満っちゃん」の愛称で親しまれた。登米町森林組合に奉職する一方で登米町議会議員を四期務めたが、評伝や追悼録などのまとまった記録はない。そこで高橋の人となりを知る、登米町森林組合前参事の竹内信男、同組合元職員の千葉よし子、元登米町議会議員の小白幸記、三人の追想を手掛かりに足跡をたどることにした。

昭和恐慌や二・二六事件など暗い時代に幼少年期を送った高橋は、登米高等尋常小學校を卒業後、満蒙開拓団に入った長兄を追って満州に渡る。

当時政府は、「満州へ行けば一人二〇町歩の土地が貰える」をうたい文句に大規模な満州への移民政策を推し進めており、多くの農業者が市町村ごとに団を編成して大陸へ入植した。

数え年一六歳から一九歳の青少年たちには満蒙開拓青少年義勇軍への入団が準備されていた。高橋もおそらく青少年義勇軍での渡満だったと思われる。青少年義勇軍の若者たちは内地で二ヶ月、現地で三年間農業実習や軍事教練などを受けた後、開拓移民として入植地へ散らばった。高橋は南満州鉄道の支社に入った後、終戦を迎え帰国する。

故郷に戻った高橋は、広瀬村（現仙台市青葉区）にあった宮城農学寮に学ぶ。宮城

農学寮は、宮城県農業大学校の前身となる農業実習の教育機関で、昭和五二年に名取市へ移転するまで広瀬村の落合にあった。全寮制というから高橋も広瀬川の溪流近くに建つ学び舎で寝起きたのだろう。

その後高橋は京都のタキイ種苗に入社して会社員生活を送るが、結核と脊椎カリエスを発病し、帰郷する。

ふるさとに戻った高橋は、日根牛上羽沢の直面洞（現直面倒）で療養の日々を過ごす。澄んだ空気と清い水に恵まれた直面洞は天然のサナトリウムとなった。湿気を避けて木小屋の二階に寝起きし、山菜を自分で取りに行つて食べる暮らしを約二年間続けるうち、高橋の病は癒えていった。

このときの体験が、後に高橋の山林を源とする生態系への視点や自然林を尊重する考え方、さらに菌類や草木への深い知識を育む土壌となる。

林地の利用は昔の形を維持していけ

昭和三〇年、療養を終えた高橋は登米町森林組合職員として社会復帰を果たす。

高橋の規格外の行動や非凡な発想はすでにこのころから際立っており、「考えが、何年も先を進んでいる人だった」と小白は言う。

「昭和三四、五年頃だったでしょうか、田尻の大貫や伊豆沼の新田にあった森林組

合へ事業提携を持ちかけたことがありました。土地のつながりもない地域の森林組合が提携するのは無理じゃないかと私は言ったのですが、満つちゃんは、否そんなことはないと言う。それで私が車に乗せてそれぞれの組合に赴きました。しかし向こうにしてみれば、満つちゃんの構想はピンとこない。それで話は流れてしまいました」

造林事業にも一家言持っていた。

「林地の利用は昔の形を維持していけ。もとの形を壊すな」

しかし終戦後、政府は木材需要の拡大に対応して国有林や民有林の緊急増伐を行い、その跡地に成長の早い針葉樹を植栽していった。このうち広葉樹林を伐採してその跡地へ針葉樹を植えることを「拡大造林」と呼び、十数年のあいだに里山の風景が一変するほどの造林ブームをまきおこした。

「牧野にまで植林するなんて！」と高橋は批判の眼を向けた。

小白は、高橋が定期購読していた『日本草地学会』の学会誌に、日本の林野のなかで登米日根牛の牧野率が一番高いという記事が載っていたことを覚えていた。

高橋が病を癒した大面洞は、学会誌に評価されるほど豊かな林野のなかの牧草地だった。自然に人間を再生させる力があることを、高橋は故郷の山で身を持って知っていた。そんな場所が経済的に価値が高いとの理由で針葉樹林に変えられていく。林業人として忸怩たる思いだったのではないか。

機械好きが生んだ登米のリヨウシン号

「この車、山だの川だの歩くのに良いんだ」

機械好きの高橋が、ベントツの中古の作業用自動車ウニモグを導入したのは昭和四四年のことだ。ちょうど里山再開発パイロット事業が始まった年で、県内には中古のウニモグが一台あるだけだった。

「県下の森林組合でウニモグを導入したのは登米町が最初です」。当時、組合の作業班に所属していた竹内は、価格四六〇万円と帳簿に付けている。竹内たちはさっそくウニモグを駆使するが、かなり使い込まれた中古車だったためすぐに壊れてしまう。次に購入したのが小型特殊自動車のデルピス号だった。

「ところが使い方が悪いせいもあって、すぐ傷むんですね。そこで満ちゃんが及川自動車に修理を頼みに行く。何度か社長と話をしているうちに、新しい林内運搬車を開発しようということになったようです」

及川自動車は登米町にあった自動車メーカーで、社長の及川は先進の車社会をヨーロッパに学びにいくほど熱心なエンジニアだった。高橋と意気投合した及川社長は「俺が造ってやるから」と、新しい運搬車の試作を始める。高橋は及川自動車に毎日足を運び、試作工程を確かめては注意点や修正箇所を指摘した。

テストパイロットを務めたのは竹内だ。

「実際に木材を積んで走行したり、シャフトが折れたり、何回も試作しました」

林業の本格的な機械化は昭和三〇年代、伐採作業へのチェーンソーやトラクタの導入に始まり、四〇年代の集材機による集材、トラックによる運材、五〇年代の林内作業車やモノレール導入を経て、現代の高性能林業機械の時代に至る。

全国森林組合大会の決議事項にも、第四回（昭和三五年）「作業の機械化」、第二回（昭和四三年）「林業労働力の確保と機械化の推進」とあり、当時の林業者にとっては大きな課題であったことが分かる。

高橋は、その「機械化」を地元のメーカーの協力を得て図ろうとした。機械化は、作業員の安全を確保し、重労働から解放することでもあった。機械に対する高橋の愛着の背景にはそんな森林で働く者を思う気持ちもあったのではないか。

運搬車が完成したのは、高橋の死後、昭和五七年頃だった。

竹内が当時はふり返る。「従来と比べると画期的な車でした。六輪駆動でぐいぐい坂道を上がっていく。その迫力に、私たちは最初「山鬼」と呼んでいたほどです」

最終的に名前は「陵岑号（リョウシン号）」と決まる。

「満っちゃんをよく、山の稜線に沿って作業道路をつくれと言っていました。むかし、村の人たちが薪を背負って歩いた道があるからそこを基準につくれと」

岑は中国語で小高い山の意味を持つ。及川自動車が高橋の思いを汲んで名付けたのだろう、そう竹内は推測する。

陵峯号は、全国森林組合連合会の推奨を受けて普及が進み、「登米のリョウシン号」として広く利用されるようになった。

次に続く者たちに託した思い

昭和五三年、高橋は「森林総合整備事業」に関する情報をいち早く入手し、指定を受けるための準備を進める。

事業は昭和五四年度から一〇年を目途に全国で実施され、助成対象も天然林改良や下刈、雪起こし、除間伐などの保育、さらに付帯する作業路の開発が対象となるなど、より充実した内容にあらたまつていた。

指定を受けるには、森林所有者の同意や行政の積極的な関与が条件となっていた。高橋は町長や助役に事業の重要性を説明したり、県の関係者に話を聞いたりするなど、精力的に動き回った。

しかしそんな高橋をふたたび病魔が襲う。肝硬変だった。

登米の病院に入ったが病状は一向に回復しない。高橋は病室に大量に本を持ち込み、体調のゆるす限り読書にふけった。自分の病気について本で調べ、医者を相手に知識を披露することもあったという。

翌年の三月下旬、高橋の枕元に登米町が森林総合整備事業に指定されたとの知らせ

が届いた。直接指揮した最後の仕事为上首尾に終わったことを聞き、高橋は安心したようにうなずいた。

四月一日、転院先の仙台の病院で死去。五四歳の短い生涯だった。

竹内は、亡くなる直前、高橋から「これを読め」と真新しい本を手渡された。『ある山村の革命 龍山村森林組合の記録』と題されたその本には、作業班を組織し、多角経営で雇用を生み出した龍山村森林組合（静岡県）の取り組みが描かれていた。

「いま日本の森林組合に龍山村森林組合に並ぶ組合はない。これを読んで、ぜひ龍山村に行つてこい」

高橋はそう言つて後輩に先進事例を学ぶことの大切さを説いた。森で働きながら給与のほとんどを書籍の購入に費やし、ジャンルを問わず知識欲を活字に向けたわが身を肯うかのようにだった。

千葉は、高橋が「水と空気をつくっているのは山なんだ」とよく口にしていたのを覚えていた。

「いま、森林の効用とか言つてるけれど、満ちゃんはずっと前から分かつていたんだよね」

県森連の方針にも異を唱える反骨精神や国交回復前の中国を訪問する剛胆さなどからはうかがい知れない、繊細な魂がそこには宿っていた。

高橋が若いころ療養生活を送った日根牛上羽沢の大河洞は、いま宿泊やキャンプ、

森林セラピーのできる登米町森林公園として整備されている。

ここで森林セラピーを提唱、指導する竹内は「満つちゃんは、キノコ、山菜、薬草、免疫機能など、森林がもつ可能性について素晴らしい知識と教養を身に付けていた。その教えを私らが受け継いでやっているだけ」と話す。

樹間にひかりが届いて草や菌類を育むように、高橋の思いは「満つちゃん」と慕う者たちを通していまでも登米の森を見守っている。

白石市小原地区森林組合参事

片田 勝雄

組合の枠を超え、
「谷間の村」に安心と利便性を

【かただ かつお】

-
- 1910(明治43)年 小原村(現白石市)に生まれる
 - 1943(昭和18)年 小原村森林組合に奉職
 - 1949(昭和24)年 宮城県森林組合連合会技術員養成講座を受講
 - 1969(昭和44)年 宮城県森林組合職員連盟会長(就任年不明)
 - 白石市小原地区森林組合参事
 - 1974(昭和49)年 9月4日死去

時代に取り残された「谷間の村」

片田勝雄の故郷は、七ヶ宿街道の宿場だった。

奥州街道の桑折（現福島県桑折町）と羽州上山（現山形県上市）を結ぶ峠越えの脇街道は、出羽以北の大名が参勤に使い、出羽三山を詣でる人々の信仰の道であった。

「あすは小坂の山を越えて雪の中に入るべし」

江戸の歌人が紀行文に記したように、とくに冬に桑折から小坂峠を越え進むには、苦難を覚悟しなければならなかった。一方で羽州側からあえぎながら山道を越えてきた旅人は、江戸までまだ一〇日も歩かねばならないのに、小坂峠から江戸が見えるとか、江戸まで一走りなどと言い、誇張気味に胸をなでおろした。この峠越えはそれほど険しい道だった。

片田の故郷下戸沢（現白石市）は、小坂峠を越えて二つ目の宿場である。明治以降は手前の上戸沢とともに行政上は小原村に属した。

小原村は、温泉がある小原地区と上戸沢・下戸沢地区から成ったが、旧街道に代わり白石と上山を結ぶ道（現在の国道一一三号）が主要道となると、村の中心は小原地区に移った。どちらも山深いことに変わりはないが、小原には温泉がもたらすのんびりした雰囲気がある一方で、上・下戸沢では山村の険しさが際立った。

こうした土地柄の違いは考えの違いを生む。一九五四（昭和二九）年、隣接する白

石市と当時の七ヶ宿村との間で合併はなしが持ち上がった。小原地区の人々は白石市との合併を希望し、上・下戸沢地区では七ヶ宿村との合併を望んだ。上・下戸沢の人々が、旧街道で繋がる方に愛着を持つのは当然のことである。意見の対立は住民投票に発展したが、結果は白石市との合併希望が多数を占めた。しかし、上・下戸沢の人々はそれを不服として白石市との合併に反対する運動を繰り広げた。

そのころ、四〇代半ばで、小原村森林組合（現白石蔵王森林組合）の要職にあった片田は、下戸沢生まれのものとして反対の立場に立ったが、それは単に感情的な理由ではなく、わずかな農地と林業に頼るしかない故郷の暮らしを守るためだった。

北に蔵王、南に小坂峠を望み、東西を白石と七ヶ宿に挟まれる片田の生まれ故郷は、歴史的には街道の要衝であったが、明治以降は地理的にも、また周辺の町村と比較した場合でも特色のない「谷間の村」となった。さらに戦後は人口流出が進み、高度成長からも取り残された。

そんな故郷のために片田は、林業と組合の枠を超え、協同の可能性を広げようとした。故郷の暮らしの安心と利便性を向上させるためには、それが最善で合理的な方法だったのだ。

先見性で故郷に新たな収入源を

片田が組合活動を始めたのは、太平洋戦争中である。

昭和一六年、宮城県森林組合連合会が設立。会では人材育成のため、森林組合技術員を養成する講習会を開催しているが、片田は昭和一九年まで年に一度開催された講習会に参加している。小原村に森林組合ができるのは、昭和一七年三月。片田は設立から関わっていたという話もあるが、正式に奉職するのは翌年、三三歳のときだ。すると講習会への参加は、入協後間もなく組合を代表し、新しい林業の技術と知恵を習得するためだったのだろう。

しかし戦時下の林業は、故郷の発展より「お国のため」が優先した。白石周辺の豊かなスギ、マツ林は強行伐採され、軍需資材として供出された。片田の組合では設立と同時に製材所を持っていたので、フル稼働で軍用材を産んだ。

多くの林業家にとってこのころは不本意な時代だったが、それは戦後もしばらく続いた。終戦後、全国で造林計画が実行されたが、労働力や苗木の不足、さらに食糧難に阻まれ計画は進まなかった。

色あせた山々に緑が取り戻されるのは、高度成長の足がかりとなる好景気が始まったころだ。昭和二六年、森林生産力の増強を目的にした森林法では、適正伐採期を定め乱伐を規制した。「山に木を植えよう」の合言葉は、山に生きるものだけでなく広

く一般のものとなり、植林運動が盛んになった。

白石地方では大鷹沢小学校の取り組みが学校植林コンクールで一位を獲得した。「白石市史」によれば、これが地域での緑化推進の大きなきっかけになったとある。違う集落の出来事とはいえ、片田にも勇気を与えたことだろう。組合ではこれより少し前から二つ目の製材所を稼働させていたので、飛躍の準備は万端整っていた。

片田の故郷では、明治から薪炭の生産が大きな収入源だった。上戸沢だけでも昭和二六年の木炭生産量は八三〇俵を超え、従事者一戸あたりの収入では八万円以上になった。当時の現金収入では大きな額である。しかし、昭和三〇年頃から灯油やガスが普及し、薪炭の需要は年々少なくなっていった。

片田は薪炭に変わる収入源を求めた。まず目をつけたのは、農水産物の出荷箱だ。小坂峠の向こうの伊達地方ではりんご生産が盛んだし、亘理や閑上では大量の魚が水揚げされるから木箱が必要になる。組合は片田の目論見通り、りんご農家から注文を取り付け、魚箱は塩竈に納めた。

また、二つの製材所から生まれる建材は質の高さが評判を呼び、福島や閑上の大工が最良にしたほか、仙台の郊外に団地が整備されるころになると大口の注文も舞い込んだ。注文が別の注文を呼ぶ好循環。高評価の要因には品質もあったが、大工が使いやすいようあらかじめ決まった寸法に製材して出荷したこともあった。今でこそ規格寸法の製材は当たり前だが、当時は建築現場の手間を省く画期的なサービスだった。

片田は先見性の持ち主だった。「谷間の村」に居ながら時代の流れを読み解き、そこに自分たちの山の価値、製品の有用性を当てはめることができた。そして彼の先見性には、しっかりした計画性があった。立木の買付から伐採、搬出、製材まで手がけるには相当の労力を要したが、仕事を限れば小遣い程度の儲けにしかならず、薪炭に代わる収入源にはならないと考えた。わずかばかりの農地と林業で生きるしかない故郷をどのように豊かにするか、片田は模索し続けた。

故郷の暮らしに安心と利便性を

組合運営の中核を担いながら、片田は得意先への納品にも出向いた。塩竈へ魚箱を納めた帰りには、必要のなくなった箱いっぱい魚を買って故郷の人々へ届けたという。新鮮な魚に喜ぶ人々の笑顔は眩しかったが、同時に、街場と故郷の間で発展に大きな差ができていくのを感じていた。高度経済成長の風に乗ってどんどん華やかになる街に比べ、故郷は時が止まったままのように思えたのだ。

山深いゆえに公共設備の普及も遅れ、上戸沢に上水道が普及したのは昭和二九年のことだ。下戸沢ではさらに普及が遅れ、沢水を生活用水にしていた。幸い重大な健康被害につながる問題は起きなかったが衛生上の不安は尽きず、上水道を望む声は日ごと強くなった。

小原村に合併問題が持ち上がるのはそんなときである。白石と七ヶ宿のどちらと合併するか。

片田の願いはただ一つ。故郷に安全で近代的な暮らしをもたらすことだった。だから、それが実現できればどっちと一緒になろうと構わなかった。ひとつ大きな問題は、白石と合併すると分収林での分収歩合が下がってしまうことだった。

分収歩合とは、土地の所有と森林の管理が異なる分収林で生じる収益を、そこに関わる者との間で分け合った後の利益のことで、それが下がることは収入減を意味した。せっかく新しい木材生産が軌道に乗ってきたのに、合併により利益が減るのは絶対に防がなければならない。片田が白石との合併に反対したのはそうした理由があったのだ。

とはいえ住民投票の結果を無視することはできず、町村合併を進める動きもあり、昭和三二年三月、小原村は白石市との合併を決め、即座に施行した。上・下戸沢の人々は、話の発端から合併を受け容れざるを得ないことを承知していたが、なしくずしにせず、自分たちの要望を合併条件に盛り込むことに成功した。

合併条件は一〇項目に及び、片田らの願いはほぼ実現されることになった。暮らしの安全と利便性のために消防設備の充実と、車社会に対応する道路を整備すること。懸案の分収歩合は、旧小原村の条例に則り従来通りとすることが決められた。さらに衛生的な生活のために診療所を充実させ、下戸沢に上水道を敷設することが決まった。

昭和三十一年一月、下戸沢に待望の上水道が通った。合併施行に先駆けた完成は、人々の要望がいかに強いものだったかを物語っている。

垣根を取り払い故郷の発展のために

水が通り、道が整い、安全な環境は整ったが、それでも故郷の暮らしは、時代に見合う華やかさには程遠いと片田は感じていた。

わが国での生活改善運動は、大正から昭和初期にかけて盛んになり、農村部でも高度成長の初期にはその目的を達成したと捉えられるが、片田の故郷では、水道の開通でようやく気運が盛り上がったばかりで、住まいや設備は昔のままだった。

片田は上水道整備と同時に、各家庭の台所と屋根の改善に取り組んだ。そもそも周辺の昔ながらの住まいには台所を設けていない場合が多く、土間の片隅に小さな流し場があるだけだった。共同ポンプまで水を汲みに行く必要はなくなったが、調理環境は効率性と衛生上の問題を抱えていた。片田は改良かまどや調理場を整え、家事動線の効率化を目指した。そして明るい光が注ぐガラス窓を設けさせた。

また、かまどの普及で防火対策も必要になった。そのころ、周辺の住まいはほとんどが茅葺き屋根で、一部には杉皮も用いられた。そのままでは火の手が上がれば住まいを焼き尽くし、集落全体に及んでしまう。

そこで片田は生活改善の一環として瓦屋根への葺き替えを推進した。いわきから瓦職人を招き瓦工場建設に尽くしたが、ここでは建材販売で築いた業者とのつながりが役立った。そしてこうした努力が実を結び、小原村の生活改善運動は昭和三十一年、県のモデル地区に指定された。

片田は、昭和二四年に設立された宮城県森林組合技術員協会で副会長を務めていたが、そこでどんな働きをしたかを示す資料は少ない。そればかりか小原村の組合での働きでもわからないことが多い。それに代わり明らかになるのは、組合や林業の枠を超え故郷のために尽くした彼の苦闘である。彼の功績が組合や林業の枠に収まりきらないのは、林業の発展が村の発展と同義だったからだ。それは同時に、村の営みがほぼ林業によって支えられてきたことも明らかにする。

小原村における森林組合は、古くからの「契約講」が前身と考えることができる。「講」は、相互扶助を目的とした組織体だが、小原村では古くからその意思が生活全般に大きな影響を与えた。共有林の運用やそこで生まれる利益の分配、また暮らしに関わる共同事業も契約講の決定に委ねられた。ここでは林業、農業などの垣根はない。目指すのは共に暮らしを豊かにしていくことだけだ。片田は、それを原点に協同の輪を広げようとした。

月夜にまつすぐ伸びる木立のように

昭和四二年、五七歳のとき片田は脳梗塞を患った。右手と発語が不自由になった。懸命に治療を続けていたとき漢詩に出会い、リハビリを兼ね気に入ったものは色紙に書くようになった。

そもそも書を嗜んでいたかはわからないが筆運びは速かった。そして達筆ぶりが評判になり、結婚祝いや新築祝いに求められたという。書に集中する眼差しは仕事のと き同様に鋭かったが、御披露目するときは穏やかだった。

昭和四五年、長年副会長を務めた技術員協会が、宮城県森林組合職員連盟と名を改めたとき、片田はその会長になった。その設立総会、さらに大会では壇上に立ち挨拶をした。発語が不自由な彼に代わり、事務局の者が代読した。その間、指をピンと伸ばした手を両足の脇に揃え、背筋を伸ばしまつすぐ前を向いていた。声は違っても、言葉はまぎれもなく片田のものだった。

雅号は「林月」とした。どんな理由でそうしたのか。それを周囲に明かすことはなかったが、壇上で毅然とする姿は、月夜にすくと伸びる木立の静謐と凛々しさを感じさせた。

4

商を築く

日専連宮城県連合会

協同組合日専連仙台会初代理事長

三原 庄太

困難を連携と発展の糧に
仙台のにぎわいを築く

【みはら しょうた】

-
- 1890(明治23)年 仙台市に生まれる
 - 1916(大正5)年 時計販売、修理を営む三原本店を
継ぐ
 - 1935(昭和10)年 仙台専門店会会長
 - 1952(昭和27)年 協同組合仙台専門店会理事長
 - 1957(昭和32)年 協同組合日専連仙台会初代理事長
 - 1973(昭和48)年 2月18日死去

百貨店進出反対運動を連携のきっかけに

一九三〇（昭和五）年四月一五日、三原庄太は嬉しくない知らせを耳にした。

その日は、同日が仙台の「商工記念日」に制定されたのを祝う記念行事があり町はにぎわっていた。不景気の最中だけに三原は久しぶりに心が晴れる思いがしたが、かねてよりの心配が現実になることを聞き、明るい表情も一瞬にして曇った。

「仙台に三越がやってくるらしい」

噂は以前からあり、一部の商店主たちは進出阻止に動いていたので対応は早かった。わずか一〇日後に「中央百貨店進出反対同盟大会」を開催し、三越の進出反対を決議、三原は加盟する三〇の小売業組合および有志の代表になり、反対運動の先頭に立った。それから二ヶ月も経たないうちに、今度は大町の藤崎呉服店が商号の変更を発表。百貨店への脱皮を宣言した。三原の二軒隣の大店の大転換である。東京では小売業の総売上の五割余りを百貨店が占め、年々、中小小売業を圧迫していたが、いよいよ仙台にも百貨店危機が迫っていた。

三原らは、三越が進出を撤回するよう嘆願しながら、容れられない場合は独自に百貨店を創設するとした。

しかし長引く不況のせいで三越出店は進展せず、反対運動をきっかけに結束するはずの地元商店の連携も進まなかった。新聞は「沈滞せる仙台の商店会」として、三越

出店が進まないことを理由に連携を怠り、商業を活性させない地元小売店を批判した。反対運動には一理あるが、不況を乗り越えるために自らも改善すべきはあると言うのである。

新聞の指摘通りこのころの商店会は、百貨店に対抗するもの一枚岩ではなかった。三原らは、「百貨市場」と名付けた連鎖型専門店に対抗したが、一方で別のグループは独自の合同マーケットを催していた。百貨店に対抗する矢は、それを射抜く前にちぐはぐな指向から力が削がれていたのである。

昭和七年、百貨店問題は、百貨店法の成立をめぐり中小小売店と百貨店の対立がさらに激化した。東京では百貨店進出を阻止する全国大会が開かれ、三原は仙台からの代表団の一員として出席した。仙台での反対運動は、運動の全国的な広がりや世論に後押しされ、大会直後に「全仙台商店連盟」の設立につながった。百貨店に対抗する一枚岩の体制がようやくできたのである。

三原らはこうした進出阻止活動の一方で、加盟店の連携と商いの研鑽を進めた。阻止運動より自己改造へ。連盟設立前にそうした課題が話し合われたように、自省を忘れず魅力ある商店づくりに努めた。二年余り前の三越進出反対運動から始まった店主の活動は、連携と改善を促すようになったのだ。

昭和七年十一月、藤崎は百貨店となり、翌年四月、三越仙台店が開店した。反対運動は実らなかったが、活動は仙台商人の結束を生むきっかけになり、発展の足がかり

を築いた。そしてその流れは、仙台専門店会（現日専連仙台会）の誕生につながっていく。

日専連大会で仙台七夕を披露

三原らが三越出店反対を唱えた年、岡山市に日専連運動の嚆矢となる岡山専門店会が誕生した。

「一業一店による分散型百貨店形態の専門店会」と呼ばれた会は、特定マーケットをターゲットとする専門店が連携し、商機会を最大化すべく生まれたもので、大正一〇年に一二人の青年有志の活動から始まった。それが全国に広まった背景には、仙台的例からわかるように百貨店の台頭があり、専門店が対抗するための連携アイデアとして各地で歓迎された。

その日専連活動の伝道者が仙台にやってきたのは昭和一〇年六月で、同時に仙台専門店会が発足した。百貨店への対抗策に頭を悩ませていた三原らは、かねてより運動に興味を持っており、待ちに待った発足だった。設立時の参加店は二四店で、三原は初代会長に就いた。

仙台での専門店会設立は、発祥の岡山を除けば全国四番目である。その後全国で設立が相次ぎ、昭和一一年一〇月に全日本専門店会連盟（以下日専連）を結成、翌年の

五月には岡山で第一回の全国大会を開催した。

全国大会の目的は日専連の活動を広めることで、当初から会議以外に『せんもん祭り』の開催を予定していた。ただの会議では注目されず、お祭りだけでは有益と言えない。活動を充実させ、広く一般に知らせるために考えられたのが、加盟専門店会各地の祭りやお国自慢を揃え、行進を行なうことだった。

その開催意図について当時の案内では、「大衆性があるので全国でラジオ放送や新聞報道、ニュース映画上映が期待できる」とした上で、「数万金を投じるよりも各地専門店会の宣伝となる」としている。広告費をかけずに媒体報道を誘うパブリシティ戦略を採ったのである。

第一回大会の『せんもん祭り』で仙台専門店会は、徳島の阿波踊り、小倉の祇園囃子などとともに七夕踊りを披露し、山車いっぱい吹き流しを飾った。仙台七夕の華やかさは、今ほど全国に知られていなかっただけに、目論見通り仙台の名を広く知らしめた。

大会では、翌年の第二回大会の開催地が決められたが、三原は誘致に熱意を注いだ。実現すればさらに仙台の魅力が知られるし、百貨店問題で揺れる地元商店会に勇気を与え、景気回復にもつながる。誘致合戦は激しかったが、三原の情熱が勝ったのか見事、開催を勝ち取った。

大会後三原は、感想を記した文で成果を述べながら、日専連の協同活動の有益性を

語っている。

「時代は協同の力を必要とする。地方に蟠踞して独善を誇つてのみ居ては視界が狭くなる。毎年出席して親しく知識を交換し、結束を強固にして難関を克服することに日専連の目的と収穫がある」

昭和一三年五月、日専連第二回大会は仙台で行われた。しかし、前年大会の直後に日中戦争が勃発。さらに開催の数日前に国家総動員法が施行されるなど戦争は目前に迫っていた。前回に増して仙台を華やかに宣伝するはずの『せんもん祭り』は中止され、代わりに戦勝祈願の行進が行われた。新聞にあるように大会は、「非常時局にふさわしい緊張と盛況」が相半ばし、異様な雰囲気に含まれた。

無一文からの再出発

小売業の活性と連携のため、三原らが情熱を注いだ日専連活動は戦争によって阻まれた。昭和一五年の第四回大会を最後に日専連は解散したのだ。戦時下での運動を模索する動きもあったが、物も人手もない状況では商業の発展など望むべくもなかった。

三原は仙台商工会議所の副会頭を務めていたが、戦時中は政府機関としての業務に専念した。齢五〇を過ぎ、本来なら家業や組合活動に精を出すころだが、店には売る時計もなく、修理を頼みに来る客もいなかった。

昭和二〇年七月一〇日。時計の針がちょうど零時を指したところ、仙台上空に米軍機が襲来した。警察の記録に「夕立がトタン屋根をたたくような音を立てて」とあるように、空襲は雨のような焼夷弾から始まり、二時間に渡る波状攻撃で中心市街地のほとんどを焼き尽くした。県庁、市役所はかるうじて類焼を免れたが、それ以外はほぼ焼けた。

この空襲で三原は自宅兼店舗を失った。屋上に時計塔がそびえ、御譜代町・大町のシンボルとして親しまれた自慢の店だった。直撃した焼夷弾は外壁の一部を残しすべてを焼いた。三原いわく、残ったのはのれんだけで、文字通り無一文になった。

昭和二二年、父の代から始まった三原本店は創業六〇年を迎えた。三原は一〇坪ほどのバラックの店を建て商売を再スタートさせた。売ったのは時計ではなく漆器だったが、飛ぶように売れ生活を支えた。

この年の八月五日、天皇陛下が仙台を行幸された。民主組織として生まれ変わった仙台商工会議所は、街に七夕を飾りお迎えることを市内商店会に呼びかけた。物資不足のなか、一千本もの吹き流しが街を彩った。そしてこれが七夕復活のきっかけとなり、現在の仙台七夕祭りの原型になったという。仙台七夕は復興のシンボルだったのだ。

家業を立て直すことに精一杯だった三原も、ここへ来て商店街全体を見渡す余裕が生まれた。街の復興も進み、青葉通、東二番丁通、広瀬通など現在の街並みができた。

戦後の混乱が治まり、街と商売にも秩序が生まれた。そして昭和二四年、中小企業等協同組合法が制定され、民主的な組合活動の基盤が再び整った。

昭和二五年、日専連は発祥の地、岡山で再結成した。このとき、全国三三の地方会が参加したが、そこに仙台の名はない。三原らは、「すべての客は平等で、店は客のためにある」とする『真商道』を基本理念に専門店会復活と日専連への再加盟を計画したが、市内商店会の協同的繁栄を優先すべきとの理由で日専連再結成時の参加を見送った。それは出遅れや、戦争で組合活動の熱意が失われたということではなく、足場をしっかりと固め、結束を高めるための助走期間であったといえる。

高度経済成長を告げた仙台大会

昭和二七年七月、新生・仙台専門店会は組合法の一部改正を受け誕生した。そして四〇名の組合員は、三原をふたたびトップに選んだ。

これに先立ち仙台専門店会は日専連に再加盟しているが、連盟は再結成から二年で五〇を超える地方会を擁し、全国大会に三〇〇人以上を集める団体に成長していた。復活した『せんもん祭り』も催しの幅を広げ、宣伝効果をさらに強くしていた。もはや日専連大会は商業界の一組合の催しではなく、地域振興に影響力を持つイベントになっていたのである。

仙台専門店会でも再結成と同時に、全国大会の再誘致を計画した。

「第二回大会は事変勃発で、思うことの半分もできなかった。そのお詫びと名誉挽回をしたい」

三原は誘致への思いを語ったが、それは組合員や地元経済界、ひいては市民の総意であった。前回開催の目的は、百貨店問題に立ち向かうための商店会の連携と地域活性化だったが、今回は戦災からの復興も加わり、多くの関心を呼んでいたのである。しかし大会を復興の起爆剤にしようとするのはどの地方会も同じで、誘致合戦は熾烈を極めた。

昭和二九年の第九回鹿児島大会で、仙台専門店会は再び七夕を持ち込み『せんもん祭り』を盛り上げた。大会には仙台市長も駆け付け誘致活動を行なった。日専連大会が地方振興にいかに関心を持っていたかが分かる。

四地方会による舌戦にまで発展した招致合戦により、仙台大会は昭和三二年の開催が決まった。もっと早い開催も期待したが、戦前の百貨店問題の迷走や戦中戦後の屈辱、貧困、混乱を思えば著しい進歩で、それは復興の先の発展も実感させた。かつて三原は、「時代は協同の力を必要とする」としたが、言葉通り、戦争を乗り越えた街は、新しい協同で生まれ変わろうとしていた。

昭和三二年の日専連仙台大会は、五月七日から五日間に渡って行なわれた。クライマックスの『せんもん祭り』パレードにはたくさんの市民が押し寄せ、各会のお国自

慢を楽しんだ。前年の経済白書の「もはや戦後ではない」の言葉が象徴するように大会は新しい時代の到来を告げた。

戦後から高度経済成長時代へ。わずかな間に商業を取り巻く環境は大きく変化した。前年には百貨店法が制定され、仙台専門店会がクレジット事業に取り組むものところからである。成長とともに会の進む先には新たな課題も予測された。

時は進む。組合設立の種を蒔き、二〇年余りをその成長のために尽くした三原は、昭和三三年、さらなる発展の願いを込め、後進にバトンを渡した。

協同組合日専連仙台会第三代理事長

伏見 亮

成長と協同理念を縦横に
美しき理想を編む

【ふしみ りょう】

- 1914(大正3)年 福島県中村町
(現相馬市)に生まれる
- 1960(昭和35)年 協同組合仙台専門店会青年会副会長
- 1974(昭和49)年 協同組合日専連仙台会副理事長
- 1976(昭和51)年 日専連仙台会第三代理事長
- 1985(昭和60)年 (協連)日本専門店会連盟
第五代理事長
- 2002(平成14)年 8月24日死去

商いは、深く関わることから始まる

戦局が激しくなり始めた一九四三（昭和一八）年のある日、伏見亮は、小関昌輔に出会った。当時二九歳の伏見は、東京の海軍航空機用の計器製造会社を退職し、故郷の相馬で無為な日々を過ごしていた。

一方の小関は、仙台市役所近くの大武写真館の二代目館主を務めていた。初代の大武丈夫は、高い写真技術が評価され明治末期に東京へ進出、皇族の肖像写真などが手がけたが、関東大震災で被災し仙台に引き上げた。小関は、世界的な評価を受けた先代の技術を受け継ぎながら、商売の面でも写真館を成功させていた。

小関との出会いは人を介してのことだったが、働き口を世話してもらうのが目的だったかは分からない。しかし、この出会いが伏見の事業家としての才覚を鍛え、組合運動へ導くこととなった。

大武写真館で働くことになった伏見だが、仙台空襲で店が焼かれたこともあり、すぐに転機を迎えた。昭和二三年、小関が独立するのに同調し写真館を退職。コセキ商店の設立に参画し、取締役専務に就いたのである。

小関が起こした店はカメラや写真感材を扱ったが、伏見は「ただのDPE屋じゃつまらない」といい、X線や8ミリ用フィルムなどの専門商材も扱うことを提案した。のちに一般用写真フィルムはデジタル化の影響で店頭から姿を消すが、この当時伏

見はそれを予測しないまでも、専門商材を手がければ、時流に左右されず固い顧客を獲得できると考えたのかもしれない。もちろん言葉の通り、一般ユーザー向けに写真のアドバイスを充実させることも忘れなかった。

「本場の専門店とは、固有のソフトを売る専門性の高い店をいう。カメラ業界の場合もとても大切なことは、こうすればもっとよく写せます。こうすれば失敗なく写せます、といった写真を中心にした（客との）コミュニケーションだ」

のちに、専門店とは何かという問いに伏見はそう答えている。また事業のあり方については、幅を広げるならば基盤となる商いを突き詰めるのが先、という趣旨のことを話している。写真の可能性を追求することで事業を成長させた彼の言葉は、事業の幅広さより深さを求めることの大切さを語っていた。

時代の流れとともに日専連仙台会（以下仙台会）の事業が商業性を強めたとき、伏見は、協同組合としての原点を見つめ直すよう説くが、根底には、客と深く関わり奉仕する日専連の理念に通じる信念があったのである。

消費者と地域のために手を取り合う

事業家になったのときをほぼ同じく、伏見は協同組合人としても歩み始めた。

戦争により解散した仙台専門店会は一九五二（昭和二七）年七月、中小企業等協同

組合法施行にともない、協同組合日専連仙台会として再発足するが、伏見の恩人、小関はその監事になり、翌年の五月に開かれた通常総会では青年部の創設が決定、伏見はそのメンバーになった。

青年部は、全国の日専連青年会連合会（以下日青連）と連携する一方で、県内観光地と名産品を紹介する映画を制作するなどユニークな活動を行ない、実務面ではチケットの普及に力を注いだ。

チケットとは現在のクレジットカードのことで、組合加盟店の販売促進を図り、消費者の買い物物の利便性を高める切り札とされていた。それはのちに仙台会の中核事業となるので、戦後の小売業と同会の成長を象徴する存在といえる。

青年部の活動は、翌年の東北地方連合会青年会の発足につながり、伏見は副会長に就任した。このとき四〇歳。日青連の会員資格年齢を超えていたが、会員は伏見をやめさせず、結局、四年後まで青年会活動に励んだ。多くの人望を集めていたことが分かる。

昭和三三年、横山新二郎が仙台会の理事長に就いたとき、伏見は常務理事になった。会は前年に仙台で行なわれた日専連第一二回大会を成功させていたので、新体制の船出は順風と思われたが、事業環境の悪化などで財政危機に直面した。また、経済成長による大量生産、大量消費を背景に急伸した百貨店やスーパーの攻勢から、中小小売業をどう守るかも問われた。

昭和三五年、三越、藤崎、丸光の売り場拡張計画が表面化し、前後して中央資本のスーパーなどの進出が相次いだ。とくにスーパー間の低価格競争は地域の小売店を巻き込み、倒産に追い込まれるケースも発生していた。

仙台会は小売業団体などとともに出店反対活動を続けたが、一方では大型店との共生も模索し、昭和四四年、藤崎とチケツト提携に踏み切り、藤崎・丸光を特別加盟店とした。

中小小売業の振興、発展を目指す日専連にとって大型店はつねに脅威であったが、消費者の求めや会の持続的発展を考えると、それを忌み嫌い、無関係でいることは許されなかった。呉越同舟。そもそも消費者の生活上と地域の発展を志すなら、過ぎる反目は成長を邪魔することにしかない。

会の役職にあった伏見は、弱者の立場を貫きつつ、理想のために手を取り合い、互いに高め合うことを求めた。

理念と成長のあいだに生じたジレンマ

経済成長が戦後初のマイナスを記録した昭和四九年から二年後、仙台から市電が姿を消した年の五月、伏見は仙台会の第三代理事長に就任した。この年、米の作柄は戦後最悪とされ、漁業は二〇〇海里規制が現実となり、地域経済は困難に直面した。

こうした先詰まり感から時代の転換を感じ取った伏見は、就任直後に会の運営改革を提案した。執行部主導の傾向が強い会運営を、組合員総参加で民主的なものにしよ
うとしたのだ。

組織体制を見直したほか、協同組合の最大の経営資源は加盟店として、加盟店増とさらなる団結で困難を打開しようと訴えた。

これに対し、会は古くからの加盟店の働きで発展してきたことを理由に、加盟店増に異議を唱える者もいたが、「エゴイステイックな考え方で、協同組合の精神に反する」と一蹴、日専連の理念に共感するすべてを仲間に加え、対等に連携することを求めた。

こうした組合の基盤強化の一方で、事業も躍進の時を迎えていた。チケットからはじまったクレジット事業が売上を伸ばし、会の中核事業になっていたのである。

『日専連仙台会の五〇年』によると、昭和五〇年では「クレジット部門を積極的に振興させる」程度だったのが、わずか三年後には、その年の流行語を持ち出し、「クレジットフィーバー」というほど成長を遂げていた。

クレジットカードはその後も普及を続けた。昭和六〇年の全国でのカード発行は六八〇〇万枚だったが、七年後には二億枚を突破。個人が複数のカードを持つのが当たり前になり、多重債務者を生み出す温床をつくった。消費者の利便性向上のためのカードが利用者を苦しめ、やみくもな会員獲得競争を繰り広げた事業者の責任を問う

声も上がった。

日専連もカード事業によって成長したが、消費者保護と商人のモラルに反すると、事業拡大には反対意見も根強くあった。とはいえクレジットカード抜きに小売業は成り立たないし、会の発展のためにも疎かにはできなかった。組合理念と成長の間で、ジレンマが生まれていた。

理想を美しく編み上げるために

「組合事業はカード事業が中心になっているが、これは本末転倒だ。協同組合の原点は、社会的弱者が集まり自分の利益を守ることにある。(中略) この原点を忘れ、カード至上主義に陥っている」

伏見はクレジット事業の肥大化に警鐘を鳴らし、専業と捉えられることを恐れた。とはいえ、会を織り成す横糸であるクレジット事業を省くわけにもいかない。そうすれば編み上げたものが解け、バラバラになってしまう。

事業を成長させつつ、組合の可能性を広げるためにどうすべきか、伏見は理想を美しく編み上げるために腐心した。

昭和五九年一二月、仙台会はみやぎ生活協同組合と業務提携し「日専連CO・OPカード」を発行した。全国初の消商提携として話題になった取り組みには、当初、批

判的な見方もあった。

「生協はあくまで非営利組織であり、専門店会に対抗する形で作られた側面が強い。発足の理念からすれば、本来は水と油の両組織」

一部マスコミはそう報じ、提携に反対する組合員もいた。彼らは、生協が各地の小売業者と争う事態になっていくことを理由にしたが、提携を進めた伏見は、生協は小売店との共存共栄の方策を考えてほしいとしながら、食品や環境問題で消費者保護に尽力し、強い支持を受けているので、日専連との親和性も高いと提携の意義を訴えた。さらに、生協と対立する小売店のなかには、正義を振りかざしつつ消費者の健康を脅かす者もいると、反対する者に釘を刺した。

伏見は生協との連携を、事業を成長させ組合の可能性を広げると考えた。これより以前には、消費税導入阻止とともに運動したので、信頼と、同じ協同組合人として共感も持っていた。また、生協が利益を追求するなら規模が大きく会員数も多い信販会社をパートナーに選ぶだろうが、そうしないところに生協の信念を感じ取り、感謝の気持ちも持っていた。

仙台会とみやぎ生協は、提携カードの発行を皮切りに、トラベル事業、ローンの取扱いなどの事業提携のほか、宮城県協同組合こんわ会、みやぎ・環境とくらし・ネットワーク（MELON）、日専連・生協サミットなど、ほぼ一〇年にわたり連携を築き関係を発展させた。

組合の可能性を広げながら事業の成長を追うのは、相反する二つの価値を結ぶ作業のようである。伏見はこの二つを縦糸と横糸にして、生協との二人三脚で自らの理想をかたちにした。

良い未来のために過去を見つめる

昭和六〇年三月一日、仙台会は創立五〇周年の記念式典を開いた。ほぼ四〇年にわたり組合活動に携わり、徹頭徹尾その充実にこだわった伏見にとって感慨もひとしおだったろう。

彼は理事長式辞の最後で、ある言葉を紹介した。

「われわれは後ずさりしながら未来に入ってゆく」

フランスの詩人ポール・ヴァレリーの逆説めいた格言は、過去を通して未来を見つめることの大切さを語っていた。

良い未来をつくるには、その方法を過去に求めるしかない。未来の洞察を過去の知見に頼るのは、後ろ向きに進むことともいえる。ゆえに五〇周年を、良い未来のために過去を見つめるときとしたいと話した。

創立五〇周年の式典から一〇日後、伏見亮は、日専連全組織の第五代理事長となる。そして自分の考えを裏付けるように伏見は、直後に『新専門店読本』を刊行した。ペー

スは昭和二八年に、日専連誕生に尽くした角南九八が著した『専門店会読本』である。伏見は日専連の信条を示した本に現代的意義を見出そうと、時代にふさわしい解釈を加えた。そして、それを手に、かつての日専連の創設者たちと同じように全国各地を訪ね、理念と結束を説いた。

それは自らの言葉通り、良い未来のために過去を解き明かす旅であった。

協同組合日専連仙台会第六代理事長

高橋 確

報恩の誓いを力に
結束と発展を推し進める

【たかはし かく】

1929(昭和4)年 仙台市に生まれる
1965(昭和40)年 協同組合日専連仙台会に入局
1976(昭和51)年 日専連仙台会常務理事
1982(昭和57)年 日専連仙台会専務理事
1999(平成11)年 日専連仙台会第六代理事長
2011(平成23)年 1月4日死去

再起のチャンスを与えた会への感謝

一九五七（昭和三二）年に開かれた日専連第一二回仙台大会は、戦後の仙台での日専連運動の再開を祝い、高度成長時代の到来を告げた。

高橋確は、当時の人口以上の人出を集めたというパレードに日専連仙台会の青年会員として参加したが、そのすさまじい盛り上がりはいつまでも臉に焼き付いていたという。

このとき二八歳。父から紳士服の仕立業を受け継いでいたが、手先が器用でなかったことから服づくりには夢中になれなかった。それより組合活動に熱心で、仲間とともに会の将来やまちづくりの理想を語り合ったりした。

このころ高橋は、「日専連仙台会」（以下仙台会）と改称したばかりの会の未来を担う若きホープとして期待されていたが、その後やむなく家業を廃業。組合員としての資格も失い会を離れた。まさに失意のときだった。

なれば浪々として過ごしていたと、自ら振り返る昭和四〇年の夏の日、仙台会の者が突然、高橋のもとを訪れた。間もなく日専連東北大会が行われるが、その運営を手伝ってくれないかと言う。もはや組合員でないものに務まるのかという心配はさっておき、遊んでいるよりはましだろうという軽い気持ちで申し出を引き受けた。

託されたのは、事務局運営の合理化を進めることだった。当時、仙台会の経理事業

は手作業によっていた。それでは大会の事務局運営が間に合うはずもない。そこで事務能力に長けた高橋に白羽の矢が立ったのだ。

大会は成功に終わり、これがきっかけで高橋は仙台会の事務局職員として働くことになった。チャンスは突然やってきた。青年会員として積み重ねた経験は水泡に帰すかと思われたが、少し回り道をしただけだった。

事務局で与えられたポストは、発展のために大きな期待がかかる新設部署の企画課長だった。会員として組合活動に関わることはできないが、職員としてその歩みを支えることはできる。役割は違うが大義は同じだった。

当時日本専門店会連盟では、商業人の育成に力を注ぎインストラクター制度を設けたが、高橋は仙台会の代表として養成講座に参加した。全国から事務担当のリーダーが集まり、泊まり込みの合宿で最新のビジネススキルを身につけた。理想の接客から広告づくりや経営管理まで網羅した学びは、彼のリーダーとしての才覚を鍛えるのに役立った。

「経営に失敗した一加盟店の経営者に再起の機会を与えてくれたばかりか、会の将来を賭けた部署を委ねてくれたことに大きな雅量と期待を感じ、心に期するものがあったことは忘れることができない」

のちに高橋は、会復帰の感激をそう記している。そしてその感謝を忘れず、長く会の発展に尽くした。

仙台会を急成長させたアイディアと行動力

高橋が仙台会に入局した昭和四〇年からの約一〇年で高度経済成長はピークに達したが、会にとっては、その後の急成長に向けた助走の時代であった。

高度経済成長は消費の多様化を生み、豊かさを知った人々は、消費にプラスアルファの価値を求めた。会では、売り上げ増に貢献するキャンペーンセールなどを行なう一方で、加盟店店員向けの講座を開催するなど会員の持続的な発展を支えた。事務局の要職にありアイディアマンでもあった高橋は、ユニークな企画で会員と消費者の期待に応えた。

昭和五十一年、伏見亮が理事長になったとき、高橋は常務理事になった。最初の仕事はクレジットカード会員の獲得だった。

クレジット事業は会の急成長の原動力となるが、このころの会員の伸びは信販業界の水準に遠く及ばなかった。そもそも仙台での「日専連カード」の認知度が低かったのである。高橋らは市内の団地を巡り会員獲得作戦を実施した。一〇人ほどの職員がチームになり、一日七〇〇件もの家庭を訪問するローラー作戦だ。

作戦の陣頭指揮をとった高橋は、昭和五十三年に金融事業と個品割賦などを担う目的で設立された株式会社日専連ファイナンスで役職に就いた。廃業で組合員資格を失った後、職員として復職、少し前には役員になっていたが、一〇年ほどのあいだに今度

は会社経営に関わるようになったのである。

八面六臂の活躍は何より彼の能力の高さゆえだが、地道な作戦を実行する並外れた行動力と忍耐力も持っていた。そして継続的なキャンペーンと、この間の業界の競争激化でクレジットカードが一般化したことなどが功を奏し、昭和五八年度末にはカード会員は一〇万人を突破した。

高橋は仙台会発展の原動力となったクレジット事業成長の立役者である。復職から一〇年の助走で力を蓄え、会社役員になり一気に主幹事業に育てた。しかし、会が再起の機会を与えてくれたことに感謝の気持ちを抱き続けた彼にとっては、それも通過点でしかなかった。

昭和五九年度末に仙台会のクレジット取扱高は、全国の日専連会の中で札幌会に次ぐ二位を記録した。背景には加盟店と提携したカードの好調があった。優待制度などで加盟店の顧客をカード会員に誘導できたのである。

しかし、会員数と取扱高は増加を続けたが、熾烈な競争により金利を下げざるを得ず、それまでのような成長は望めなくなっていた。カード発行枚数では、大人一人が一枚以上を持つ時代。市場は成熟期に差し掛かり、会の成長のためには新しい事業を育てなければならなくなっていた。

成熟時代に心の交流を求めて

クレジット事業への依存が強まるのを防ぐため、仙台会では昭和六〇年頃から、さまざまな事業に着手した。

昭和六三年には大手代理業のノウハウを導入し、旅行業を開始。また一九九三（平成五）年にはNTTドコモの代理店事業を開始した。ポケットベル、携帯電話の取扱から始まった同事業は、端末機の発達やネットワーク環境の充実とともに業績を伸ばし、主力事業に成長した。

こうした経済事業の一方で、地域社会への貢献も充実させた。組合事業が根幹の会にとつては理念との親和性が高く、活動の継続や各方面との連携、パブリシティの活用で、会のイメージアップなど他事業への波及効果も期待できた。

この考えは昭和六〇年から始まった新会館の建設にも反映された。組合員の交流や加盟店従業員の教育、福利厚生の実施などの目的に加え、カード会員サービスや地域交流の場としての機能も加えられたのである。平成元年、カード会員のクラブハウスをコンセプトに広瀬通に誕生した新会館「BEB」は、中心市街地のシンボルとして注目された。

一方で、高橋にはある懸念があった。

時代のせいか、会と組合員、あるいは組合員同士の交流がどんどん薄れていると感

じていたのだ。

ある日、高橋はそんな不安を理事長の伏見にぶつけた。伏見は高橋の上司であり、良き先輩、あるいは兄のようであった。時折、「確ちゃんや」とにつこり笑いながら語りかけてきたが、それは重要な案件を任せられるときだから、気をつけなければならぬと、高橋は冗談まじりに語っている。

「BEEBの完成で環境が整ったいま、会の交流を再構築すべきではないか」

そう話し始めると、高橋は仙台に四度目の日専連全国大会を誘致することを訴えた。平成二年、大店法の改正で大型店の出店が緩和され、中小小売店は苦境に立たされた。さらに翌年のバブル崩壊による不況は活性化への気力さえ失わせ、地方の商店街は元気をなくしていた。しかし、そんな時代だからこそ日専連大会は大きな力を発揮するのではないか。そもそも日専連は戦前のデフレ時代に誕生している。同じような状況にあるいま、日専連の原点に立ち返り中小小売店の連携を図ることが、景気回復につながる考えたのだ。

「確ちゃん、やれや」

仙台での四度目の全国大会は、伏見のこの一言から実現した。大会誘致の提案にあっさりOKが出たことに、高橋は驚き身震いした。しかし、後になって、伏見理事長は自分の懸念も知っていたし、大会誘致を言い出すことも気づいていたのだろうと思いついて返している。

平成七年、五月二一日、五〇回目の大会開催と仙台会創立六〇周年を記念する日専連全国大会が開かれた。

この年の一月、阪神・淡路大震災が発生した。思い返すと仙台での一回目の全国大会は、国家総動員法が施行された直後の大会だった。どういう因果か仙台大会は辛い記憶とつながるが、それだけに活動の機運は盛り上がり、忘れられない大会になっているのは確かである。

組合の結束と事業の発展を両立させる

平成一一年一〇月、高橋は日専連仙台会理事長に就任した。

この前年から、大店立地法を振り出しに「まちづくり三法」が施行され、大型店の出店が事実上自由化された。規制緩和による大型店の脅威から中小小売店を守るため、新法では消費者の郊外流出を食い止め、中心市街地の活性化を目指したが商店街の衰退は止まらなかった。

そもそも大型店の郊外進出の背景には、大店法の出店規制を国際ルール違反とする外資系流通業の主張があったので、グローバル化が商店街衰退のきっかけになったと見ることもできる。

当然、会も対応に追われた。大型店への対抗だけでなく地域商業の活性化を目指し

たが、同時にグローバル時代に対応できるスピード感のある組織づくりに取り組まなければならなかった。

高橋が理事長に就任した翌年、会はクレジット事業を柱とする経済事業を、新たに創設した株式会社日専連ライフサービスに移管した。日専連ファイナンスからの社名変更には、金融以外の事業も含め、広く地域社会の発展に貢献する目的があった。

当初、高橋は会の理事長と同社の代表取締役を兼務していたが、組合理念にそぐわないこと、さらに主力のクレジット事業の規模が大きくなったことから、平成一六年、日専連仙台会の理事長を退き、同社の経営に専念した。これにより仙台会の理事長には、組合員の代表が就くという理想的な組合組織に生まれ変わった。

高橋はこの一連の組織再編の方向性を、「たたむ」「削る」「変える」「起こす」の四つのキーワードで表現した。組合のクレジット事業を「たたみ」、会社に移す、無駄を「削り」、組織を「変え」、組合活動の新たな可能性を「起こそう」と呼びかけた。分かりやすいメッセージは、職員はもとより組合員にも伝わり、メンバーのさらなる結束を促した。組合活動と経済事業のどちらへも偏らず、活動の自由度と組織の競争力をあげる見事な手綱捌きだった。

高橋が理事長職から身を引いたのは、社長との兼務が組合理念に反する理由もあるが、経営手腕に長けたこと、そして、彼が組合員になる本業を持たなかったことも関係していると思われる。

日専連はそもそも専門店の集まりだから、理事長はじめ役員は本業を持っている。それぞれの本業は時代とともに多忙になり、組合活動に割ける時間も少なくなる。クレジット事業は、コンピュータの発達とともにシステム化が日進月歩で進み、装置産業の様相を呈してきた。ＩＣカード、電子マネー対応が目前に見通されるほど猛烈なスピードで進歩続く現実を考えれば、もはや組合員が本業と兼務できる時代ではなくなってしまう。

事業組合とはいえ日専連は業種、業態、規模、経営形態いずれも異なる商人の集まりである。最大公約数のクレジット事業はいまや組合員による事業ではなくなってしまう。

事業は会社に全面移行し、組合は本来の運動体に特化すべきである。組合と組合員は株主となり、事業を盛り立て果実を得る。会社は事業を伸ばし株主である組合員へ還元する。組合はそれを原資に組合活動を行なうべきだし、組合経営の実務は専従職員に任せるとしてかじ取りは組合員が担うべきである。また組合は、組合員によって組合員のためになされるべきである。それでこそ組合であると高橋は考えていた。

一方高橋に本業はない。かといって彼に守るべき城がないわけではなく、守るべきは組合事業活動と組合員、職員であり、クレジット事業をはじめとする会社と社員たちだ。

会社と組合を分けると言っても、会社は組合の事業を移行した受け皿会社だ。あく

までも日専連であり、地域に奉仕し、地域の支持を得てこそ存在価値がある。

本業へのこだわりやしがらみがない高橋は、組合活動の充実と会の成長のためだけに力を注ぎ、真に中立的な視点で事業運営の舵取りに専念できた。仙台会がこの日専連会よりも力強く前進できたのは、事務局出身の高橋が理事長になったことにあるといっても過言ではないだろう。

片手で組合の結束、もう片手で事業の発展をコントロールしながらの歩みは、初めから軽快ではなかった。しかし高橋は見事に成長を加速させた。会職員としての再起から四〇年をかけ、彼は積年の恩に報いた。

5

暮らしを結ぶ

宮城県生活協同組合連合会

灘神戸生活協同組合副組合長
兵庫県生活協同組合連合会第五代会長

涌井 安太郎

協同組合の星を目指して
歩み続けた神戸の宮城人

【わくい やすたろう】

-
- 1909(明治42)年 8月5日、仙台市に生まれる
1927(昭和2)年 仙台商業学校卒業
1935(昭和10)年 神戸消費組合に奉職
1944(昭和19)年 神戸消費組合を一時退職、兵庫県
食糧営団に勤務
1945(昭和20)年 神戸消費組合に復職
神戸消費組合専務理事
1950(昭和25)年 神戸生活協同組合専務理事
1960(昭和35)年 国際協同組合同盟第21回大会に
日本代表として出席
1962(昭和37)年 灘神戸生活協同組合専務理事
1972(昭和47)年 灘神戸生活協同組合副組合長
1976(昭和51)年 兵庫県生活協同組合連合会第五代会長
1996(平成8)年 7月19日死去

幼少期のキリスト教との出会い

仙台藩は武士の住むまちに「丁」、町人の住むまちに「町」の字を当て町割りをした。涌井の生家は、その丁と町が交差するところ、北一丁通りと二日町角に面した一画にあり、手広く商業を営んでいた。貸家の店子や町内の人たちが始終寄り集まっていた家で、お抱えの人力車がいたという。すぐ近くにプロテスタント系の教会（現仙台ホサナ教会）があり、涌井家の子どもたちは父親の奨めでみなその教会に通った。

涌井安太郎の弟、勅使河原安夫は「父親は苦勞して身を起こした商人だったが、子どもたちは、それぞれの好きなように開放的に育てるといふ教育方針だった」と話す。涌井は立川文庫を愛読し、二宮金次郎像に勉強の手本を見る、大人しい少年だった。学校からの帰り道、本に読みふけていたら電柱に衝突したとの逸話がある。

そんななか、教会で開かれる日曜学校は、子どもたちに普段とは違う楽しみを提供する場でもあったろう。涌井家の子らは、彼らが「北一番町教会」と呼んだその教会でキリスト教の息吹にふれる。

聖書の言葉や讃美歌は涌井のたましいにどう響いたか。この幼少期の体験がやがて涌井を生協活動に導くことになるのである。

一生をかけて悔いのない生活と仕事がほしい

涌井は、戦前に神戸で萌芽期の協同組合運動に出会い、以後五六年間の長きに亘って生活協同組合の発展に尽くした。

宮城県内の生協とは講演会など浅い縁でつながるだけだが、涌井が生涯の職場とした灘神戸生協（現生活協同組合コープこうべ）は、日本の地域生協の源流であり、いまも宮城をはじめ全国の生協の目標である。

一人の宮城人が異郷の地でどう人生を全うしたか、涌井と灘神戸生協の歩みに宮城の生協の成立ちを重ねながら筆を進めることとする。

人は道に迷ったとき何を想って人生の決断をするのだろうか。

一九二七（昭和二）年、仙台商業学校（現仙台商業高等学校）を出て東京の貿易商社に就職した涌井は、二〇歳で神戸に赴く。神戸は仙台よりも明るく近代的な都会だったが、次第に郷里の東北と同じようにそこにも貧しく暗い生活があることに気が付き、自分の生き方を模索するようになる。

そしてある日、「少年のころに、仙台のまちで通ったことのあるキリスト教会や日曜学校のことなどがなつかしく、あるあまい期待のようなものをもって」キリスト教会の扉を開けるのである。それは涌井の人生を大きく左右する運命的な出会いだった。

教会に通い始めた涌井は、社会の矛盾に青年らしい純粹さで対峙し、社会的キリスト教運動への参加を通じて思索を深めていく。

その過程で知ったのが賀川豊彦の存在だった。

賀川豊彦はキリスト教の伝道者であると同時に実践的な社会運動家でもあった。貧しい人々の救済活動に全身全霊で取り組み、一九二一（大正一〇）年、灘神戸生協の前身である二つの組織、「神戸購買組合」と「灘購買組合」の設立を支えた。

涌井は、信仰と社会的活動が一体となった賀川のすがたに自分の進むべき道を重ね、工場街に住みこんで子どもたちに勉強を教える日々にひととき安息を見出すが、「一生をかけて悔いのない生活と仕事がほしい」との渴望は消えずにあった。

そんなとき友人から奨められたのが、「神戸消費組合」（神戸購買組合から改称）への参加だった。賀川の活動を通じて消費組合の思想や理論に共感を覚えていた涌井は、思い切って神戸消費組合を訪ねる。

片っぱしから仕事に体当たり

「また病人が来ましたね」。そう言って涌井を迎えたのは、神戸消費組合長の福井捨一だった。病人が来た、とは、身を捨てる覚悟で消費組合運動にたずさわる者、という福井なりの戒めを含んだ歓迎の言葉だった。

こうして昭和一〇年一〇月、涌井は神戸消費組合の一員となる。

神戸消費組合は、賀川豊彦が産みの親、福井捨一が育ての親と言われている。福井は海運業出身の実業家で、神戸の貧民街で苦闘する賀川の活動の支援者でもあった。組合員数約一〇〇〇人、職員一八人で船出した神戸購買組合のかじ取りを担い、大正一三年には「組合の目的は単に生活物資を安く協同購入するだけにとどまらない。もっと広い生活運動、社会運動を目指している」として、組織名を神戸消費組合にあらためた。

また同年七月には、小泉初瀬らの協力のもと、生協における日本最初の女性組織「家庭会」を創設している。女性の地位も発言権も低いなかで、家庭会の誕生は新しい時代の到来を予感させるものだった。

昭和初期、宮城では労働運動として豊里消費組合や仙台消費組合が誕生しているが、いずれも左翼運動の弾圧で短命に終わっている。

世の中が戦時体制へ傾斜していくなか、涌井は組合員拡大運動や機関誌『新家庭』の編集など、本人いわく「片っぱしから仕事に体当たりしていった」。

組合員の求めに応じて米や木炭を入手するため奔走し、朝は朝礼で牧師の代わりに讃美歌と組合歌を合唱して祈りを捧げ、夜は聖書や消費組合の研究会という日々だった。

弟の安夫はこのころ、仙台第二中学校（現仙台第二高校）の一年生二学期から、兄・

安太郎のもとに身を寄せており、涌井の家から近くの兵庫県立第三神戸中学校（現長田高校）に通った。

「兄夫婦は二間ほどの小さな一軒家を借りていました。いつも遅くまで働いていて、夜中に帰ってくると、甘い物買ってきたから食べる」と起こされました。兄嫁の富栄もキリスト教徒でしたから日曜日には連れだって教会へ行き、ほとんど家にいませんでしたね」

一年八ヶ月ぐらいの下宿生活だったが、特別高等警察の家宅捜索に出くわしたこともある。「学校から帰ったら見知らぬ人たちがいる。何だかおかしいぞと思ってとつさに兄貴の日記をカバンに入れて隠しました」。

戦争に向かって突き進む暗い時代を、涌井は神戸消費組合を守り抜くため懸命に働きました。

歯をくいしばりながら神戸生協再建に取り組む

終戦後、郷里に疎開していた涌井のもとへある日電報が届いた。神戸からだった。

「ショウヒクミアイ サイケンスル スグライシンマツ」

仲間が自分の帰りを待っている。涌井は家族を連れてふたたび神戸の地に降り立つ。

目の前には空襲で焼け野原と化したまち、連なる闇市、食糧を求めて歩き回る人の群れがあった。戦争の傷跡に、涌井は「生活を再組織して秩序ある買い出しを行ない、お互いの生活を守らなければ」と痛感する。

昭和二〇年十一月一日、神戸消費組合は小泉秀吉を組合長に、新体制で再出発する。涌井は専務理事として戦後の再建を担うことになった。

しかし戦時中の配給制度や空襲による生活破壊で大きな打撃を受けた組合を再建するのは、並大抵ではない。真つ先に着手したのは食糧の確保だった。サツマイモを探して九州まで足を伸ばしたり、四国まで海産物を買付に出掛けたりした。

また灘購買組合とともに配給統制の壁を乗り越えて青果物や水産物の「荷受け権」の指定を受け、組合員が自ら配給ルートを選べるようにした。

一方で荷受けの事業から発生した組織上の問題が経営危機を招き、昭和二四年には二〇〇〇万円近い欠損金が生じた。

一九四八（昭和二三）年、待望の消費生活協同組合法公布で、神戸消費組合から「神戸生活協同組合」へと改名したが、再建の道は涌井が「その後の一〇年間は、赤字との取り組みだった」と述懐するぐらい険しかった。

社会保険料も固定資産税も滞納したまま。銀行からの借入金は返せず、仕入れ先は無計画に支払手形が乱発されていた。涌井は矢のような催促と攻撃を一手に引き受けて奮闘した。キリキリと胃が痛むような日々だったのではないか。

涌井はのちに、このときのことを「私がいらだつような思いで求めていたのは、「生協再建の」具体的方策であった。→当時の私は満身創痍の姿で神戸生協再建の闘いに取り組んでいた」と振り返っている。

涌井が生協再建に血のにじむような努力をしているころ、宮城では東北大学生協の前身である東北帝国大学生組合（昭和二二年）、県内教職員による宮城県学校生協（昭和二七年）が発足している。弟の安夫は東北帝国大学生だったときに、講義録をガリ版刷りし、組合で販売したという。「紙がないから本が出ない。だから自分たちでガリ版切ってつくったんです」。

当時は大学生協は学生のための、学校生協は教職員のための互助組織で、広く市民に開放されたものではなかった。神戸生協のように家庭の主婦を主役にした組織へと変わるのもう少しあとのことである。

誰かが架け橋の役目を果たさなければならぬ

昭和三七年四月、神戸生協と灘生協（旧灘購買組合）が合併し、組合員四万六千人、供給高三億円の「灘神戸生協」が誕生した。

涌井が合併を意識し始めたのはいつからだろう。

両生協は賀川の指導のもとほぼ同時期に生まれ、競い合いながら成長してきた。終

戦直後に配給制度の民主化を求めてともに行動したときのことである。荷受け事業は阪神部（灘生協）と神戸部（神戸生協）に分かれ、統一行動をとれずにいた。どちらにも、連携して将来の日本の生協を築く、という理想はある。しかし現実には足並みが揃わず、相互批判もあった。

このとき涌井がとった行動は思いがけないものだった。

「溝を埋めるには、誰かが身を挺して架け橋の役目を果たさなければならぬ」

そう言って専務理事辞任を申し出たのだ。荷受け権の大元の取得機関であり、灘購買と神戸生協の連合会である兵庫県市街地購買組合連合会の常任になって、問題に体当たりで処していこうと決意したのである。

進退伺は当時の小泉組合長の説得で撤回することになったが、「明日の神戸のために、そして日本の生協のために」ふたつの生協に橋を架けたいとの思いは、涌井の胸の奥に熾火となって残ったのではないだろうか。

隣り合う水路のように離れたり近づいたりしながら歩んできた両生協だが、組合員の生活圏は戦後の市街地の拡大にともない、ひとつにまとまりつつあった。ヨーロッパ諸国の生協も日本の農業協同組合も合併を進めて、戦後の社会経済情勢に対応していた。昭和三〇年代半ばには高度経済成長を背景に、商品を安く大量に販売するスーパーマーケットが小売業界を席捲し始めており、生協陣営は組合員の暮らしを守るため、これに対抗できる力を付けなければならなかった。合併は成るべくして成ったと

言えるのかもしれない。

涌井は「合併がただ環境や情勢の変化に押されたものではなく、四〇年にも及ぶ両生協の歴史のなかで鍛え抜かれた協同組合の理想が根底にあったからだと思いたい」とあらためて、これが「事業会社の合併」ではなく「協同組合間の合併」であることを訴え、灘生協もこれに賛同している。

宮城では昭和四五年に東北大学生協のメンバーが宮城県民生協を設立するが、灘神戸生協は遠くに輝く星のような存在だった。事業運営の教科書であり、生協運動の先頭を行く旗手だった。宮城県民生協と宮城県学校生協の合併で「みやぎ生協」が誕生するのは、灘神戸生協が生まれてちょうど二〇年後のことである。

暫くはこの世界の中に生きぬいてゆく

涌井安太郎は六人きょうだいの長男で、四男の安夫とは一五歳の年齢差がある。

安夫は「兄貴の背中を見て育った。影響を受けたことは間違いない」と話す。その影響のひとつが「仙台弁護士協同組合」だろう。安夫が仙台弁護士会の会長だった昭和四七年、仙台弁護士会の弁護士全員を組合員にして設立した組合で、民主的な組織づくりを徹底した。四三年間で組合員数は九九名から三九四名に拡大、出資金も順調に増加しているという。

涌井はよく東京出張を利用して仙台まで足を伸ばし、きょうだいたちの家族と食事とともにした。仙台より神戸に暮らした歳月の方が長いのに、東北訛りが抜けなかった。人に会えば必ず郷里を尋ね、同郷と知ると顔をほころばせた。

弟安夫はそんな兄を「年をとってからは、何かというかと仙台に来たがっていた。故郷に戻りたいという気持ちかどこかにあったんじゃないでしょうか」と心境を慮る。

涌井は昭和四七年、『星をめざして わたしの協同組合運動』を上梓した際、陶淵明の「帰去来の辞」を引用して次のように謝辞を述べている。

「淵明はやがて 帰りなんいざ 田園は將に蕪れんとするに 胡んぞ帰らざる と 帰去来の辞を綴って俗世界から遠のいていますが 私は なお暫くはこの世界の中に 生きぬいてゆくことを志して居ります」

協同組合運動という星をひたすらめざした涌井に、望郷の念はあっても仙台へ帰るという選択はなかっただろう。家族とともに暮らした神戸で生涯を閉じたのは、一九九六（平成八）年、阪神・淡路大震災の翌年のことだった。

※扉写真提供／勅使河原安夫

東北大学消費生活協同組合初代理事長
東北大学法学部教授

中川 善之助

草創期の東北大学生協と 民法学の泰斗、中善先生

【なかがわ ぜんのすけ】

-
- 1897(明治30)年 11月18日、東京府神田区
(現東京都千代田区)に生まれる
- 1921(大正10)年 東京帝国大学法学部卒業
- 1927(昭和2)年 東北帝国大学法文学部教授
- 1948(昭和23)年 東北大学学校協同組合初代理事長
- 1957(昭和32)年 東北大学消費生活協同組合初代理事長
- 1967(昭和42)年 金沢大学学長
- 1975(昭和50)年 3月20日死去

反骨の人、人間愛に満ちた人、中善先生

東北大学には本多記念館（本多光太郎）、三太郎の小径（阿部次郎）のように著名な学者を記念した建物や散策路がある。中川善之助の「中善並木」もそのひとつだろう。

川内南キャンパスの法学研究科の東側に位置する桜並木で、道沿いには中川善之助の揮毫による「若き日の友情と感激のために」の辞を刻んだ石碑が立つ。当初は楢の樹だったというこの並木には、次のような誕生譚がある。

一九六〇（昭和三五）年秋、大学祭でヤキトリ屋を計画した法学部生たちが実行委員会から「知性のない企画だ」と却下され、中川教授に相談する。中川善之助は、学生から「中善」の愛称で親しまれる法学者だった。「中善先生ならきつと分かってくれる。中善先生にヤキトリ屋の亭主になっていただけよう」と総勢一〇名余りで、中川研究室へ行った。建物の厳肅な雰囲気緊張し、みな下駄を脱いで裸足だ。中川は学生たちの行為に驚くでもなく静かに耳をかたむけ、「よし、分かった。引き受けよう」と快諾。学生たちは無事大学祭参加の許可を得ることができた。中善先生を亭主（責任者）に戴くヤキトリ屋「法一亭」は収益が出るほどの成功をおさめる。学生たちはその収益金で、定年退官を迎える中善先生への惜別と感謝の念を込め、川内構内に若木を植樹した。それが「中善並木」である。

中川は、現代家族法の創始者と称えられる民法学の泰斗で、学生のみならず多くの人から反骨の人、人間愛に満ちた人として敬われ、慕われていた。

そんな中川が、東北大学消費生活協同組合（以下東北大生協）の初代理事長として学生たちの活動を支えていたことはあまり知られていない。

中川が理事長を務めた一二年間は、東北大生協の基礎がつけられた草創期でもある。ふだんは活動に特別口を挟むことはなかったが、「法一亭」の逸話のように学者の立場を超えて大学生協の経営を助けた局面もあった。まだひ弱な東北大生協を一人前に育て上げた恩人でもあった。

戦後の荒廃したキャンパスに大学生協が誕生した

東北大生協の前身は、昭和二一年発足の東北帝国大学学生組合（以下学生組合）にある。

学生組合は、終戦直後の物資不足に困窮する学生のため、食糧や文房具を調達しようとして集まった学生ボランティアたちの組織だ。学生たちはトラックで払下げの紙や衣類などの物資を運搬したり、リュックを背負って東京まで本を買い出しに出かけたりして、それらを片平構内で販売した。学びたくても本はなく、講義を筆記したくてもノートがない状況で、学生組合の活動は大勢の学生の役に立った。

しかし加入組合員ゼロ、委員たちの報酬もゼロで、組織はまだ未熟だった。委員たちは山での亜炭運びや通信添削などで自分の生活費を稼ぎ、奉仕の精神で組合の活動を支えた。当然経営の意識は薄く、出資金ゼロのため貸借表を作成したくても書きようがなかったという。

組織の確立に迫られた学生組合は、昭和二三年六月、東北大学学校協同組合を設立し、大学生協としてのスタートを切る。

初代理事長には中川善之助教授が就いた。

中川は昭和二一年、吉田茂内閣の臨時法制調査会委員として民法改正事業にたずさわり、家制度の解体や女性の権利向上に大きな役割を果たしていた。

中川の理事長就任の経緯は定かではないが、昭和三年に宮城県社会事業協会無料法律相談所（現東北大学無料法律相談所）を開設するなど社会活動にも熱心だった。大学生協理事長もそうした社会活動のひとつとらえて引き受けたのであろうか。

終戦三年後の仙台は、仮設商店が並び、復員軍服のままの学生が多数いた。みな生きるために必死だった。そんななか大学生協の委員たちは「荒廃したキャンパスに明るさを」と音楽会を開催する。

当時三円以下の入場料は無税だったが、大学生協の企画した音楽会は入場料三〇円で税金が四五円もかかる。苦肉の策で入場料二円五〇銭、プログラム代二七円五〇銭としたが、これも税務署から注意を受ける。そこで考えたのが会員制の文化講座方式

だった。昭和二四年度はこの方法で九回も音楽会を開催し、巖本真理や原智恵子など一流の音楽家の演奏を聴衆に届けた。

中川はこのときピアニストの井口基成を夕食に招待するなど後方に回って大学生協の活動を応援している。

学生部に食堂新設を要望

昭和二四年五月、東北大学は新たに第二高等学校・仙台工業専門学校など五校を包摂し、教養部を設置した新制東北大学へと生まれ変わる。

キャンパスが散在していたため、大学生協も本学部（片平）、農学部（雨宮）、富沢教養部、北分校（北七番丁）の四分校に設置された。

記録を見ると昭和二四年当時の組合員数は学生が一三〇〇人、教職員が二〇人、出資金は一口一〇〇円で資本総計は三〇万円とある。

これを機に委員も有給になり、本部（庶務・会計・渉外）、購買部、トラック部、ラジオ部、プリント部、喫茶部の六部門を整備するなど協同組合としての体制が順次整っていった。ただし給料が出るといっても十分ではなく、委員たちは相変わらず街頭での宝くじ売りやプリント部でのガリ切のアルバイトで生活費を補てんしなければならなかった。

食糧管理法による統制が学生の耐乏生活に拍車をかけていた。食糧の絶対量が少なく、闇市は高くて手が出ない。昼、学外の飲食店に行けば割高になる。学内に食堂がほしいという声は大学生協の内部からも上がった。

そんなとき、東京大学が文部省から特別配給米を受けて学生に米飯を提供しているのを知り、さっそく掛け合った。配給を受けるには給食施設の整備が条件だという。委員たちは大学の学生部に食堂新設を要望。ちようと中学校教員研修が東北大学で行なわれることになり、「研修のため食堂を造るので運営を大学生協でやってほしい。研修終了後は学生食堂として使用してもよい」ということになった。委員たちは調理に使う薪割りや食堂の女子大生アルバイトの手配などに奔走した。

ところが配給米を受け取る段階になって何百キロの米を保管しておく場所がないことに気付く。委員たちが頼った先が、中川理事長だった。緊急を要する事態に中川もすぐ対応し、法学部のテニス部部屋の一部屋を米の倉庫に開放した。

教員研修期間中の食堂運営が良い試運転となり、昭和二五年一月、学生部による学生食堂がオープンした。「学内で昼食がとれる」と大好評で連日行列ができたという。北門食堂が学生部から大学生協に移管されるのは、それから一〇年後の昭和三五年のことである。

あなたたちの好きなようにやりなさい

「中川先生は私たちのやっていることをよく信頼してください」と話すのは、昭和三年、専従制の発足とともに初代の専務理事となった安孫子彪だ。

安孫子はプリント部のアルバイトとして大学生協に入り、昭和二七年に理事となって初めて中川と会った。と言っても話ができるのは年に一度の理事会と卒業生の送別会ぐらいで、ふだんは顔を合わせる機会も少なかった。ただ、会えばいつもニコニコと笑顔を見せ、ざつくばらんな態度で接してくれた。

「中川先生と接する研究室の方々を見ると、直立不動で緊張感が伝わってくるようでした。ところが、大学生協の学生たちは先生を前にしても堅くならず話すことができるんですね。卒業コンパなどで打ち解けて接してくださいる先生を見ていたからだと思います」

大学生協は発足から六年を迎えていた。供給規模や組織の拡大にともない、学生たちの負担も増していた。たまに講義に出席すると生協の職員が講義を受けていると誤解された。業務の維持に限界を覚え始めた学生たちは、生協の理念や業務管理、組合員との連携について徹底的に議論する。

そういう意味では初心に戻る良い機会でもあったのだろう。学生たちはあらためて組織・体制の整備に取り組むことになった。

ひとつは「専属従業員体制」の確立だ。学生による兼業をあらため、専従者を置くことにしたのだ。昭和三十一年、安孫子ともう一人が専従者として卒業後も大学生協に残ることになった。

さらに、当時はまだ学友会の一部にすぎなかった大学生協を、消費生活協同組合にもとづく生協として法人化しようとする運動が出てきた。そのためには、本学部・農学部・富沢教養部・北分校に分かれて活動していたそれぞれの生協を合併しなければならなかった。

昭和三二年、安孫子たちは法人化に向けた作業を開始する。まず六月に「東北大学消費生活協同組合」を設立。九月には法学部生の力を借りて法人化の申請書類をまとめ、一二月には四分校の生協の合併を果たした。

安孫子たちが中川のもとを訪れる機会も増えた。「専従制への移行、四分校の合併、法人化、どれも理事長の許可が必要なので、そのつど研究室に伺って許可をもらっていました」。中川は、学生たちが「一生懸命取り組んでいることをよく知っていた。「あなたたちの好きなようにやりなさい」。そう言って安孫子たちの背中を押してくれた。そうして昭和三十三年三月、無事に法人格を取得し、自主的な組織としての東北大学生協が確立したのだった。

大学生協への信頼と学生たちへの愛情と

大学生協が育つ過程で中川と学生たちのあいだには強い信頼が築かれていった。

「先生は大学生協という組織そのものを信頼してくれたのだと思います」

安孫子がそう話すのには根拠がある。

中川は、理事長職にあつた一二年のあいだに何度か大学生協の借入れや約束手形に個人保証の判をつけているからだ。

当時の学生たちの思い出をたどると、まず昭和二六年、問屋筋からの要望で発行した約束手形に支払保証をしている。依頼に訪れた学生の目の前で署名をすると「この手形の支払には自信があるんだろうね」とぼつりと呟いたという。

安孫子も専務理事だった時代に二度、中川に借入れの連帯保証を頼んでいる。

当時の大学生協はつねに資金繰りに追われていた。とくに夏休みなどは長期休業のため営業日数が少なく、売り上げが大幅に減少した。出資金も微々たるものだったから、まとまった資金づくりは借入れに頼るしかなかった。

しかし専務理事とはいえ学生に保証能力はない。土地も建物も所有していないので担保物件も持っていない。その点、中川は銀行筋からの信用も絶大だった。

「中川先生の指示で印鑑証明と用紙を用意し、それに署名をしてもらって、光善寺通の自宅に行き、先生の奥さまに判を捺していただきました」

連帯保証だから、万一生協が支払えなくなったら中川に責任が発生する。判断には相応の覚悟がいったことだろう。そのとき抛り所となったのは組織の誕生から見守ってきた大学生協への信頼、ひいては学生たちへの深い愛情だったのではないだろうか。昭和三五年、定年退官を翌年に控えた中川は東北大生協の理事長を退任。昭和三六年二月四日に行なわれた最終講義には、法学部の教授陣や学生たちだけでなく他学部の教授も駆け付け、会場となった広い旧法文学部一番教室が立錐の余地もないほど聴講生で埋め尽くされたという。

多くの人から「中善先生」と親しまれた日本の民法学会の至宝が亡くなったのは、それから一四年後の三月二〇日、仙台に向かう途上でのことだった。

鎌倉の東慶寺には書物を開いた形の墓碑が教え子たちによって建立され、そこにはこう刻まれている。

身分法学の父であり 新民法の母であり

学生を限りなく愛した 先生を敬慕して

東北大学消費生活協同組合第二代理事長
東北大学農学研究所教授

坂本 正幸

多くの生協活動家を育てた
心優しきリベラリスト

【さかもと まさゆき】

-
- 1908(明治41)年 1月15日、北海道釧路町
(現釧路市)に生まれる
- 1932(昭和7)年 北海道帝国大学農学部農業生物
学科を卒業後、北海道帝国大学副手
- 1947(昭和22)年 東北帝国大学助教授
- 1950(昭和25)年 東北大学教授
- 1952(昭和27)年 東北大学農学研究所所長
- 1960(昭和35)年 東北大学消費生活協同組合
第二代理事長
- 1971(昭和46)年 宮城県民生活協同組合理事長
- 1981(昭和56)年 5月4日死去

農学研究所の存続のためにはたらく

終戦から二年が過ぎた五月、仙台にひとりの植物病理学者が赴任してきた。

学者の名は坂本正幸。北海道帝国大学農学部で稲熱病の研究を行っていたが、東北帝国大学農学研究所に欠員が生じたことから助教として招かれたのだ。

戦時中の重苦しい空気から解放され、研究者の階段を精力的に昇ろうとしていた時期だった。「病理学の研究者を」と請われての赴任でもあった。復興途上の仙台の街は坂本の眼にどう映っただろう。坂本は、多くの学生たちを教え育てながら、三三年もの歳月をこの地で過ごすことになる。

赴任した坂本を待っていたのは、農学研究所（以下農研）の存続問題だった。

東北帝国大学は一九四七（昭和二二）年四月に農学部を設置、一〇月に新制の東北大学への移行を控えていた。農学部ができるなら農研は不要との農研廃止論に、研究所員たちは異を唱える。職員組合もこの問題を探り上げ、農研に來たばかりの坂本を委員長に選出して存続運動を展開した。

農研の存続問題はその後もたびたび浮上し、昭和二六年一二月には農研の予算が大蔵省の案から削除されたとの話を聞きつけ、坂本や当時の所長が文部省と大蔵省に復活の陳情をしている。

昭和二七年、農研の所長に就任した坂本は、実験機械の充実や農場の集約など研究

体制の整備を進める。周囲の信頼を集め、昭和三〇年、さらに昭和三三年と続けて所長に再任される。『東北大学農学研究所二十年史』には、坂本の再任について「農研存続を一そう安定的なものにしたいという所員の念願が坂本所長に寄せられたためであると考えられる」と記されている。

農研という弱い存在を守るために坂本は懸命だったのだろう。そしてそれは生協運動への温かい眼差しにつながるはたらき方でもあった。

教職員、学生がともに運営する自治組織へ

昭和三五年、坂本は東北大学消費生活協同組合（以下東北大生協）の二代目理事長就任を依頼される。

初代理事長の中川善之助教授が定年退官することになり、学内の教授陣のなかから「学生とともに大学生協運動をやっていただけのような先生を」と学生たちが坂本の名前を上げたのだった。坂本は「僕は適任じゃない」と一度は依頼を断るが、その後就任を承諾。理事長に就いてからは「生協のことを勉強する」と言って週一回の常任理事会と月一回の理事会に欠かさず出席し、専従役員（以下専従）や学生たちを感激させた。

会議の席では「俺はシャッポにすぎない。きみたち専従と学生が主になって運営し

なさい」とほとんど発言しなかったが、農研所長であり大学評議員でもある坂本の理事会出席は、他の教授理事や大学当局職員への重石にもなった。

東北大学生協の第五代専務理事を務めた高木三男の脳裡には、理事会に出て会議を見守る坂本の姿が強く刻みつけられている。

「大学には学生の自治会、教職員の組合、大学院生の協議会と階層ごとに組織があるが、生協は全学を網羅する唯一の組織でした。坂本先生は、教職員も学生もみな対等に生協の運営について話し合う、オープンで民主的な方向に東北大生協を持っていきたいと考え、理事会で身を持って示された」

一九六〇年代の大学生協はまだ、学生のための組織だった。

六〇年代後半頃から、東北大生協は大学院生や教職員も含めた全学の協同組合へと再編を図る。教職員の組合加入を推進し、教職員独自の組合員組織をつくり、東北大学に学び働くすべての人々の手で運営される組織へと東北大生協を成長させた。

それは坂本が示す、大学の全階層を網羅した自治組織、という方向と合致するものでもあった。

後年高木は、坂本が専従や学生とどのような関係を築こうとしていたか、あらためて知ることになる。次期理事長について話し合ったときのことだ。

「細かいことに口を出し過ぎて専従の仕事がやりにくくなるような理事長では困るし、学生とはフランクに話し合える人でなければな」。そう話す坂本に、高木は「そ

うした配慮の上に私たちを指導してくださっていたのかと、頭の下がる思いがした」という。

学生の厚生施設に、こころも熱心な先生がいたとは

川内キャンパスは、戦後しばらく駐留米軍のキャンプ地だった。昭和三二年、東北大学に移管され、翌年、川内分校・川内東分校（現教養部）が置かれた。当初は、宿舎やチャペルなどの米軍施設をそのまま校舎や講義堂に利用していた。洋式トイレのモダンな建物もあったが、なかには馬小屋の跡と見紛うばかりの粗末な建物もあった。昭和三〇年代の川内の厚生施設は、その粗末な建物内に小さな食堂と売店があるだけだった。「収容人数が少ないので毎日外まで長い行列ができた。雨の日は傘をさして待たなければならぬし、売店と言ってもパンや牛乳を扱っているだけだった。片平地区の厚生施設も似たようなものだった」。

劣悪な環境に、厚生施設の改善・拡充を求める声が高まり、東北大生協はデモや集会で訴えた。昭和三〇年には青葉山移転統合計画が明らかになり、運動はさらに拡大。昭和三二年には「すべてのキャンパスに『恒久』厚生施設を」のローガンを掲げ、厚生会館建設運動に乗り出した。

「食堂などとはとにかくひどかった。そのひどい状態をみんなの共通認識にして話し

合うわけです。食堂を広げよう、新しい会館をつくろう、と。要求を顕在化させ、組織化して運動にしていけば大衆的な広がりを持つ。大学当局も文部省も動かすことができる。そうやって要求を少しずつ実現してきたのです」

高木たち生協の学生や専従が何より心強かったのは、理事長である坂本が運動を支持していたことだった。

坂本の定年退官を記念して編んだ『坂本先生を送る』に、阿部武弘教授理事が思い出を書いている。

—まだ教養部の講師だったころ東京の宿泊所で坂本先生と相部屋になった。少し酔った坂本先生は夜中の一〇時から約二時間、教養部の厚生施設や大学の在り方について講演を続けた。こうも学生の厚生施設等に熱心な先生が居られたのかという印象を強く受けた（要約）—

学生たちの要求を形にするため、他の教職員にも支持者を広げようとしたのだろう。昭和四五年、こうして教養部に待望の厚生会館が完成した。東北大学生協はその後も運動を継続して文系厚生会館、農学部厚生会館などの施設を獲得し、教育環境の充実を図っていく。

弱者の側に身を置く、リベラルな人

坂本は徹底して大衆運動を重視した。坂本の退官の辞（『坂本先生を送る』）から一部を引用しよう。

―生協の志すところが『平和な豊かな生活』にあることは云うまでもない。また誰しもこれを希わないものはあるまい。この理想に一步一步近づいたためには、生協を一つの運動体として把えてゆかねばならない。この運動は資本の論理、つまりその具体的顕れである政治との間に対立を生み出す。組合員の生活の砦となるためには、安価な品をただ供給するだけに留まらない。消費者運動を組織してこれとたえず戦ってゆかねばならぬ。多くの力を結集して戦えるか否かに生協運動の発展がかかっている。

大学の民主化運動や授業料値上げ反対闘争でキャンパスが騒然としていたときも、坂本は学生たちの要求によく耳を傾けようとした。「正当な要求は大衆運動として取り組んでいかなければならない」とする坂本にとって、学生たちを信頼し、気持ちを汲み取ろうとする努力は当然のことだったのだろう。

「坂本先生は一言で言うとりベラルな人だった。つねに弱者の側に身を置き、その信念を貫いた」と高木は言う。

特定の党派とは距離を置くが、組織の必要性や大衆運動の重要性についてよく考え

ていて、「それなくしてモノゴトは進まない、だからあなた方学生がしつかりやりなさい」と学生や専従たちを導いた。施設を拡充したいと要求すればその運動の進め方について示唆を与え、生協運動を地域の消費者にも広げようと発想すればその考えを全面的に支持してくれた。

学生や専従たちにとって、坂本をはじめ代々の理事長はみな仰ぎ見るような知識人だ。「世の中や人間について見識を備えた先生たちがバックボーンとして構えてくれている、それがどれだけ大きな支えになったことか」。そう高木は述懐する。

一人の友人として学生と接し、意見を尊重した

坂本は生協運動の行く道を照らすだけでなく、議論と実践を通して多くの生協活動家を育てた。

仙台の繁華街の横丁に「源氏」という一杯飲み屋がある。昭和二五年、坂本が東北大学の教授に昇任したのと同じ年に開店した小さな居酒屋だ。酒が好きな坂本は、常任理事会などの終了後、よく専従や学生を連れて源氏の縄暖簾をくぐった。静かに飲みながら、みんなが自由に発言するのを聴いていた。議論が激しくなっつてつい大きな声を出しても叱らなかつた。

しかし、バーなどに行つて専従や学生がそこで働く女性にぞんざいな言葉を使った

りすると、「女性はそれなりの事情があつてここで働いているんだから、お客面して横柄な態度をとるんじゃない。働く女性としてきちんと遇さなければいけない」とたしなめた。研究室でも「お茶汲みを女性の仕事と決める必要はない」と言い、自らコーヒーを入れて配った。

師弟を超えた交流は温かく生氣に満ちたものだったろう。

「多くの人たちはそうやって先生の人柄に触れ、生協運動を続けようという気持ちになり、志を抱いて全国に散らばっていった。先生の影響で日本の生協に多くの活動家が生まれた」

それは高木が二〇年にもおよぶ坂本との交わりを通じて得た実感だ。

東北大生協の第四代専務理事を務めた内館晟は『坂本先生を送る』で坂本に次のような謝辞を送っている。

―坂本先生はいわゆる先生としてではなく、一人の友人として私たちに接してくださいました。そしてはるかに年少者である学生の意見も尊重し、学生たちの意見を無視して学校当局との交渉で独自の行動をとられるようなことは、けっしていたしませんでした。先生自ら民主主義を守る手本を示してくださいました。―

一九六〇年代の東北大生協の若者たちは、耳を澄まさなければ聴こえないほど小さな声で話す坂本の話にじっと耳を傾け、背中を見ながら育った。

東北大学を定年退官した後は、東北大生協から宮城県民生協を立ち上げた内館や高

木たちの依頼に応えて第二代理事長を務め、発足間もない地域生協を支えた。

晩年、病に倒れた坂本は郷里の北海道に戻って家族の看病を受ける。北海道には兄、直行が存命だった。直行は山岳画家や随筆家としても有名で、坂本はそんな兄を敬愛していた。系譜を遡れば幕末の志士、坂本龍馬の子孫にあたる兄弟でもあった。

札幌に桜が咲き始めるころ、坂本は不帰の人となる。昭和五六年五月四日、享年七三歳。東北大生協を巣立った多くの教え子に見送られての旅立ちだった。

東北大学農学研究所所長
宮城県民生活協同組合第三代理事長

吉田 寛一

【よしだ かんいち】

- 1912(大正元)年 8月1日、河南町
(現石巻市)に生まれる
- 1939(昭和14)年 京都帝国大学農学部農林経済科を
卒業後、農林省、大東亜省、農事試験
場に奉職
- 1947(昭和22)年 東北大学農学研究所助教授
- 1970(昭和45)年 東北大学農学研究所教授
- 1971(昭和46)年 宮城県民生活協同組合
(現みやぎ生協)理事
- 1972(昭和47)年 東北大学農学研究所所長
- 1980(昭和55)年 宮城県民生活協同組合第三代理事長
- 2009(平成21)年 12月8日死去

協同組合運動に
新しい地平を拓いた
“土壌の人”

豊かな土壌を提供してくれた

八月一五日の終戦をどこで、どのように迎えたか。百人百様の物語がいつせいに白紙に戻ったその日、吉田寛一は青森県十和田市の農事試験場にいた。

「虻を追うのに忙しい耕馬の手綱をとりながら牧草の種子を蒔いている丁度昼時に、息せき切って日本の敗戦の報を農夫が知らせてくれた。一生忘れない憶出である」

晩年に著した詩歌集『ロマンを求めて―人間・社会そして自然』の詞書に吉田はそう記している。さらに「敗戦〓終戦は私にとって治安維持法からの解放を意味した。本州最北端の地、青森県上北地方で生誕。」とも。

吉田の生地は宮城県河南町北村（現石巻市）。〓上北地方で生誕〓は、一九四五（昭和二〇）年八月一五日を再生の日と見てのことだろう。軍国主義の雲の下から抜け出したことに、吉田は快哉を叫びたかったに違いない。

昭和二三年、吉田は東北大学農学研究所（以下農研）に助教として赴任し、農民運動や農業経済の研究を進めていく。

農研の後輩である綱島不二雄が初めて吉田に会ったのは、東北大学入学後の最初の講義だった。農家の立場に立った実践的な話に惹きこまれ、綱島は友人とふたり、知的興奮の冷めないまま吉田の研究室を訪ねた。

吉田の講義の内容もさることながら、行動力にも感嘆した。当時綱島たちは学生

サークルをつくり、蔵王町の北原尾で援農活動を行っていた。ある夜、そこで開いた学習会に吉田が顔を見せた。学習会で話をするため一日に一本しかバスがないような山間部にわざわざ足を運ぶ。農研の教授である吉田には、学部や大学もバラバラの学生サークルを指導する義理もなければ責任もない。にもかかわらず山奥の開拓地まで出向いて熱心に農業問題を語る吉田の姿に、綱島たちは心を打たれた。

吉田は徹底して「与える人」だった。周りに集まってくる人たちへ理論を説き、実践を見せ、人と人を結びつけて農業や協同組合運動に新しい地平を拓いた。

「農協運動、生協運動、産直運動の豊かな土壌を提供してくれた。いや私たち後に続く者にとっては、土壌そのものと言っていい先生だった」

綱島は吉田の器量をそう表現する。

農業の未来を語り合った宮城農民大学

昭和四四年九月、鳴子温泉に県内各地から一八〇名もの農業者や農協職員、研究者らが集まった。吉田を学長とする「宮城農民大学」（以下農民大学）の第一回目の講座だった。

当時は、自主流通米制度や減反政策の導入など農業の大転換期で、みなそれぞれに切羽詰まった問題を抱えていた。山形県農民大学を主宰していた農民詩人の真壁仁と

協同組合短期大学で教鞭をとっていた美土路達雄の講演を聴き、熱い議論を分科会でたたかわせた。

吉田が朋友の美土路とよく話していたのは、「農民大学で農業論、協同組合論を実践の場に展開し、農協や生協の運動に新しい流れをつくっていこう」ということだった。

年に一回の開講だったが農民大学に対する期待は大きかった。事務局を担う綱島を中心に、農協職員や学校の労働組合の教職員などで運営委員会をつくり、月例の企画会議を開いた。会議はいつも日本の政治から農業と農協、生協運動、地域の課題まで話題が広範におよび、綱島は「二時間ぐらいのその会議が自分にはとても勉強になった」と懐かしむ。

南郷町農業協同組合の組合長から宮城県農業協同組合中央会の第六代会長に昇った駒口盛も、農民大学の運営委員の一人だった。駒口は『農業協同組合新聞』のインタビューで吉田のことを次のようにふり返っている。

「昭和四七年か四八年頃だったか、吉田先生から『いまからの農協の行き方は組合員の生活をベースにして考えなければならぬ』と言われた。(略) そうすると専業も兼業も、正組合員も准組合員も、その区分けは全然関係ない。農業協同組合だから『地域』はある。だから、その地域のなかの住民すべてが参加する協同組合運動はどうあるべきかを問え、ということです。」

農民大学はこうした地域特有の問題を話し合うため、角田市や栗原市などで分校を開催した。若い農業者たちはそこで思い思いの考えをぶつけあい、農業の未来を語り合った。

吉田の協同組合運動論は、こうして研さんを積んだ農民大学の卒業生たちの手で、やがて生産者と消費者が一緒に取り組む産直運動や、農協・生協同士の協同組合間協同へと結実していく。

農協の将来像に記した「産直」の文字

吉田はつねに在野にあつて農業者たちとつながり、地域農業の課題と向き合った。「仙南地区広域営農団地」もそのひとつだ。

昭和三八年、角田市内の七つの農協が合併して角田市農協（現JAみやぎ仙南）が発足。販売事業を検討する過程で、より広域的なまとまりを持つ仙南地区広域営農団地（以下営農団地）の構想が浮上した。構想は仙南地区区内ですぐに共有され、昭和四〇年二月、仙南地域農業経済圏研究会が発足した。

吉田は、片平の農研に研究会のメンバーを迎えて構想が農協運動として正しいこと、組合員の組織化が重要であることを助言するなど、専門的な立場から構想を支援した。脳裡には、当時、岩手県志和農協が試みていた有畜農業による複合経営があった。

たい肥による自然循環を活用した養豚事業で年間計画を立て、農業経営の安定を図るというもので、これを仙南地域に普遍化し展開しようというのが吉田の考えだった。幸いにも角田市農協の労働組合を中心に仙南地区には志に燃えた若い農業者たちが多数いて、吉田の提案に熱心に耳を傾けた。

そこで出てきたのが、生産者と消費者の連携をめざす「産消提携」だった。

「農協の先には消費者がいる。消費者の集まりである生活協同組合と農協が一緒に仕事をしていけば、農業にひとつの展望が開けるはずだ」

吉田はその連携を、生産者と消費者がともに「顔の見える関係」のなかで築き上げる「産直」と名付け、角田市長期計画の農協の将来像に書き入れる。吉田の提唱はその後、網島が「顔とくらしの見える産直」と表わし、現在へと受け継がれている。

窪田立士と産直運動

生協と農協の産直運動が生まれた背景には三人のキーマンがいた。一人は吉田、もう一人は宮城県民生活協同組合（以下県民生協）の内館晟、そしてもう一人が仙南農産加工農業協同組合連合会（以下仙南加工連、現株式会社加工連）の常務理事を務めた窪田立士だ。

窪田は昭和四一年に発足した営農団地の体制づくりに奔走するなかで、吉田が語る

有畜農業の複合経営や産消提携に共感し、農協改革への意欲をふくらませていく。当時角田市農協（現JAみやぎ仙南）職員だった窪田にとって、それは目の前の課題をどう解決していくか、ということと同義語だった。

角田市農協ではちょうどそのころ養豚事業の改善が論議されていた。養豚農家の増加とともに営農団地の取扱量もふえてきていたが、家畜を生きのまま取引する生体取引ではメリットが少ない。食肉センターはすでに稼働していたが一日の処理頭数はごくわずかだった。窪田は、カット肉処理の共同作業場を設置し、付加価値を高めて加工販売していく必要があると考えた。問題は販売先だった。

『みやぎの産直収穫祭』（コープ出版）には窪田の当時の心境が綴られている。

「うちとしては、養豚農家がふえ、規模も大きくなりはじめ、生産量はふえていたものの、どうも農家の利益が少ないので、何とかならないものかと思っただけです。お付き合いのあった東北大学農学研究所の吉田寛一先生に相談したんです」

吉田が紹介したのが、県民生協専務理事の内館晟だった。窪田は、内館のもとを訪れて仙南地区の事情や今後の農協の計画を説明し、畜産物の取り扱いを依頼する。

一方内館には、仙南地区との取引を単なる「産地直結」ととどめず、食卓の安心・安全や地域経済の自立をめざす「産直運動」として展開していこうとの思いがあった。少し長くなるが内館の思い出を『産消提携20年の情熱』（仙南加工連）から引用する。

「私が宮城県民生協をつくろうと思った動機はいくつかありましたが、そのひとつに農薬づけ、添加物を多用した食品を食卓から出来るだけ少なくしていこうという意志がありました。しかし、お金もなく組織も未確立で、私の意志を理解し、協力して頂ける人になかなか巡りあうことが出来ませんでした。そのとき、農業の再生を掛けて、農産物、畜産物の薬づけを克服し、地場流通を推進することに信念をもって取り組んでいらつしやる窪田さんを吉田寛一先生からご紹介いただきました」

当初は生協を一販売先として捉えていた窪田だが、もともとは農協改革への熱い志から始まった取り組みだ。内館の訴えは、砂に染み入る水のように胸の奥に浸透していったことだろう。窪田はやがて、自ら生産者と生協組合員の交流の先頭に立ち、内館とともに産直運動を力強くけん引していくようになる。

昭和四五年、県民生協と角田市農協のあいだでスタートした産直は、昭和四七年には仙南加工連が誕生して産消提携の窓口を担うとともに、吉田が提唱した有畜農業による複合経営の拠点となる。

現在、宮城の産直運動は商品ブランド名を「めぐみ野」とし、県内の多くの農協が参加する取り組みに成長しているが、端緒は吉田がその能力と強い意志を見込んだ窪田と内館の出会いにあったことを忘れてはならないだろう。

生協人、農協人が育った吉田学校

吉田は地主の長男だった。詩歌集『ロマンを求めて―人間・社会そして自然』には「昭和の農業・農村恐慌の時代、私の回りの東北農村には娘身売りは珍しいことではなかった」として詠んだ自由律の歌がある。

―生きて行く生きる本能だけが取り残されたこの村盲の鶏が日増し増えて来る

農村について多くを語ることはなかったが、ある日、綱島にこんなことを言っている。「農家は、社会的に下に見られているがそんなことはない。底力があって自然のなから深いものを学んでいる人がたくさんいる。我々はそういう人を発見していくことがひとつの大切な仕事になるんだ」

東北大学を定年退官後、吉田は郷里の河南町に住まいを移し、田畑を耕しながら生活するようになる。昭和五五年、県民生協の第三代理事長に就任したが、所用があるときはバスと東北本線を乗り継いで仙台へ出向いた。

傘寿を超えたころ、吉田を慕う農協や生協のOB、現職たちのあいだから「あらためて吉田先生に学ぼう」との声があがり、「吉田学校」というかたちで集いを持つことになった。吉田の家にみんなで集まり、お茶飲み話をしながら協同組合運動論や産直について議論を交わした。

「先生はご自分の考えを押し付けるようなことはしなかったので、みんな話の行間

を読むようにして、それぞれに思考を深めていきました。そういうなかで、多くの生協人、農協人が育っていったんです」

「吉田学校」は、吉田他界後も著書や協同組合関係の書籍をテキストに綱島をはじめとする「教え子」たちの手で続けられている。

吉田の提供する「豊かな土壌」はそうしてこれからも協同組合の人材を輩出していくのだろう。

宮城県学校生活協同組合専務理事
全国学校生活協同組合連合会第四代専務理事

木下 義一

果敢な再建策で危機を救った 新生学校生協の生みの親

【きのした よしかず】

-
- 1921(大正10)年 2月20日、福島県双葉郡久ノ浜町
(現いわき市)に生まれる
- 1947(昭和22)年 塩釜市立第一小学校教員として奉職
- 1948(昭和23)年 宮城県教員組合中央執行委員
- 1949(昭和24)年 塩釜市立第一中学校に復職
- 1953(昭和28)年 宮城県学校生活協同組合専務理事
- 1962(昭和37)年 全国学校生活協同組合連合会
第四代専務理事
- 1963(昭和38)年 塩釜市立第二中学校に復職
- 1970(昭和45)年 富谷町立小学校校長
- 1972(昭和47)年 塩釜市立第二小学校校長
- 1978(昭和53)年 塩釜市立第一中学校校長
- 2008(平成20)年 8月24日死去

決算書の不備を突いた貴重な一石

木下義一が勤務していた塩釜市立第一中学校は港近くの高台にあり、校庭からは淀泊する船や浦戸諸島が見えた。

一九五二（昭和二七）年七月のある日、木下は校長室の机上に置かれた宮城県学校生活協同組合（以下学校生協）の総代会議案書に目を留め、ページをめくった。何か、おかしい…。不審を校長に伝えた。

「この決算書、粉飾ですね。実際は赤字じゃないですか？」

その年の総代会の席上で木下が指摘した決算書の在庫品水増し計上は、学校生協を自壊へ導くことになる。

本件の行方を追う前に、学校生協の成り立ちを概観しよう。

昭和二十二年二月二七日、宮城県教員組合（以下宮教組）が誕生し、六月に宮城県教育会から「学用品消費購買部」の事業を引き継いだ。

購買部は、県内の児童生徒にざら紙やノートなどの学用品を供給するほか教職員用の生活物資も扱っていたが、事業拡大に伴って法的整備が必要になり、昭和二十二年、産業組合法のもとで「宮城県学用品購買組合」と改称した。

終戦から二年、さまざまな法律や制度の見直しと整備が進められていた時期だった。

一九四八（昭和二三）年には消費生活協同組合法が公布される。宮教組も昭和二四

年一月に宮城県学用品購買組合を「宮城県学校生活協同組合」に改組した。ただしこの時点では、法人格を持たない任意組合だった。

時代ごとに組織の変遷を重ねてきた学校生協だが、経営実態はそれまでの荒波を受けて満身創痍だった。戦後の激しいインフレや統制経済の解除を乗り越えることができず、すでに相当額の不良在庫と不良未収金を抱え、資金繰りが極度に悪化していた。木下が指摘したのは、その実態の一部であり、膨らんだ風船を針で突くようなものだったろう。

学校生協は難局を乗り切るため、昭和二七年九月一〇日、法人登記を果たし、法人「宮城県学校生活協同組合」として新たなスタートを切った。

しかし任意組合を精算せずに法人登記したため、約九〇〇万円の負債はそのまま残った。さらにその後赤字が一二〇〇万円まで膨らんでいることが判明。地元紙の河北新報が「波紋投げる先生の商売 赤字千二百万円に」の見出しで報道し、大きな社会問題になった。

一人四〇〇〇円の協力金で再建を目指す

木下は、粉飾決算を指摘した際、監事に推されていた。求められて赤字の実態調査に乗り出したが、待っていたのは混乱して活動停止に陥った事務局だった。

連日連夜の支払督促に神経をすり減らしながら、木下は、高利貸しへの弁済猶予依頼や取り立て訴訟、県の関係部局への対応などに奔走する。

一方で、学校生協の理事・監事である県内中心校の校長六〇余名を緊急招集して対策会議を開き、再建策を検討した。そして一二月の総代会で経営内容をつまびらかにするとともに、「組合員一人当たり四〇〇〇円の再建協力金」集めと利用結集を主な内容とした再建案を発表した。赤字への厳しい批判、解散を叫ぶ声など、逆風が吹き荒れるなかでの再出発だった。

昭和二八年二月、木下は専務理事となって再建の重責を担う。学校諸公簿の配達を手始めに中古のライトバン一台で営業活動を再開。助手席に乗って訪問販売に同行し、ときには学校の宿直室を借りて寝泊まりした。

「四〇〇〇円の再建協力金」は、運営資金の四〇〇万円を県内一万人の組合員(教職員)に協力してもらおうとする取り組みだった。理事である校長たちはそれぞれ地区内の学校を訪れ、抛出を要請してまわった。同時に、学校生協の利用結集の呼びかけも積極的に行なった。

木下のもとで学校生協の再建に尽くした蘓武昌春は、「木下君のために」と温かい支援を寄せてくれた組合員がいたことに、いまでも感謝する。

ある校長は「木下君という男が、我々の先輩がやった不始末をいろいろ整理してくれている。みんな協力しろ」と教員たちに命じ、活動のきっかけをつくってくれた。

ある教員は「あなた方が赤字を出したわけじゃない。木下君が頑張っているんだから俺たちも協力しなければ」と言って協力を差し出してくれた。

木下も、校長や教員たちの厚情に「そう言ってくれる先生方の支援がなければ、俺は専務理事を引き受けていなかったと思う」と述懐したという。

協力は、その後の出資増強運動で出資金への振り替えを求め、経営力強化に役立った。

教職員向けの生活用品供給事業に本格着手

巡回車と木下たちが呼んだライトバンの営業車は、その後三台に増えたが、広い県内をカバーするには至らない。バイクは仙台市内の教材販売や集金などに使用していたため、郡部の学校訪問は手薄になりがちだった。いつか「学校生協、最近全然来てくれないな」と苦情が舞い込むようになった。「来るな」と言われるより「来てくれないと困る」と待たれるようになったのは、経営危機で失墜した信用が徐々に回復しつつあったことだろう。

当時、巡回車の荷台には学用品に混じって毛布や蚊帳など生活用品の見本が積まれていた。

昭和三〇年八月、木下は研究会のために佐賀県学校生協を訪問し、同校の教職員向

けの生活物資供給や店舗供給に着目する。再建のためにさまざまな方策を探っていた木下は、これにヒントを得て「教職員の生活用品供給事業」に本格的に着手することを決意する。

一〇月には県内一五校の体育館を借用して展示会を開催。洋服、ネクタイ、靴、自転車、電気洗濯機など、さまざまな生活用品を案内した。会場には学校生協の職員はもとより仙台の販売店や東京のメーカーのセールス担当なども参加し、会を盛り上げた。商品は供給した分だけを仕入れとし、買ってくれた組合員には三回、五回、一〇回の月賦支払いを奨めた。

またカタログ『教員生活』（全国学校生活協同組合連合会発行）を活用して、生活用品の供給に取り組んだ。営業職員たちは、学校に教材を届けるかたわら、組合員である教職員とその家族に生活用品をセールスした。高額商品中心であることが、供給高の向上に貢献した。

さらに木下はカタログ供給でも月賦支払いを推奨し、月末までに学校へまとめて請求書を送る仕組みをつくった。支払いは給与からの天引きなのできわめて安定した顧客を獲得したことになる。

この学校生協の取り組みに関心を抱いたのが、地域の有力な小売業者だった。当時、学校生協の仕入れには限界があり、組合員の人気が高い家電品や時計、洋服の供給は困難だった。そこで地域の信頼できる小売業者と「指定店」の協定を結び、学校生協

の指定店として各学校の職員室に出入りできるよう図った。

こうして新たな販路拡大が進み、月賦制度を取り入れたカタログ供給と合わせて、学校生協の経営再建を支えた。

ただし木下は後年、指定店供給について「そこに安住してはいけない。指定店を活用はするが、自主供給六〇パーセントを達成するのが大切」と釘を差している。安きに流れるリスクを危ぶんだのだろう。蘓武はこうした木下のセンスを「先生というより事業家としての眼を持っていた」と称える。

学校生協の地域化は生協運動発展の必然である

木下はアイディアを熟考して「良し」と判断すれば即座に実行に移した。

昭和三十三年一〇月、学校生協は教職員を対象に、肌着の共同購入を開始した。手書きで案内チラシを作成し、仙台市内の学校を中心に歩くと、良い物が不足していた時代だったこともありあちらこちらで歓迎された。「始業前に職員室で喋っていた」と許可を出してくれる校長もいて、営業職員たちは一層張り切って説明に回った。

この取り組みに自信を得た学校生協は、その後、カッターシャツの予約共同購入、盆と正月の食品予約共同購入へと事業を広げていった。冬場は木炭行動隊と称し、木炭の共同購入に一丸となって取り組んだ。

その過程で木下が考案したのが、「職場班」とその班をまとめる「生協係」だった。「組合員がバラバラに結びついているのではなく班としてつながり、班長である生協係が要を締める。そのためには各学校に生協係を選出してもらわなければならぬ」

生協係の選出を呼びかけたところ、九一パーセントの学校から手が挙がった。学校生協は生協係の教職員を窓口にして情報提供を行ない、チラシの配布や注文の取りまとめを依頼した。教員である木下への敬意や連帯感がオープンな関係を生んだのだろう。それだけゆるやかな時代だったとも言えるし、そうした関係のなかで学校生協の再建は果たされていったとも言える。

学校生協は、教職員を組合員とする「職域生協」だ。木下は、再建に取り組むなかで学校だけの協同組合運動には限界があると感じるようになっていた。

昭和三〇年には生協法のいわゆる「員外利用」問題が浮上し、学用品だけを扱う株式会社宮城県学校用品協会が学校生協から分離独立していた。

全国学校生活協同組合連合会の理事を務めていた木下は、生協運動の流れを俯瞰し、地域の主婦を含めた消費者主導の生協運動こそが今後の本流となるべきであると考え、「学校生協の地域化は生協運動発展の必然である」と提起する。

当時東北で消費者主導の生協運動に取り組んでいたのは、鶴岡生協（現生協共立社）だった。昭和三二年暮れ、鶴岡生協の新しい店舗を訪れた木下は、買い物をしてい

組合員から「生協さんには班でまとめて払う」との話を聞き、自分の考えの正しいことに確信を持つ。そして帰仙後、学校生協の店づくりに向けてさっそく出店準備に掛かったのである。

石巻の裏町（現中央二丁目界隈）に貸店舗が見つかり、昭和三四年四月二六日、学校生協は日用雑貨と一般食品を扱うセルフサービスの店「石巻分配所 生協ストア」を開店する。全国の学校生協で初めての地域店舗だった。

生鮮食品が無いことや一般市民の生協加入が進まないことから石巻での「地域化」は難航したが、職員たちは営業の継続に奮闘した。

昭和三六年には仙台北分配所（現みやぎ生協柏木店）開店、昭和三八年には手狭になった石巻分配所を市内穀町に移転、さらにその三年後に開店した石巻駅前店へ事業を継承し、店舗事業の充実を図った。

木下は昭和三七年に専務理事を退くが、木下の蒔いた地域化の芽は、こうして学校生協の事業の柱に成長していく。

昭和二七年の法人登記から二九年目、宮城県民生協との対等合併を翌年に控えた学校生協は組合員数七万四千人、出資金九億四千万円、供給高一四五億円の規模を持つ消費者生協となっていた。

蘓武は自身が編んだ『学校用品とともに歩んだ40年』おりおりの記と資料編『』のなかで、木下の専務理事時代をふり返り、「当時の組合員は木下義一氏のことを学校

生協の立て役者とか新生学校生協の生みの親であると称した。事実、もし木下義一氏がその任に就かなかつたら、学校生協は解散の道を辿っていたらう」と記している。

後年木下は富谷町立小学校や塩釜市立第二小・第一中学校で校長職を務めたのち、永住の地と定めた塩釜市梅の宮地区の地域活動と市政活動に挺身している。

生協運動のため、組合員と職員のため、そして地域のため。生涯、利他に生きた人だった。

宮城県学校生活協同組合組織部長
みやぎ生活協同組合理事

高橋 多賀子

学校生協再建を支え、 家庭班活動の先駆けとなる

【たかはし たかこ】

-
- 1925(大正14)年 12月23日、遠田郡涌谷町に生まれる
1944(昭和19)年 宮城県女子専門学校を繰り上げ卒業
1946(昭和21)年 涌谷小学校(現涌谷第一小学校)
に奉職
1947(昭和22)年 涌谷中学校に転任
1953(昭和28)年 宮城県学校生活協同組合に奉職
1982(昭和57)年 みやぎ生活協同組合理事
2006(平成18)年 6月16日死去

人生の分岐点を超えて学校生協職員に

寒い日だった。平均気温零度、白い息が闇に流れて消えた。一九四七（昭和二二）年午後九時一五分、NHKラジオから「二・一ゼネスト」中止を伝える声が流れてきた。国鉄職員をはじめとする労働者四二万人の首切りの撤回、平均賃上げ要求などを掲げ計画していた二月一日のゼネラルストライキが頓挫したのだった。

涌谷中学校の教員だった高橋多賀子はこの日のことを後年『宮教組物語 あしあと・40年』に綴っている。

―二・一ストは中止になりました。凍てついた道を泣きながら帰ったあの夜のこと
は、やはり今も深い記憶の中であざやかに思い出される場面です。―

先輩教員たちと一緒に起こした行動であり、大勢の父兄の支援も受けていた。「この小さな町で取り組んだ二・一ストの闘いが私を変えました」と言うように、この体験は人生の分岐点となった。

多賀子は当時、中学一年生を受け持ち、バレー部で生徒とともに汗を流す日を送っていた。まだ二一歳。さぞ澁刺とした教員だったことだろう。

だがその生活はレッドパージで断ち切られる。昭和二四年九月退職勧告、宮城県教員組合の臨時大会が開かれるが救援の手は伸びず、多賀子は複雑な思いを抱えながら一二月一日、職を退いた。

戦後間もない時期、食べることに精一杯なのは多賀子も同じだった。ひかり書房という小さな書店で本の配達をしながら多賀子は細々とその日を暮らす。教員を辞めてから三年が過ぎたある日、多賀子は街で懐かしい人から声をかけられた。「多賀ちゃん、いま何をしているんだ?」。先輩教員の木下義一だった。木下は当時、宮城県学校生活協同組合（以下学校生協）の専務理事を務め、経営危機に陥った学校生協の再建を目指していた。「良ければ仕事を手伝ってくれないか」と言う。「思想は関係ないよ。いい仕事をしてもらえばいい」。

木下の温かい言葉が嬉しく胸に響いた。

四面楚歌のもとで受け取った温かい励まし

当時、学校生協は一二〇〇万円の赤字を出し、「武士の商法」と叩かれていた。そこへ転職するのだ。給料が安く仕事が大変なことは覚悟の上だった。昭和二八年五月一日、多賀子は再建を目指す学校生協に自分の場所を見つけ、新たな道を歩み始める。最初の仕事は倉庫に山と積まれた不良在庫の処理だった。一円の得にもならないばかりか逆に処分費用がかかる商品の山は赤字の象徴に見えたことだろう。暗澹たる思いに捉われながら、多賀子はひたむきに仕事をこなしていった。

経営危機の責任は前の執行部にあるのだが、批判の眼は多賀子たち職員にも向けら

れた。学校生協に対する不信心は根強く、営業に行っても職員室に入れてもらえず玄関払いされた。四面楚歌という言葉を噛みしめる日々だった。

それでも、協同の火は消せない」と木下や理事を務める学校長たちが「組合員一人当たり四〇〇円の再建協力金」と利用結集の再建案を掲げて立ち上がると、徐々に応援の輪が広がるようになった。多賀子たち職員は利用拡大を目指し、巡回車に学用品や教員向けの生活用品を積んで県内の学校を営業して歩いた。供給目標を達成したことが分かる拍手が起き、ときにはお茶と餅菓子で乾杯した。

こんなこともあった。

「学校の教材を注文したいから誰か来るように」と志津川の中学校校長から連絡があり、多賀子が赴いた。朝六時半のバスで出発し五時間ほどかけて着くと大層親切にされた上、「一年分の理科教材を発注するから、頼むよ」と四五万円もの大金を渡された。見たこともないような大金に驚き、ただただ落とさないようにとお金を抱えて事務所に戻った。

多賀子はそのときの心境をこう話している。

「こういう人が世のなかにはいるんだなあと、本当に感激しました。生協だから注文するよ、という方たちがいっぱいいらっしゃいました。そういうことで再建の道を踏み出したのです」

組合員の暮らしと健康、平和を守る役割を果たそう

供給高のほかに多賀子たちが懸命に取り組んだのは利用代金の回収だった。営業職員から「何百万、何十万の代金を回収できました」と報告があり、金額が大きいとみんなで拍手した。「これで今月は給与の遅配がないだろう」という安堵感からだった。徐々に再建の光は見え始めていたが、台所が火の車であることに変わりはなく、最初二一日支給だった給与は二五日になり二八日に遅れるようになってきていた。学校生協再建のため歯を食いしばって頑張っているが、限界がある。採用の時期によってまちまちだった給与条件の改善や超過勤務手当などの問題も山積していた。

「組合員の暮らしを守るために、職員の暮らしが犠牲になるのはおかしい」
労働組合結成の声が自然と沸き起こり、昭和三三年、学校生協の労働組合が誕生した。執行委員長には後輩の蘓武昌春、書記長に多賀子が就き、ガリ版刷りの機関誌『にじ』を発刊した。

「生協は、組合員である先生方に出資していただいて運営ができる。剰余金は組合員のものであり、私たち職員はそれに奉仕する立場なんだ。生協の主人公は組合員。私たちは組合員の暮らしと健康、平和を守る役割をきちんと果たそう」

そんな思いを込めて、「不正・不勉強・不親切をなくし、組合員から信頼される従業員となろう」という方針を掲げた。

多賀子はどんなときもはつきりと自分の意見を述べた。職員の行動に問題があれば、遠慮なく指摘した。経営委員会で白熱する議論の多くは多賀子の発言や問題提起が呼び起こしたものだ。多人数決で決めても「私は反対だったということ」を記録しておいてください」と念を押した。しかし議論が終われば執着を捨て、颯爽と職員の先頭に立って活動した。

「私たちはとんでもない間違いを起こすところだった」

木下専務理事の信頼を得ていた多賀子は、全国で開催される研修会によく出ていた。日本生活協同組合連合会（以下日本生協連）の「婦人活動家会議」もそのひとつだ。多賀子の研修報告を聞いた蕪武は、学校生協に入ったばかりということもあって目を啓かれる思いをした。

『職域生協』である学校生協は、組合員は学校の教職員、理事の多くは校長である。ところが他生協では、地域の主婦が活動の中心で、理事も女性が多いという。それは、消費者主導の地域生協が生協運動の本流になっていることを意味していた。

その後も多賀子は、日本生協連で活動する女性たちや消費者生協として日本の生協運動をリードする灘神戸の人たちとの交流を通じて、貪欲に知識を吸収していく。

木下専務理事から「地域化」の方針が示され、石巻に新店することになったのはそ

んなどきだった。

学校生協と地域生協のあいだには大きな隔たりがあることを多賀子はふだんの学習で実感していた。一度しっかりと消費者生協の店舗事業を見ておかなければと考え、昭和三〇年に誕生した鶴岡生協（現生協共立社）へ研修に行った。

そこで多賀子は漠然と抱いていた不安の正体に突き当たる。

学校生協が供給しているものは学用品や教職員向けの生活用品だ。しかし鶴岡生協の店舗には野菜などの生鮮品が並んでいた。取扱う商品が違うのだ。学校生協が計画している店舗には生鮮を扱うという発想がまったくなかったことに気付き、多賀子は「いまのままではダメだ。私たちはとんでもない間違いを起こすところだった」と、同行していた蕪武と顔を見合わせた。

しかし学校生協が生鮮品を扱うことはすぐには難しい。そこで食品は缶詰や菓子など日持ちの良い食品から扱いを始めることにした。靴下や肌着、化粧品、洗剤など地域住民の要望に添うであろう雑貨を揃えるようにした。

こうして昭和三四年四月二六日、石巻に学校生協の一号店「石巻分配所 生協ストアー」が開店した。店はセルフサービス方式で入り口に二〇個ほどの買い物カゴを置き、レジスターを一台設置した。店舗での供給のほか、店にある缶詰、乾麺、毛布カバー、シーツなどを車に積んで学校への巡回も行なった。

家庭班を中心に広がった組合員活動

鶴岡生協で多賀子が学んできたものに「家庭班」があった。鶴岡生協も最初につくった店舗は小さかったが、そこに組合員が結集して事業を支えていた。その仕組みが家庭班だった。

石巻分配所はなかなか供給高が伸びず、厳しい経営を強いられていた。多賀子は店舗周辺の住民を組合員にして家庭班をつくることを提案。石巻分配所が市内穀町に移転するのを機に石巻と仙台で家庭班づくりを進め、班会や組合員拡大活動に取り組み始めた。記録では昭和三七年三月から活動開始とあり、宮城県内の家庭班活動に多賀子が先駆的な役割を果たしたことが分かる。

こうして石巻に一八班、仙台に一五班の家庭班が誕生し、学校生協の地域化は家庭班を中心にした組合員の力で成し遂げられていくことになる。

組合員が増えた石巻分配所も、赤字店から繁盛店へと変身することができた。穀町の石巻分配所で店長を務めた笠原信三は、その理由を青果の市場仕入れや競合店対策とともに「毎月の班長会や班会での意見、要望に真剣に取り組み、商品や売り場の改善につなげたことが最も大きな要因であったと思っています」と語っている。

昭和四一年に石巻駅前へ店舗を移転したあとは、家庭班で牛乳の共同購入を開始。多賀子は翌年の総代会議案書に「石巻の家庭班で醤油の味覚テストを行ない生協醤油

の開発と共同購入を開始する」「家計簿記入活動を開始する」計画を明記する。

生協醤油の開発は地元の味噌醤油醸造店・毛利屋に委託し、組合員の味覚テストを経て製品化された。家計簿は全国の地域生協を担う女性たちと連携しながら活動を進めた。組合員と一緒に、梅干しや食肉など角田との産直活動にも取り組んだ。石巻駅前店では、家庭班員の全国消費者大会参加、家計簿・商品研究・手芸のグループの発足など家庭班を中心に組合員活動の輪が広がっていった。すべて多賀子の発想と行動力の成せる業だった。

昭和五七年、学校生協は宮城県民生協と合併しみやぎ生協が設立される。多賀子は生協を退職し、地域担当理事として後進の活動を支えることにした。

蘓武たちは気性のさっぱりした多賀子を「お多賀さん」と呼んだり、ときにはふざけて「タカオさん」と呼んだりした。あまり飲める口ではないのに給料をもらうと「飲みに行こう」と後輩を誘って中心街のバーに繰り出した。職員旅行では童謡の『月の砂漠』を唄いながら踊り、休憩時間には同僚とともに事務所の前でバレーボールに打ち興じた。「あの人が言うなら間違いない」と誰からも信頼されていた。

子どもたちから先生と呼ばれていた時代より、はるかに長い時間を「多賀子さん」と頼られて生きてきた。享年八〇歳。本人の遺志で葬儀は行わず、戒名もつけず、家族や親しい人々に見送られ旅立った。

※屏写真提供／荒川節子

宮城県民生活協同組合初代専務理事
みやぎ生活協同組合初代専務理事

内館 晟

道なき地上を歩き、求めた
生協運動という希望

【うちたて あきら】

-
- 1938(昭和13)年 茨城県に生まれる
 - 1962(昭和37)年 東北大学生協同組合専務理事
 - 1970(昭和45)年 宮城県民生活協同組合初代専務理事
 - 1982(昭和57)年 みやぎ生活協同組合初代専務理事
 - 1990(平成2)年 日本生活協同組合連合会専務理事
 - 1998(平成10)年 生活協同組合市民生協コープさっぽろ
理事長
 - 2005(平成17)年 10月13日死去

宮城の主婦層を中心に地域生協をつくる

一九七〇（昭和四五）年四月五日、薄曇りの、まだ寒さが残る日曜日。仙石線多賀城駅の近くに、二〇〇坪の売り場面積を持つスーパーマーケットがオープンした。宮城県民生活協同組合（以下県民生協）の第一号店、多賀城店だ。

店内では、この日に向けて厳しい学習と訓練を積んできた若い職員たちが、外の寒さを吹き飛ばすように元氣よく組合員を迎えた。職員も多くは大学生協の出身者で、ある者は前職を退き、ある者は卒業後の進路を変えて消費者生協という未踏の地に飛び込んだ。みな若く、無から有を生み出すエネルギーに満ち溢れていた。朝から夕まで息つく暇もなく働き、夜は清掃と品出しを終えたあと反省会で酒を酌み交わしながら夢を語り合った。

職員数一〇数人、組合員数約二〇〇〇人から始まったこの組織が、やがて全国でも有数の生協に育つことを、このときどれだけの人が予測できただろう。

県民生協は、東北大学消費生活協同組合（以下東北大生協）の「地域生協設立構想」から生まれた。

それを率いたのが東北大生協専務理事を務めていた内舘晟だ。

昭和三〇年代、大学生協の活動家たちは、運動の拡大・発展をめざし、地域生協の設立活動に乗り出す。当時の生協運動は労働組合主導型の職域生協が主流で、消費者

主体型の地域生協は、規模・活動で抜きこんでいた神戸のほかには福島、鶴岡などごく一部にだけあった。大学生協の地域化戦略はそうした地図に風穴を開けるものだった。他大学との連携のなかで地域化の動きを知った内館は、「消費生活は地域の主婦によって営まれている、宮城の主婦層を中心に地域生協をつくろう」と考え、準備に取り掛かった。

一〇巻もの『ビッグストアへの道』を丸暗記

内館は、大学生協で累積赤字の克服や雇用問題など経営の修羅場をくぐり抜けていた。弘前大学、秋田大学、山形大学、岩手大学の大学生協設立支援や、教職員を含む全学的な生協への組織再編で存分に指導力を発揮するなど経験も積んでいた。

しかし大学生協と地域生協では社会に対する影響も求められる能力も違う。消費者の役に立つには、どのような事業形態が望ましいのか、準備を進める仲間たちと議論を重ねた。

他大学生協がつくった地域生協の多くは、利益を出しやすく組合員が事業に参加しやすい共同購入路線を採っている。だがそれで組合員のためになるのか。店舗なら組合員がいつでも自分の都合の良いときに、ほしいものを買える。生鮮食品から日用品まで豊富に大量に商品を提供できる。一般の小売業と競争していくことになるが、組

合員の利益に適うのは店舗事業だ。ただ共同購入には生協独自の良さがあるので、店舗七・共同購入三の割合がよいだろう。

内館たちはそう判断し、店舗を事業の主軸に据える。

当時流通業の先端はアメリカだった。内館は、アメリカの最新のチェーンストア理論を紹介した渥美俊一の『ビッグストアへの道』に着目する。最新の流通理論を習得するため、大学生協のなかから精鋭を選んで、一〇巻にもおよぶ『ビッグストアへの道』を丸暗記させることから始めた。暗記が終わるとテストを実施し、落第者には再試を言い渡した。合格するまでテストは続いた。悲鳴をあげる者もいたが、内館は妥協しなかった。そうして一回一泊二日の合宿を繰り返してテキストを確実に一冊ずつ消化し、全員が宮城県内一の流通業になる〴〵という高い意志を共有していった。

組合員から支持された安全・安心な食品の提供

内館とともに、東北大片平北門食堂の地域生協設立準備事務局に詰め、多賀城店開店に向けて走り回ったのが、釜范勝宏だ。店舗の用地探しから始まり、農水産物卸商など取引先の新規開拓、組合員加入活動と苦労の連続だった。釜范たちは、訪問販売や宗教の勧誘と間違われながらも一日一〇名獲得を目標に歩き回り、ようやく二〇〇〇人の組合員を獲得した。「私を含めみんなは、仕事はきつかったが（超長時間勤務

の上に残業手当はゼロ)労働することは楽しかった。何しろ我々には夢があった。」と、釜范は追想文集『内館晟さんを偲んで』につづっている。

多賀城店は数カ月で軌道に乗り、初年度から黒字を計上した。内館は「ひとつずつ店舗を黒字にし、人が育つてから次の店を出していく」ことを出店の方針に、八木山店、南小泉店、西多賀店と一年ごとに店を増やしていった。みな、創業メンバーと同様に『ビッグストアへの道』を徹底的に頭に叩き込み、現場で技術訓練を積んで新店に参加した。店舗の建設資金も二号店からはすべて自前で用意した。

県民生協が誕生したころ、食品の安全性が大きな社会問題になっていた。消費者のあいだに高まる食への不安や不満に対し、生協は「安全・安心な食べ物」を提供することに徹底してこだわった。有害な食品添加物を排除・削減する運動や有機リン系の農薬を使用しない農産物の生産、生産者と消費者の連携による産直活動など独自の取り組みを進め、組合員の支持と信頼を集めた。

一方、店舗戦略では「店舗の標準化」に最大の力を注いだ。とくに組合員の食生活のニーズを満たす適正規模の売り場面積をつくり、運営していくことを重点課題にして取り組んだ。競争力を持つ業態がスーパーマーケットからSSMと呼ばれるスーパーマーケットへ、さらにショッピングセンターへと多様化していくなかで、県民生協の売り場面積も二〇〇坪から四五〇坪、六〇〇坪と変わっていった。そこにどの商品をどのような構成で並べていくか、競合店とどう差別化を図っていくか。内

館は、標準化の業務を誰でもできるように独自の仕組みをつくりあげ、組合員の支持を得る売り場づくりや労働生産性の向上を実現した。

また共同購入事業では、店舗利用者に共同購入の利用を積極的に奨める戦略をとった。店舗・共同購入どちらも利用する組合員は利用高が大きく、両事業のコアカスタマーとなって県民生協を支えた。

こうしたさまざまな事業戦略が県民生協を押し上げるエンジンとなり、順調に組合員数も業績も伸ばしていったのである。

二つの生協の合併で誕生した「みやぎ生協」

宮城県内には、県民生協の前に、セルフサービス方式の店をオープンしていた生協があった。宮城県学校生活協同組合（以下学校生協）だ。学校生協は教職員を組合員とする職域生協だったが、住民を組合員に店舗展開を図っていた。県民生協は後発だったが、創立以来単年度での赤字を記録することなく組合員への配当も続けながら店舗数を増やしていた。生協は県域による事業展開の制約を受けている。遅かれ早かれ学校生協店舗との競合は必至だった。

当時学校生協では西條典雄専務理事が采配を振っていた。

「内館くんとは、多賀城店をつくったところに初めて話をしたが、若いながらもな

か大した男だと思っていたんだ」

ふたりは腹を割って両生協の方針を話し合う。最初は国道四五号線を境に商圈を分けることも検討したが、組合員から見ればどちらも「生協」の看板を掲げた店であることに変わりはない。

そもそも生協の理念は同じなのだから、組織を統一して生協運動を進めていくべきではないか。統合による組織の拡大は経済的合理性から言っても正しく、一般の小売業との競争に打ち勝つていく力にもなるだろう。内館の「学校生協と県民生協は将来対等な立場で合併し、地域生協として再出発する」という提案に、西條も同意する。

しかし課題はあった。学校生協は戦後の生協法誕生とほぼ同時期に発足した組織で、県民生協より歴史が古い。組合員たちが快く賛成してくれるか。懸念を口にする内館に西條は一言「大丈夫、説得する自信はある」と答える。

こうして合併案は受け入れられ、六年計画で統合が進められることになった。

とはいえ組織の体質も職員の意識も違う。統合しやすいところから着手していくことにし、最初の二年で商品を中心とする取引を統一。次の二年で地域の運営部門、翌年に経理部門、最期に組合員組織を統一した。

学校生協の教職員向け営業活動は、地域の組合員を対象にした共同購入システムに統合することにした。

店舗事業の統一では、県民生協が磨き上げた「店舗標準化」の原則を貫いた。三〇

○坪の店であれば肉は八本、魚は一〇本のケースをどこの店も同じように並べ、効率化を図る。両生協の職員同士が顔を突き合わせながら「店舗標準化」のルールに沿って、売り場をつくっていくことで、合併に向けた気運も高まっていった。

昭和五七年三月二三日、両生協合併によってみやぎ生協設立。それは宮城県内ナンバーワンの小売業の誕生でもあった。

日専連仙台台会との業務提携

新生みやぎ生協は、西條が理事長として行政など外部機関との折衝を担当し、内館が専務理事として経営を見ることになった。

「生協に対する行政の見方を、信頼される組織へと変えていきたい。組合員の力を結集して取引量を拡大し、商社から見ても魅力ある組織をつくる、生協の考え方を形にした商品をつくっていく」。ふたりでそんな話をしたと、西條は懐かしむ。

そんななか喫緊の経営課題となったのが、地元中小小売事業者との関係づくりだった。大規模店舗法の規制強化や員外利用禁止などで、生協は地元の商店会からたびたび厳しい注文を受けていた。一部では出店反対運動も起きていた。

打開の方法はあるか……。内館は、何か政策を打ち出していくとき、課題について幹部に語りかけ、意見を聴きながら自分の考えをまとめ上げるのを常としていた。

このときも、商品部長を務めていた池上武を呼んで問いかけている。「地域社会を動かしているのは、農村部なら農協だ。では都市部はどこだろう」。

連携相手を想定しての質問だった。みやぎ生協は産直活動で角田市農協や田尻町農協と関係を築き上げていたが、都市部の団体とはまだパイプが無い。

「都市部は商店会だと思う」と内館は言う。商店会と生協は商売上のライバルだ。内館の意表を突く発想に、池上は驚く。

真意はこうだった。「商店会の人たちはさまざまなお祭りを催したり、町内会の役に就いて地域社会を担っている。生協が今後も地域で活動していくためには、こういう人たちと手を組んでいくべきではないか」。

昭和五九年、みやぎ生協は仙台の商業界に大きな影響力を持つ日専連仙台会と業務提携を果たす。共用カードの発行のほか消費税増税反対運動でも協同で取り組むことを決め、地域経済界に大きなインパクトを与えた。

経営再建の道すじをつけ仙台に戻る

一九九〇（平成二）年、内館は請われて日本生活協同組合連合会（以下日本生協連）の専務理事に就任する。県民生協を設立してちょうど二〇年目だった。

みやぎ生協の経営を後進に譲り、内館は日本生協連で商品事業の改革、共済事業の

拡大・推進に取り組む。全国生協の組合員数は順調に増加し、二〇〇〇万人に届こうとしていた。しかし単協の一つひとつを見ればさまざまな問題を抱えていることも事実だった。とくに北海道はバブル経済崩壊の影響もあり、コープさっぽろや釧路市民生協などの経営破たんが表面化していた。日本生協連はコープさっぽろに一〇〇億円の資金支援を決定、内館が常勤の理事長として経営再建の指揮を執ることになった。

平成一〇年、北海道に渡った内館を待っていたのは、資金繰りがつかず支払い日には一万円札を主要店舗から集めなければならないという、まさに瀕死の状況に陥ったコープさっぽろの姿だった。就任半年後には実質四〇〇億円を超える累積赤字が判明。内館は再建に向けて次々と改革を断行していった。店舗は小型店を中心に最大時の半数まで減らし、大型店で自営していた非食品部門はテナント化。赤字を出し続けていた子会社などの不採算事業は切り捨て、協同購入と共済事業を強化した。さらに労働組合の同意を得て正規職員・パート職員の大規模な削減と残った職員の給与削減を実施し、職員を労働の評価に応じて処遇する制度を導入した。

一方、一〇〇カ所を超える事業所に最低二回は足を運び、職員や地域の組合員と話し合う機会を持った。ある職員は「取引先に挨拶をして回る内館さんの姿に感激した。この人についていければ、と思った」と語り、またある職員は「赤字店舗のことなど職員が思っても言えなかったことを内館さんが言ってくれた」と感謝した。

東北大生協時代からずっと内館と歩みをともしてきた池上武は、「みんな内館さ

んに附いていったのは、彼の言っていることが正しいというほかに、公平で私心のない人だったから」と言う。「みんなが考えていることに思いを巡らせながら、次にやることを考えていく人だった」とも。それは東北大生協、県民生協、みやぎ生協、日本生協連、コープさっぽろと仕事の間は変わっても、変わらずに持ち続けた芯のようなものだったに違いない。

平成一五年、内館はコープさっぽろグループ全体での黒字決算と累積損失の減少を見届けて理事長を退任する。病を抱えながらも全精力を傾けて取り組んだこの仕事、内館の生協人生の総仕上げになった。

内館は、晩年に著した『私家版 私の履歴書』に、身分差別の不条理と悲哀、そして希望を描いた魯迅の短編小説『故郷』の一節を引用している。

―思うに、希望とは、もともとあるものだともいえぬし、ないものだともいえない。それは地上の道のようなものである。もともと地上に道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ。―

仙台に戻った内館は闘病を続けながらもスポーツや映画、音楽、旅行を楽しみ、読書をして過ごした。住まいの近くに残る景色に大学時代の思い出をよみがえらせ、夫人に話して聞かせることもあった。穏やかで静かな日々であったことだろう。

平成一七年一〇月一三日、永眠。六七歳の若さだった。

宮城県民生活協同組合理事
みやぎ生活協同組合理事

外尾 幸子

【ほかお さちこ】

- 1933(昭和8)年 10月8日 三重県久居市
(現津市)に生まれる
- 1956(昭和31)年 結婚、仙台へ移住
- 1963(昭和38)年 子ども文庫活動、新日本婦人の会
活動に取り組む
- 1970(昭和45)年 宮城県民生協八木山店開店準備
活動に取り組む
- 1971(昭和46)年 宮城県民生協理事
- 1982(昭和57)年 みやぎ生協理事
- 1999(平成11)年 8月20日死去

知縁のグループ活動と
多様な組合員活動に道を拓く

八木山店出店に向けて活動を開始

外尾幸子が、イェール大学に留学していた夫・健一とともにアメリカから帰国したのは一九六三（昭和三八）年の初頭だった。

自宅のある八木山は、二人が不在にしていた二、三年のあいだに開発が進み、原生林を拓いて造成した宅地に瀟洒な家が建ち並び始めていた。ただ太平洋を望む見晴らしと長閑な雰囲気は、五年前にこの地に自宅を建てたころと変わりなかった。

明治大学法学部出身で、聡明な光を宿した美貌と穏やかななかにも芯の通った人柄は、大勢の人を惹きつけ、「幸子さん」と親しまれた。本稿でも姓ではなく名で呼ばせてもらおう。

新興住宅地へと変貌を遂げる八木山で、幸子は娘の小学校入学等を機に地域の子ども会や子ども文庫、女性・子どもの命を守るための新日本婦人の会の活動に積極的に関わるようになる。仙台市の図書館から児童書や絵本を借りてきて自宅に子ども文庫を開き、新日本婦人の会では八木山班に属して読書会を開催し、仲間とともにさまざまな本を読み合った。

幸子は、給食の安全を守る取り組みを通じて生協運動にも関心に向け、昭和四五年に創立されたばかりの宮城県民生活協同組合（以下県民生協）で家庭班のまとめ役を引き受けていた。

ある日、幸子はいつもバイクで共同購入の牛乳を配達に来る青年のあらたまった訪問を受ける。東北大生協から県民生協を立ち上げ、初代専務理事に就いた内館晟だった。

当時県民生協は第一号店の多賀城店をようやく軌道に乗せ、第二号店の八木山出店を決めてその準備に掛かっていたところだった。出店には地域の組合員をまとめる理事がいなければならない。内館は、幸子の夫・健一が東北大生協の第三代理事長であり、面識もあつたことから、幸子に県民生協の理事就任を依頼する。幸子の答えはイエスだった。

八木山は昭和三〇年代後半から四〇年代にかけて東北放送の建物や東北工業大学のキャンパス、八木山動物園などが次々と完成し、広々とした丘陵地に新しいまちづくりへの期待が高まっていた。

「このまちに自分たちの手で生協のお店をつくらう」

幸子は仲間たちと一緒に家庭班をつくり行動を開始した。このとき、地域名を冠して名付けた「松波一班」は県民生協初の家庭班として語り継がれることになる。

出店の旗は掲げたものの、創立一年にも満たない県民生協は知名度がまったく無く、そもそも生協の仕組みもよく知られていない。幸子たちは、地域に組合員を増やすための訪問活動や生協の活動を知らせるための班会開催に熱心に取り組んだ。

生協の組合員は出資者であると同時に店舗を利用し、運営に参加する一員であるこ

と、生協は平和でより良い暮らしを協同の力で実現していこうとする団体であること、安全で安心な商品を提供すること、組合員からの出資金で店舗をつくること。

幸子たちの奮闘の甲斐があり昭和四六年六月九日、県民生協第二の店舗となる八木山店が開店した。小さいながら和室の組合員集會室も設置された。近くには開校したばかりの八木山小学校があつて、一緒に街のにぎわいを生み出していた。

八木山店開店の前に開かれた県民生協の総代会で理事に選ばれた幸子は、いっそう生協の活動に力を注ぐようになる。

出資・利用・運営参加の道をつくる

出店準備活動は、家庭班づくりと共同購入の推奨も同時に行なわれた。

共同購入では、班員は毎週注文書を記入して配達日に届いた商品を分配する、班長は注文書を配布して取りまとめ、集金も行なう。「手間ひまのかかる作業だけど、そこがコミュニケーションの場になり、商品や暮らしについて学ぶ機会にもなるんです」。幸子たちはそう言って、家庭班を拡大していった。

生協の看板はCO・OP商品(以下コープ商品)や独自に選んだ安全・安心な商品、地元宮城の農家から届く産直品だった。とくに共同購入は生協が独自に選んだ商品の占める割合が多く、組合員の関心を引いた。

当時は加工食品が大量に流通し始めた時期で、[〃]真つ赤なウインナー[〃]や[〃]漂白した小麦粉のパン[〃]など不要な食品添加物を使用した食品であふれていた。有害な人口甘味料チクロは使用禁止になっていたが、製品回収されず市場に出回っていた。この状況を懸念し、警鐘を鳴らしたのが日本生活協同組合連合会（以下日本生協連）で、不必要な食品添加物の排除を目指して無漂白小麦粉や無着色タラコなど安全・安心な商品開発を進め、コープ商品として提供していた。

利用を薦める以上、なぜその商品を県民生協が提供するのか、なぜコープ商品は安全・安心なのか、理解してもらえよう説明しなければならぬ。幸子は以前から取り組んでいた有害食品問題に加えて日本生協連のコープ商品についても勉強し、班会や班長会で広めていった。

班長会に出たある組合員はそのときの驚きを『外尾幸子遺稿・追悼集 幸せを運んでくれた人』に記している。

― 学生時代有用な添加物として必死で憶えた科学合成品が、立場を変えようと、命を育み、維持するための食べ物の安全性を阻害していることを教わり、ショックでした。生協運動への導入でした。―

一口一〇〇円の出資金積立活動では、元銀行員の経歴を持つ友人のアイデアで、組合員ひとり一人に「出資金積立カード」を作成し、増資のたびにそこへ二〇〇円、三〇〇円と記入していった。パソコンなど無い時代、二〇〇〇人から三〇〇〇〇人の

カードに組合員の名前と出資金の額をいちいち書き入れていくのは、随分と根気のいる作業だったろう。

幸子たちの活動は、図らずも組合員活動の基本である「出資・利用・運営参加」を目に見えるかたちで展開することになったのだった。

商品研究、産直、家計簿と広がる活動

組合員活動を担う理事の一人として幸子はいつも先頭に立ち、新しいことへ挑戦していった。

八木山店開店の二ヶ月後には、家庭班拡大の際に学んだコープ商品についてさらに調査・学習を進めようと「商品研究グループ」をつくる。

沢庵漬けや福神漬けから採った液で白い毛糸を染め上げる合成着色料の実験、水環境と安全性に配慮したコープの洗剤の使用テスト、保存料や殺菌料、酸化防止剤など食品添加物の学習。それは真剣ななかにも、理科の実験のような楽しさや学ぶことの喜びを味わえる集いとなって、県民生協が南小泉店、西多賀店、高砂店と新しく店舗をつくるたびに仲間を増やす原動力となった。

幸子は、商品活動の専門委員を務めた日本生協連で「商品の外尾」と呼ばれていたという。幸子の活動領域は決して商品研究だけに限るものではなかったが、その体系

だった知識と論理的な思考は他の人から見てもやはり顕著だったのだろう。

夏休みには親子向けの仙台卸売市場見学会を企画。商品そのものだけでなく流通過程にも眼を向ける機会を提供した。

また安全性が高く美味しい地場野菜を手に入れるため、八木山店の仲間と産直グループをつくって角田市の野田集落と交流を開始した。組合員たちが野田を訪れて田植えをし、野田で採れた野菜は八木山の神社や広場で産直市を開いて販売した。

県民生協はすでに角田市農協（現J Aみやぎ仙南）と鶏卵や豚肉の産直を始めていたが、組合員が直接産地を訪問することで、「顔とくらしの見える産直」の意味が生産者にも組合員にもより明確に分かるようになった。

また家計簿グループをつくり、景気や物価、税や社会保障と暮らしについての学習を始めた。昭和五三年に日本生協連の全国統一版の「生協の家計簿」が発行されてからは、暮らしの現状をデータで示すための家計集計活動や、生協利用しらべなど活動は一層活発になり、幸子は県民生協の家計活動のリーダーとして、また日本生協連の全国家計専門委員として活躍した。

グループ活動から生まれた知縁のネットワーク

幸子たちの生み出したグループ活動は、のちに共通の価値観でつながる「知縁」へ

と発展していく。

みやぎ生協の元理事長で八木山出店準備活動のころから幸子を知る齋藤昭子は、幸子が遺していったものの大きさをこう語る。

「『地縁』で築いた家庭班はコミュニケーションの場となって豊かな組合員活動をもたらしました。そこに幸子さんたちが、趣味や社会的関心事などの『知縁』によるグループ活動を導入した。時代の変化とともに働き方やコミュニケーションのかたちが変わることで、家庭班のあり方も変わってきました。いまは家庭班だけでなく、趣味や文化、スポーツなどの『知縁』でコミュニケーションが図られ、そこから平和や福祉などの委員会、多様なサークル活動も生まれました。そういう意味では、幸子さんたちがつくった数々のグループ活動が、現在のみやぎ生協の組合員活動の母体になったと言ってもいいかも知れません」

幸子が生協活動に入るきっかけをつくった内館辰は、やはり『外尾幸子遺稿・追悼集 幸せを運んでくれた人』のなかで、次のように幸子の功績を讃えている。

「みやぎ生協が店舗中心の事業でありながら、組合員の活動においても、共同購入を主体とした事業を行なっている全国の生協と比べても遜色ない活動を行ない得ているのは、幸子さんを始めとする先達者が、班を中心とする立派な組合員活動の原則をつくって、その伝統を守り育ててきたからです。――

昭和五七年三月、県民生協と宮城県学校生協の合併でみやぎ生協が誕生し、幸子は

みやぎ生協理事に就任する。

合併と同時に組合員活動も統合が図られ、幸子は家計簿集計の一体化などグループ活動の再編に取り組む。六月四日には、日本の生協代表団の一員として第二回国連軍縮特別会議に参加するため渡米し、英語力を活かして同行の仲間を支えながら無事大任を果たす。

幸子が理事を務めた昭和四六年から六〇年までの一四年間は、無名でスタートした宮城県民生協が、地域社会に根付くため必死で坂道を上り続けた時期でもあった。

その間に組合員数は三四〇〇人から二〇万人へ、供給高は二億三〇〇〇万円から四〇〇億円へと発展を遂げていた。共同購入ではOCR用紙による注文から配達・引き落としのシステム整備が進み、組合員証はカード化された。手書きで「出資金積立カード」をつくっていたころと比べたら隔世の感があったことだろう。

幸子は理事を引退したあとも、食の安全の専門委員会や平和グループなどに参加し、後進の指導にあたる。

学習会などでははっきりと自分の考えを発言するが、ふだんはおっとりとして明るく、胸に深い哀しみを抱えていても、穏やかな笑みを絶やさないひとだったという。

「たとえるならば女優の吉永小百合さんのような人でした」と齋藤が言う。

「人を惹きつける魅力があって、音楽や料理、旅行、生花と生活を愉しみ、生活の質を豊かにするとはどういうことかを実際に学ばせてもらいました」

活動のなかで多くの幸子ファンが生まれ、その思いを引き継いだ者たちの手でみやぎ生協の組合員活動はいまも豊かな枝葉を広げている。

特集

吉野作造と協同組合

（賀川豊彦との協同）

吉野作造記念館館長

大川 真

日本の民主主義の父・吉野作造

宮城県大崎市古川出身の政治学者・吉野作造（一八七八～一九三三）は、日本の民主化をリードした、いわば「日本の民主主義の父」といふべき存在である。

吉野は終始、市井の中で民衆に向かって民主主義の重要性を説き続けた。一九一四（大正三）年に東京帝大の教授に就任した後でも、吉野は政府の委員などの仕事は極力断り、常に民衆とともに日本の民主主義の道のりを歩もうとした。

一九一六（大正五）年一月に『中央公論』に「憲政の本義を説いて其の有終の美を済すの途を論ず」を發表した吉野は、名実共に大正デモクラシーの旗手となった。吉野の言論活動は一九二五（大正一四）年の衆議院議員選挙法の改正、すなわち普通選挙法の成立において実を結んだ。

また吉野はアメリカ大統領ウィルソンの考えに共鳴し、日本で勃興しつつあった民主化の波は、一国内にとどまらず、隣国へと及ぶべきだと考えていた。東アジアでは、日本の帝国主義への猛烈な抗議運動として一九一九（大正八）年に朝鮮半島で三一独立運動、続いて中国では五四運動が起こるが、どちらの運動にも吉野の思想に深い影響をうけた人物が多く、吉野はどちらに対しても弁護する言動を根気強く続けた。

吉野は関東大震災後に帝大教授を辞し、晩年は困窮と病気に大いに苦しめられることになるが、暴走をはじめた軍部や中国への侵略政策に対して、危険を顧みず厳しく批判した。

日本において民主主義と自由主義とが真に定着することを希求し、そのために文字通り命をかけて民衆とともに闘いつづけた吉野作造は、実は、日本生協の父・賀川豊彦とともに生協の基礎を築き上げた人物だったのである。

吉野作造と賀川豊彦との邂逅

「吉野作造日記」によると、吉野と賀川の交流が始まるのは関東大震災の約半年前である。一九二三（大正一二）年三月二二日に「…夜新人社講演会」に出席す。賀川君の恋愛観あり。予は一寸終りをやる」とある。これが「吉野日記」における賀川の初出である。これ以降、「吉野日記」に賀川は計一〇回登場する。ただし両人が実際に会った回数はずっと多かつたであろう。

吉野と賀川が頻繁に会うようになったのは、関東大震災の後である。震災の発生後、救援活動のために神戸から駆けつけた賀川は、墨田区本所を拠点に活動した。後に同地には、賀川によって基督教産業青年会が設立される。

吉野は賀川の活動を支援し、同会の理事を引き受けた他、資金の獲得に奔走した。吉野が集めた寄附金千円は、低金利の貸付事業「神視社」の設立にあてられている。吉野が同会で主に担ったのは人脈を活かした資金集めであった。

この低金利貸付事業は、低利子とはいえ、貸付金の返還を利用者に求めるものであった。吉野や賀川が行ったのは、「施し」ではなく自立支援事業であった。そして両者が事業展開する際に基盤となったのは協同組合での経験である。

吉野作造の「家庭購買組合」

賀川豊彦が青柿善一郎や福井捨一とともに神戸購買組合を創設したのは一九二一（大正一〇）年のことであつた。実はその二年前の一九一九（大正八）年に、ロバート・オウエンの協同思想やロットチデル原則に基づき、東京帝国大学基督教青年会、日本女子大学桜楓会のメンバーらとともに吉野は「家庭購買組合」を設立している。吉野は発足時から亡くなる一九三三（昭和八）年まで理事長職をつとめ、大黒柱として、たまの夫人とともに組合を支え続けた。

吉野は計一一回の総会で議長を務め、体調が悪化するなかでも役員会や組合運動会にもできる限り出席し、精力的に組合の安定化に努めた。

当時はまだ普及していない電気式冷蔵庫や大型トラックの導入による新鮮な生鮮食品の販売は世間の耳目を集め、また吉野の豊富な人脈を活かした資金作りも成功して、家庭購買組合は創立一〇年目頃には東京で最大の消費組合に成長した。もちろん組合婦人会による積極的な会員拡大運動や班活動も成長の大きな要因となっている。

家庭購買組合に懸けた吉野作造の想い

現在の生協の源流の一つに位置づけられる家庭購買組合に吉野はなぜこれほど心血を注いだのか。私は二つの理由を考えている。一つは「生存権」を社会的制度として日本に定着させ、文化的な生活をなるべく多くの国民に享受させるためである。

生存権は一九一九（大正八）年にドイツで制定されたワイマール憲法において初めてその保障が明文化されるが、日本ではこの三年前の一九一六（大正五）年に経済学者の福田徳三が生存権の考え方を紹介している。

吉野は一九二〇（大正九）年に著した「社会問題と其思想的背景」（『中央公論』一九二〇年七月）という論文のなかで生存権の重要性を力説した。第一次世界大戦後から日本経済は二重構造的な性質を露わにし、富める者と貧しき者との格差が拡大していった。

吉野は、富裕層に資本を寡占させるのではなく、全ての人間は平等に生存権を保障されるべきであり、そこにこそ社会の真の発展があると説いた。また同年には経済学者の森本厚吉、作家の有島武郎と文化生活研究会を組織し、日本初の純洋式アパートメントで、探偵明智小五郎が事務所を開いた「開化アパート」のモデルとしても知られる御茶ノ水文化アパートメントを建設・運営するなど、文化的で健康な生活を目指す様々な事業を展開した。家庭購買組合も質の高い「生存権」

の確保を目指す吉野の社会運動の一つに位置づけられよう。

また民主主義の実現のためにも家庭購買組合は必須であった。組合の専務理事、理事長を務め、実務の中心人物であった藤田逸男によれば、吉野は、より民主主義的であるとして総代制ではなく総会制を選択し、会員の総意を反映した組合運営を目指した。

吉野は国民一人一人が主体的に社会参画することを民主主義の根幹に据えたが、家庭購買組合はまさに民主主義を実現したものであった。

大川真（おおかわ まこと）／吉野作造記念館館長。博士（文学）。一九七四（昭和四九）年群馬県生まれ。東北大学大学院文学研究科助教（二〇一一年三月）、吉野作造記念館副館長を経て現職。国際日本文化研究センター共同研究員、尚絅学院大学非常勤講師、山形県立米沢女子短期大学非常勤講師を兼任。

※写真は「賀川豊彦」を除いて、すべて吉野作造記念館提供

宮城の協同組合略史

協同組合とは

本書において二三人の協同組合人を紹介してきた。では、これら協同組合人が活動の基盤とした「協同組合」とはそもそもどのようなものなのか。その骨格を整理しておこう。

国際協同組合同盟（ICA）の指導者として活躍したジョルジュ・フォーケは、その著書『協同組合セクター論』^{〔*1〕}で国民経済に「セクター（Sector：部門・部署）」という考えをあてはめ、次の様に区分した。

公的セクター	国家または地方公共団体やそれらの委託によって運営されるすべての企業
資本家セクター	リスクを負い利潤を得る私的資本によって支配されるすべての企業
私的セクター	家族経営、農民経営、手工業者経営などの無数の非資本家的な経済単位
協同組合セクター	社会的経済的に連帯した、またはしようとする協同組合

それぞれ時代や国・地域によって、この四つのセクターが社会的に影響を与える度合いは異なるものだが、国民経済の単位をこのように整理すると協同組合の社会的意味が整理できるだろう。

そしてこの協同組合が、他のセクター（特に資本家セクター）と根本的に異なるのは「人と人の結びつき

による非営利の協同組織」(※)であることであり、「どの協同組合も、参加する組合員の願いを実現するために人々が自発的に手を結んだ組織」であることだ。

このような意味で、さまざまな協同組合は一つである。

と同時に協同組合は各種の点で多様性をもっている。

それぞれの協同組合は、「参加する階層」／労働者、市民、手工業者、商業者、農漁民等、「充足する要求」／消費の要求、住宅の要求、生業の上での要求(生産手段、加工、販売等)、サービス上の要求(動力、灌漑、会計、金融、保険等)など、その運動の核となる部分は多様である。

そのような多様性をもった協同組合の性格には共通した二つのものがある。

- ①自分の欲求について、他の人々との共通性を認め、それを個人的方法ではなく、共同することによってよりよく充足しようと考える人々の協同組織であること
 - ②自分の欲求にびったり合った事業の対象をもつ共同の事業体であること
- この二つの性格が、協同組合のさまざまなルールの原点となっている。

今日の協同組合はイギリスのロッチデール公正先駆者組合(一八四四年設立)、ドイツの救済貸付組合をその嚆矢とする。

わが国では一九〇〇(明治三三)年に産業組合法が公布され、それに基づいて協同組合は設立されることになるが、これが現在の農協、生協、信用金庫の母体となった。

しかし、その歩みは苦難に満ちたものであった。戦前の協同組合運動において、幾多の無名の人々がファ

シズムの吹き荒れるなかで、「互助社会」の実現のために、時には命がけで力を尽くした。

それらの人々を最も象徴するのは、キリスト者賀川豊彦であろう。神戸のスラム街での求霊・求貧の活動から労働運動、農民運動の指導者として社会運動に果たした役割は現代においても光を放っている。賀川が構想した生産者協同組合、販売協同組合、信用協同組合、共済協同組合、公益協同組合、消費協同組合など、その領域は社会全体におよんだ^(※3)。賀川やそれに連なる無名の人々が「蒔いた種」は戦後大きく花開くことになる。

日本の敗戦後、一連の「民主化」により、協同組合は再スタートをきる。

戦後いちはやく一九四五（昭和二〇）年一月には日本協同組合同盟（のちの日本生協連）が設立され、一九四六（昭和二一）年には全国森林組合連合会が任意団体として設立された（昭和二六年に森林組合が協同組合に）。

そして一九四七（昭和二二）年、農協法が制定され、戦時中の「農業会」という統制団体を改組する形で農協が、一九四八（昭和二三）年、水産業協同組合法が定められ、漁協が発足した。

戦前、商業報国会に吸収されていた日専連も一九五〇（昭和二五）年、再結成された。こうして今日の協同組合の基礎が形成されたのである。

しかし、その歩みもまた平坦な道のみではなかった。

協同組合は、高度経済成長のなかで産業構造の変化、グローバル化の進行に伴う社会構造の変化、資本家セクターとの競争の激化などにさらされ続けてきた。

戦後の協同組合の歴史は、一九八〇（昭和五五）年のレイドロ―報告「西暦2000年における協同組合」、一九八八（昭和六三）年のマルコス報告「協同組合の基本的価値」等を通じ、協同組合のアイデンティティを時代の変化に適合させながら、そのプレゼンスを変化させ、高めようとしてきた歴史でもあった。

本書に登場した二三人の協同組合人の歩みは、協同組合のアイデンティティと運動を守り、継承し続けた歴史を証言するものであろう。その歩んだ道のりの轍わだちに重ね合わせて、「宮城の協同組合略史」をご覧いただければ幸いである。

※1 日本経済評論社（一九九一年発行）

※2 日本生協連ホームページ

※3 『季刊at』一五号（二〇〇九年四月発行）

宮城の協同組合略史

農協…宮城県農業協同組合中央会 生協…宮城県生活協同組合連合会 漁協…宮城県漁業協同組合
 森連…宮城県森林組合連合会 日専連…日専連宮城県連合会 こんわ会…宮城県協同組合こんわ会

年

協同組合の歩み

社会

1844 (天保)		ロッヂデール公正先駆者組合設立（イギリス）	
1848 (嘉永）		ライファイゼン、救済貸付組合設立（ドイツ） シエルトエーデーリツチ市街地信用組合設立（ドイツ）	
1876 (明治9)	森連	明治政府、林野の官民有区分を実施	統合宮城県成立（現在の県域に なる）
1879 (明治12)	生協	7月、東京に日本で最初の協同組合「共立商社」設立	
1889 (明治22)			仙台市市制施行
1891 (明治24)			東北本線全線開通
1894 (明治27)			日清戦争（1895） 仙台に電灯が点く
1895 (明治28)		国際協同組合同盟（ICA）結成（ロンドン）	
1896 (明治29)			6月19日 明治三陸地震津波 8月31日 陸羽地震
1897 (明治30)	森連	森林法制定	河北新報創刊
1898 (明治31)	生協	11月、仙台共働店設立（県生協で最も古い組織・労働者生協）	普通選挙運動起る

1929 (昭和4)	生協	12月、豊里消費組合、原ノ町消費組合設立	世界恐慌
1930 (昭和5)	日専連	1月16日、岡山市に岡山専門店会創立(岡山県) 5月5日、中央百貨店進出反対同盟大会	昭和恐慌
1931 (昭和6)	生協	全国消費組合協会設立	金輸出再禁止
1932 (昭和7)	日専連	鈴木善蔵・坂猶興らによって仙台消費組合創設 9月6日、全仙台商店連盟を結成(仙台市公会堂で創立総会) 政府米払下げ運動	満州事変(15年戦争へ)
1933 (昭和8)	農協	全農家加入、4種(信用・販売・購買・利用)兼営などを目標に産業組合拡充5か年計画を実施	「満州国」の建国宣言
1934 (昭和9)			リットン調査団来日
1935 (昭和10)	日専連	6月24日、仙台専門店会を結成	五・一五事件
1936 (昭和11)	日専連	10月8日、全日本専門店会連盟(略称日専連)発足 仙台専門店会、日専連加盟	米騒動
1937 (昭和12)			日本、国際連盟を脱退
1938 (昭和13)	日専連	5月12日、14日、日専連第2回大会を仙台で開催 5月12日、日専連東北地方連合会結成	3月3日、昭和三陸地震
1939 (昭和14)			東北地方冷害・大凶作
1940 (昭和15)	日専連	日専連解散	天皇機関説問題

年 協同組合の歩み 社会

1948 (昭和23)	生農協	指導連、信連、販連、購連、厚生連設立 6月、東北大学学校協同組合設立(東北大生協) 10月1日、消費生活協同組合法公布	昭和電工疑獄事件 6月28日 福井地震 9月 アイオン台風
1947 (昭和22)	生農協	G H Q農協に関する覚書交付 農協法公布 仙台原町農協(県内第一号)を皮切りに県内農協の設立が180に達す 全国学校協同組合連合会(大学生協)設立 仙台市定禪寺通櫓丁(現青葉区春日町)に移転	第一回参院選 労働基準法・独占禁止法・地方自治法公布 教育基本法・学校教育法公布(6・3・3・4制実施) 9月 キャサリン台風
1946 (昭和21)	生農協	第二次農地改革法(自作農創設特別措置法)国会通過 11月、東北帝国大学生組合(現東北大生協の前身)設立 全国森林組合連合会が任意団体として設立	新選挙法による第1回総選挙 日本国憲法公布 仙台七夕復活 12月21日 南海地震
1945 (昭和20)	生農協	農民解放指令(第一次農地改革) 農業会、敗戦で解散 11月18日、日本協同組合同盟設立、各地で生協再建、新設の動き	3月 東京大空襲 7月 仙台空襲 8月 広島、長崎に原子爆弾投下、ポツダム宣言受諾、玉音放送
1944 (昭和19)			サイパン島陥落
1943 (昭和18)	森農協	農業会(産業組合、他団体とともに農業会に統合)結成 木材薪炭の生産増強に傘下組合員を動員協力(昭和20)	ガタルカナル島撤退 学徒出陣
1942 (昭和17)	森生農協	食糧管理法制定 多くの購買組合事業休止、解散への動き 造林用苗木の生産開始	勤労動員令 翼賛政治体制協議会成立
1941 (昭和16)	森連	3月、木材統制法公布、6月1日施行 11月14日 宮城県森林組合連合会設立(仙台市勾当台通)	ゾルゲ事件 太平洋戦争始まる(1945) 治安維持法改正

年 協同組合の歩み 社会

1948 (昭和23)	生協	全国学校購買利用組合連合会設立 水産業協同組合公布	
1949 (昭和24)	生協 漁協	1月24日、任意組合の宮城県学校生活協同組合発足(購買組合から改組) 漁業法、同施行法公布(漁業制度改革) 宮城県漁業協同連合会創立 中小企業等協同組合法施行 仙台商工会議所での小売店経営懇談会を機に専門店会復活の動き	下山・三鷹・松川事件相次ぐ ドッジライン政策 湯川秀樹、日本人で初めてノーベル賞受賞
1950 (昭和25)	農協 生協 森連	農協財務処理基準例公布 各地で地域勤労者生協の設立ひろがる。 造林臨時措置法制定 「荒れた国土に緑の晴れ着を」をスローガンに、「第1回全国植樹祭」が山梨県で開催	「ストックホルム・アピール」発表 朝鮮戦争勃発 初めてプロ野球日本シリーズが開催される
1951 (昭和26)	農協 生協 森連	第1回農協婦人部大会開催 全共連発足 3月20日、日本生活協同組合連合会創立 森林法改正により、森林組合が協同組合と位置づけられた(当時は112組合。その後の合併等により現在は16組合)	サンフランシスコ講和条約・日米安全保障条約各調印 第1回NHK紅白歌合戦 長谷川町子『サザエさん』朝日新聞朝刊で連載開始
1952 (昭和27)	農協 生協 漁協 森連	日専連 11月16日、仙台専門店会、日専連に加盟 県経済連設立(販連、購連統合) 県農協婦人部連盟結成 第1回全国農協大会開催 9月10日、法人宮城県学校生活協同組合発足 全国漁業協同組合連合会設立 全国漁獲量が戦前最高水準を突破 鳴子町中山平に記念林を造成 4月30日、森林法改正により組織変更を行なう 全国森林組合連合会に加入	講和条約・日米安全保障条約発効 3月4日 十勝沖地震 NHKラジオドラマ「君の名は」放送開始 手塚治虫「鉄腕アトム」連載開始

	日専連 こんわ会	7月28日、協同組合仙台専門店会設立 日本の協同組合ICA加盟	
1953 (昭和28)	農協	第1回県農協大会開催 県農協青年連盟結成 クミアイマーク愛用運動 農林漁業金融公庫設立	バカヤロイ解散 テレビ本放送開始
1954 (昭和29)	日専連 森連	協同組合仙台専門店会青年部創設	ビキニ水爆実験、第五福竜丸被爆 電気冷蔵庫、洗濯機、テレビが「三種の神器」と呼ばれる
1955 (昭和30)	農協	県中央会設立(指導連解散) 全中発足 日生協、世界の協同組合に原水爆禁止アピール 大阪に最初の労済生協設立(大阪府) 水産庁、漁業転換促進要綱発表(沿岸から沖合へ、沖合から遠洋へ)	第一回原水爆禁止世界大会開催 森水ヒ素中毒事件 神武京気(1957年上期)
1956 (昭和31)	日専連 森連	県共済連設立 米価要求全国農民大会開催 12月28日、(株)宮城県学校用品協会設立 11月19日、鶴岡生協設立、「班」づくりが進む(山形県) 第6回全国植樹祭を大衡村で開催 記念林を鳴子町鬼首に造成 6月7日、共通商品券発売開始	日本、国際連盟加入 経済白書で「もはや戦後ではない」と言われる NHK仙台放送局テレビ放送開始
1957 (昭和32)	農協	農業改良資金助成法公布 森林開発公団設立 森林火災共済事業開始	全国小売業経営者会議(米子、生協問題) 第一次南極観測隊、昭和基地を設置 なべ底不況(1958年)
1957 (昭和32)	日専連	農協刷新拡充3カ年運動展開 日本生協連婦人部全国協議会結成 東北大学消費生活協同組合設立 5月9日、12日、日専連第12大会を仙台で開催 8月29日、日専連仙台会と改称	仙台空港開港

年 協同組合の歩み

社会

1958 (昭和33)	農協	設立10周年記念県農協大会 県農政連結成 全日本事業生活協同組合連合会(事業連)を設立 宮城県漁業協同組合連合会整備促進法適用指定を受ける 仙台優良専門店会と統一の道を探る「十一といち会」を発足	東京タワー完成 岩戸景気(1961年) 「月光仮面」テレビ放送開始
1959 (昭和34)	生協	学校生協、4月26日、学校生協では全国初の地域店舗を「石巻に開設 県立自然公園条例施行	安保闘争(1960年) 皇太子の結婚パレード 9月 伊勢湾台風
1960 (昭和35)	生協	農林水産物121品目自由化 一部の生協でスーパーマーケット型店舗展開が始まる CO・OPバター(コープ商品第1号)発売 チリ地震津波本県水産被害22億円	安保反対10万人国会請願デモ 新安全保障条約発効 国民所得倍增計画(高度経済成長) カラーテレビ放送開始
1961 (昭和36)	農協	農業基本法公布 大豆輸入自由化 県農協合併推進本部設置	ソ連のガガーリン少佐が地球一周、「地球は青かった」
1962 (昭和37)	農協	農地法、農協法改正公布(農業生産法人、農事組合法人誕生) 県厚生連解散 灘神戸生協発足(兵庫県)	ケネディ「消費者の権利」宣言 キューバ危機
1963 (昭和38)	農協	ササニシキ誕生 県連役員一部共通制導入 設立15周年記念県農協大会開催 砂糖・バナナ自由化 石巻木材センター開設	戦後初の国産機YS-11初飛行 4月30日 県北部地震
森連	漁協	宮城県漁業協同組合連合会整備促進法達成 県林木育種場設置	ケネディ大統領暗殺 吉展ちゃん誘拐事件

1971 (昭和46)	漁農協	政府米買入れ制限導入 本年以降水産物輸入額が輸出額を上回る	環境庁設置 変動為替相場制へ移行(1ドル360円時代終わる) 仙台港開港
1970 (昭和45)	生農協	県米生産調整推進協議会発足 3月24日、設立総代会で宮城県民生協創立(4月5日、第1号の多賀城店開店) 生活協同組合宮城県連合会設立(5単協加盟) 灯油共同購入開始 県林業試験場完成 県民の森オープン	核兵器拡散防止条約調印 日本初の人工衛星打上げ 日本万国博覧会開催 よど号ハイジャック事件 「ドラえもん」連載開始
1969 (昭和44)	生農協	閣議、自主流通米制度を決定 東北大生協「地域民生協設立援助事務局」を設置 10月18日、設立発起人会発足 12月13日、宮城県民生協設立総会 森林組合協業体制確立運動を昭和49年まで展開	東大安田講堂に機動隊導入 アポロ11号月面着陸 佐藤首相訪米(共同声明で沖繩返還)
1968 (昭和43)	生農協	設立20周年記念県農協大会開催 農林省米転作方針を発表 共同購入方式始まる 東北大生協、後期総代会で仙台に消費者の自主的組織「生協を広げていくことを決定	消費者保護基本法公布 小笠原諸島返還 3億円強奪事件 日本GNP2位 「巨人の星」テレビ放送開始
1967 (昭和42)	農協	県農協管農指導体制確立運動実施	公害対策基本法成立
1966 (昭和41)	農協	県農協連共通役員制発足 4月15日、宮城県森林組合組合長会設立	いざなぎ景気(1970年) 日本の人口1億人突破 ビートルズ来日 「ウルトラマン」テレビ放送開始
1964 (昭和39)	生農協	全国農協貯金者保護制度発足 東北大学生協の支援で各地の「市民生協」誕生 林業基本法制定 店員研修学校を開講	ベトナム反戦集会開催 東海道新幹線開業 東京オリンピック開催
1963 (昭和38)	日専連		

年

協 同 組 合 の 歩 み

社 会

1972 (昭和47)	農協	<p>豚肉輸入自由化 全農発足 自然環境保全法の制定 林野庁、森林の公益機能を年間12兆8千億円と発表 大衡緑化推進センター開設</p>	<p>日中共同声明(日中国交正常化) 沖繩返還実現 列島改造論 浅間山荘事件 冬季オリンピック札幌大会開催</p>
1973 (昭和48)	農協	<p>設立25周年記念県農協大会開催 日生協、生協のアイドルマーク・シンボルマーク決定 宮城県森林組合青年部連絡協議会設立</p>	<p>円の変動相場制移行 第1次オイルショック(物不足) 米国の大豆輸出禁止政策(穀物ショック) 大規模小売店舗法(旧大店法)成立</p>
1974 (昭和49)	農協	<p>県内の一部で米出庫拒否闘争起こる 灯油裁判始まる 森林法改正 東和木材センター及び岩出山木材センター開設</p>	<p>戦後初のマイナス成長 ニクソン大統領、ウォーターゲート事件で辞任 国内狂乱物価 石巻新漁港開港</p>
1975 (昭和50)	農協	<p>家の光創刊50周年 物価問題、食の問題での取り組み盛ん 漁業危機突破全国漁民1万人大会開催 領海12海里即時宣言等決議</p>	<p>ベトナム戦争終結 エリザベス女王来日 沖縄海洋博覧会開催</p>
1976 (昭和51)	農協	<p>東日本大冷害で天災法発令 県農協ビル完成</p>	<p>ロッキード事件 日本初5つ子誕生(鹿児島)</p>
漁協	<p>「生協規制に反対する300万人署名」内閣へ提出 200海里漁業規制時代に突入</p>		

1977 (昭和52)	農協	農協法公布30周年記念県大会開催 仙南地域開拓の青空説明会で共同購入利用者拡大 生協規制反対緊急集会開催 日本200海里漁業専管水域及び領海12海里設定	王貞治、本塁打世界最高記録樹立 赤軍派日本航空ハイジャック事件
1978 (昭和53)	農協	宮城県、稲作史上最高の豊作（水稲作況指数109） 日米農産物交渉妥結（オレンジ・高級肉等） 共同購入「週一回定曜日配達」定着 国会「生協育成と生協法改正の請願」採択 農林省を農林水産省と改称、水産庁機構拡充 森林組合法制定	第一回国連軍縮特別総会 日中平和友好条約調印 新東京国際空港開港 6月12日 宮城県沖地震 一般消費税反対国民大集会
1979 (昭和54)	生協	灯油値上げ反対組合員決起集会 台風20号襲来、天災融資法・激甚災害法適用	米、スリーマイル島原発で放射能漏れ事故 第二次オイルショック
1980 (昭和55)	農協	IC A大会「西暦2000年における協同組合」討議 気象観測史上1位の冷夏 第一次長期開発計画（55年度～59年度）策定 気仙沼営業所開設	イラン・イラク全面戦争突入
1981 (昭和56)	農協	農協生活活動基本方策策定 第1回豊かな海づくり大会開催 林業総合センター建設 6月3日～6日、第36回全国大会を仙台で開催	スペースシャトル初飛行 中国残留日本孤児47名来日
1982 (昭和57)	農協	県農協婦人部設立30周年大会 3月23日、宮城県学校生協・宮城県民生協の組織統一で「みやぎ生協」誕生 大衡緑化推進センターから「大衡総合センター」へ名称変更 旅行代理店業を開始 石巻営業所・古川営業所開設	国連軍縮特別総会に向けた反核署名2753万に 東北新幹線大宮～盛岡間開業 ホテルニュージャパン火災
1983 (昭和58)	農協	農産物輸入自由化・枠拡大阻止全国農林漁業者決起大会 大規模林野火災（仙台市、泉市、利府町、富谷町、大和町）	東京ディズニーランドオープン 5月26日、日本海中部地震

年

協同組合の歩み

社会

1984 (昭和59)	農協 生協	韓国米4千トン塩釜港に陸揚げ COOP共済《たすけあい》スタート 宮城県底引き網船10〜15トン船3割減船・北転船33隻中15隻減船、以後大型漁船の減船始まる 津山木材センター開設	グリコ・森永事件 日本の人口1億2千万人突破 全国初第二セクターとして三陸 鉄道開業
1985 (昭和60)	農協 生協	日専連 第二次長期発展計画書(59年度〜61年度)策定 日専連とみやぎ生協 業務提携で共用カードを発行(全国初の消商提携) 農協 県農協広域多目的農村総合研修センター完成・落成 ユニセフ募金全国に広がる 全国で生協規制反対署名活動 全国の生協組合員数1000万人に 日本の漁業・養殖業生産量1279万トン、史上最高となる CAT(信用照会端末)オンライン開始	N.T.T.、日本たばこ産業の民営化 筑波科学万博開催 日航ジャンボ、御巣鷹山に墜落 東北新幹線上野駅乗入
1986 (昭和61)	農協 生協 こんわ会	一戸複数組合員化・准組合員対策指針設定 宮城県農協合併基本構想設定 厚生省「生協のあり方に関する懇談会」報告書(地域社会での消費者組織としての生協の役割を評価) 宮城県農協・生協提携協議会設立 大型間接税反対宮城県総決起大会開催	東京サミット開催 ソ連チエルノブイリ原発事故 パブル景気(1991) 男女雇用機会均等法施行 8・5豪雨災害(台風10号)
1987 (昭和62)	農協 生協 漁協 日専連 こんわ会	生産者米価31年ぶりに5・95%引き下げ 宮城県農協中央会、未来の東北博覧会に出展 みやぎ生協、未来の東北博覧会に出展 53年間にわたる南極捕鯨閉幕 日専連仙台創立50周年 「新専門店会読本」刊行 第三次長期発展計画(62年度〜平成2年度)策定 売上税粉砕宮城県総決起大会開催	国鉄分割民営開始 東北自動車道全線開通 未来の東北博覧会開催 仙台市地下鉄南北線開業

年

協同組合の歩み

社会

1994 (平成6)	農協 日専連	9・22集中豪雨災害 宮城県協同組合こんわ会に加入 「街づくりのシナリオ」出版	政治改革関連法成立（小選挙区制）
1995 (平成7)	農協 日専連	ICA大会、「協同組合のアイデンティティに関する声明」採択 宮城県経済連、みやぎ生協と米穀販売事業提携協定調印 新食糧法施行 コープ東北サンネット事業連合設立 日専連創立60周年	1月17日 阪神・淡路大震災 3月20日 地下鉄サリン事件
1996 (平成8)	農協	全酪連不正表示牛乳出荷事件発覚 本県広域合併第一号「JAみどりの」発足 農協改革第2法案成立	8月11日 宮城県北部地震
1997 (平成9)	農協 日専連	JAグループ宮城第三次電算化基本構想決定 「生協の21世紀理念・ビジョン」採択 宮城県と県生協連が「災害時における緊急生活物資などの協力に関する協定」締結 第50回日専連全国大会開催 日専連政宗公兜山鉦を製作し仙台青葉まつりに参加 第48回全国植樹祭を白石で開催	北海道拓殖銀行破綻・山一證券破綻 地球温暖化防止京都会議 香港、中国に返還 消費税5%に引き上げ 長野新幹線開業
1998 (平成10)	生協	全国の組合員数2000万人に	冬季オリンピック長野大会開催 8月末 豪雨災害
1999 (平成11)	農協 漁協	食料農業農村基本法制定 遠洋マグロはえ縄漁船全国132隻・内本県40隻減船	東海村JCO臨界事故
2000 (平成12)	森連 日専連	森林組合系統運動「ふるさと森林再生・地域材需要創出運動」の展開（～平成16） 日専連カード等クレジット事業を(株)日専連ライフサービスに移管	大規模小売店舗立地法（新大法）施行 6月26日 三宅島噴火（全島避難）

2001 (平成13)	農協 生協 森連	新みやぎ米「たきたて」誕生 食品衛生法改正国会請願採択（1373万筆の署名活動） 森林・林業基本法制定 木炭生産事業所竣工	アメリカ同時多発テロ事件 BSE家電感染牛、国内初発見 リサイクル法施行
2002 (平成14)	農協 生協 森連	新系統種「しもふりレッド」認定 全国の生協とのコープ商品共同開発開始 緑の雇用担い手育成対策事業開始 石巻市内の合板会社が国産原木集荷を開始	ワールドカップ日韓大会 住民基本台帳ネットワークシス テム開始 北朝鮮拉致被害者5人帰国 イラク戦争
2003 (平成15)	農協 生協 こんわ会	第34回宮城県農協大会で「新しい宮城の農業とJAづくり」を決議 食品安全基本法成立、食品衛生法改正 消費税率引き上げをやめさせるネットワーク宮城設立 こんわ会企画開発商品「気持ち伝えるおにぎりセツト」発売（09年まで販売）	7月26日 宮城県北部連続地震 5月26日 三陸南地震
2004 (平成16)	生協 森連 こんわ会	消費者基本法成立 地球温暖化防止森林吸収源10カ年対策策定 「おにぎりフォーラム」を開催（10年）	裁判員制度法、成立 10月23日、新潟県中越地震 12月26日、スマトラ沖地震・大津波
2005 (平成17)	森連 日専連	木炭生産事業所を「ウッドリサイクルセンター」へ名称変更 全国の林業・木材産業関係者による「環境税創設要求緊急大会」開催 日専連創立70周年	個人情報保護法施行 郵政民営化法案参院で可決 8月16日 宮城県沖の地震
2006 (平成18)	森連 こんわ会	森林組合法改正 森林組合系統運動「環境と暮らしを支える森林・林業・山村再生運動」開始（平22） 宮城県知事との懇話会を開催	10月6日 低気圧通過による暴風雨被害発生
2007 (平成19)	生協 漁協	改正生協法成立（2008年施行） 4月1日、宮城県下31沿海漁協の合併により宮城県漁業協同組合発足 9月28日、宮城県漁業協同組合連合会を包括承継 10月1日、宮城県信用漁業協同組合連合会を包括承継	郵政民営化 仙台空港アクセス鉄道開業 3月25日 能登半島地震 7月16日 新潟県中越沖地震

年

協同組合の歩み

社会

2008 (平成20)	生協	「コープ手作り餃子」重大中毒事故発生を受けて、「コープ商品の品質保証体系の再構築計画」の取り組み開始 日本コープ共済生活協同組合連合会（コープ共済連）設立 3月24日、本所を仙台市から石巻市へ移転 食料の安全・安心を守る共同宣言採択	洞爺湖サミット 6月14日 岩手・宮城内陸地震
2009 (平成21)	漁協 森連	4月1日、雄勝町雄勝湾並びに矢本漁協と合併 「森林整備加速化・林業再生事業」開始（～平成23） 「森林・林業再生プラン」策定	
2010 (平成22)	生農協	6月11日、富県宮城推進会議で、みやぎの農商工連携推進を宣言 日本医療福祉生活協同組合連合会（医療福祉生協連）設立	東北新幹線、新青森まで全線開通 2月28日、チリ中部沿岸地震津波被災（本県激甚災害法適用） 世界人口70億人を突破 3月11日、東日本大震災（全市町村に災害救助法適用） 東京電力福島第一原子力発電所事故
2011 (平成23)	生協 森連 こんわ会	「日本の生協の2020年ビジョン」策定 震災後の宮城県の食産業復興を応援する「食のみやぎ復興ネットワーク」結成 みやぎ環境税導入 森林組合系統運動「国産材の利用拡大と森林・林業再生運動」開始（～平成27） 宮城県森林組合連合会創立70周年 「東日本大震災からの復興をめざす共同宣言」を採択 ICAポリーリン・グリーン会長被災地視察	
2012 (平成24)	生協 漁協 こんわ会	みやぎ生協、「コープ・フードバンク」設置 3月23日、再編強化法に基づく66億8千万円の優先出資発行 国際協同組合年 「TPPから食とくらし・いのちを守るネットワーク宮城」を設立 「IYC（2012国際協同組合年）宮城県実行委員会」を設立	東京スカイツリー開業
2013 (平成25)	生協 漁協	みやぎ生協、県内35市町村と「高齢者見守りの取り組みに関する協定」を締結 みやぎ生協、「生活相談・家計再生支援貸付事業」開始 4月1日、事業本部制の開始	安倍首相がTPP交渉参加表明

2014 (平成26)	農協	<p>規制改革会議が農協の抜本改革を提案 農協改革法案の骨子が政府・与党間で合意(①県中央会は連合会、全中は一般社団法人に移行②全国 監査機構の監査法人化③准組合員利用規制の検討)</p>	消費税8%に引き上げ
生協	みやぎ生協組合員70万人に		

※宮城県協同組合こんわ会結成以前の各団体間連携による取り組みも「こんわ会」の歩みに記した。

取材協力者（順不同・敬称略）

執筆にあたり関係者の方々にお話をお伺いしました。厚く御礼を申し上げます。
なお取材にご協力いただいた方の役職名は取材当時のものです。

宮城県農業協同組合中央会

安齋明修（営農農政部部长）

宮城県漁業協同組合

菊田正義／畠山忠／高橋国子／佐藤俊章／柴原和子／柴原英紀／佐藤健太郎／阿部哲
阿部明子／船渡隆平／吉野八重子／小山巖／佐藤幸雄／畠山寿代／小松博昭

宮城県森林組合連合会

伊藤民雄／竹内信男／千葉よし子／小白幸記／齋藤八十八（白石蔵王森林組合理事）
大鹿知子

宮城県生活協同組合連合会

勅使河原安夫（勅使河原協同法律事務所代表）／安孫子彪／高木三男／網島不二雄
西條典雄／池上武／蘇武昌春

主な参考文献（順不同）

●宮城県農業協同組合中央会

- 『農協一筋 袋光雄伝』 刊行会代表世話人 高橋実
『木村秀壽追悼集 葉落帰根』 木村秀壽追悼集「葉落帰根」刊行委員会
『宮城県南郷農業協同組合史』 宮城県南郷農業協同組合
『武田六郎追悼集 二度と水呑み百姓になりたくない』 武田六郎追悼集刊行世話人会
『J A 宮城中央会50年のあゆみ』 宮城県農業協同組合中央会
『私たちとJ A』 2007年版 全国農業協同組合中央会

●宮城県漁業協同組合

- 『宮城県漁連五十年史』 宮城県漁業協同組合連合会
『50年の歩み』 宮城県信用漁業協同組合連合会
『気仙沼市史』―近代・現代編、補遺編、産業編 気仙沼市
『階上村史』 階上村
『津波碑調査―明治・昭和・チリ津波と平成大津波』 立命館大学歴史都市防災研究センター
『気仙沼魚問屋組合史・五十集商の軌』 気仙沼魚問屋組合
仙台・江戸学叢書2 『利水・水運の都 仙台』 佐藤昭典著 大崎八幡宮
『海苔の歴史』 下巻 宮下章著 海路書院
『石巻市史』―近代・現代編 石巻市
『みやぎの群像』 河北新報社

●宮城県森林組合連合会

- 『宮城県森連20年の歩み』 宮城県森林組合連合会
『宮城県森連創立四十周年記念誌』 宮城県森林組合連合会
『県民の山創立三十周年記念 県民の山30年の歩み』 社団法人宮城県民の山造成会
『三浦義孝さんの退任を記念して 三出し運動の軌跡』 編集委員会
『みやぎの林業だより』 1979年93号 宮城県
『白石市史Ⅰ 通史』 白石市

『七ヶ宿町史 歴史編』七ヶ宿町

『みやぎの林業』みやぎの林業刊行委員会

『小原村の歩み』小原村公民館

『変りゆく宿場のおもかけ』小原村上戸沢部落住居実態調査報告 宮城県白石女子高等学校校郷土研究班編

●日専連宮城県連合会

『のれんとうろまん』日専連仙台会の50年 1935—1985 日専連仙台会

『のれんとうろまんⅡ』日専連仙台会の10年 1985—1995 日専連仙台会

『のれんとうろまんⅢ』日専連仙台会の一〇年 1996—2005 日専連仙台会

『仙台のしにせ』仙台商工会議所

『みやぎの群像』河北新報社

『専門店』2009年三月号 日専連

●宮城県生活協同組合連合会

『協同組合運動のエトス 北の群像』太田原高昭・中嶋信編著 北海道協同組合通信社

『斗いの記録 戦前編①戦前の労農運動に参加した思い出メモ 宮城での活動を中心に』鈴木善藏著 ひかり書房

『創立期の志に学び、生協運動にロマンと展望を』みやぎ生協労働組合25年史（1982—2007）

—第1章源流の外観 全労連・全国一般 宮城一般労働組合みやぎ生協支部

『ヨーロッパ生協旅行』涌井安太郎著 日本生活協同組合連合会

『星をめざして わたしの協同組合運動』涌井安太郎著 社団法人家の光協会

『生協巡遊 ソビエト・ヨーロッパ』涌井安太郎著 兵庫県生活協同組合連合会

『わが心に生きる協同組合の思想家』涌井安太郎著 社団法人家の光協会

『かなしきいのち』涌井安太郎著

神戸生活協同組合機関誌『新家庭』戦後48号（通巻第407号）

『東北大学生協同組合創立五十年の歩み』東北大学生協同組合

『東北大学生協同組合創立50周年記念の集い』東北大学生協同組合

『東北大学生協同組合草創期の思い出 歩み』東北大学生協同組合

『東北大学』（創立100周年記念誌）「東北大学」編集委員会

『東北大学法学部同窓会』「会報」第3号 東北大学法学部同窓会

『北大百年史 通説』（第5章、第6章）北海道大学術成果コレクション HUSCAP

『東北大学農学研究所二十年史』東北大学農学研究所

『坂本先生を送る』東北大学協坂本先生退官記念実行委員会

『詩歌集 ロマンを求めて―人間・社会そして自然』吉田寛一著 宮城地域自治研究所

『食と農を結ぶ協同組合』吉田寛一・渡辺基・大木れい子・西山泰男編 筑波書房

『産消提携20年の情熱』仙南加工連

『虹を越えて 仙南加工連の軌跡』仙南加工連

『みやぎの産直収穫祭』みやぎ生活協同組合 コープ出版

『宮教組物語 あしあと・40年』宮教組物語編集委員会編

『わがまち梅の宮 梅の宮町内会20年の歩み』木下義一

『学校用品と共に歩んだ40年』蕪武昌春

『私家版 私の履歴書』内館晟著 日本文学館

『内館さんを偲んで』内館さんの想い出』内館さんを偲び、想い出を語る会

『CO-OP NAVI』―記念講演会 コープさっぽろ再建の到達点 日本生活協同組合連合会

『幸せを運んでくれた人 外尾幸子遺稿・追悼集』外尾健一編著「幸せを運んでくれた人」刊行会

●宮城の協同組合略史

『昭和・平成現代史年表』横浜市立大学名誉教授神田文人・早稲田大学教授小林英夫編 小学館

『現代日本生協運動小史』斉藤嘉璋著 コープ出版

『21世紀の新協同組合原則』（新訳版）栗本昭著 コープ出版

あとがき

私たちは、社会のつながりのなかで多くの方々とお会い、教えられ学び次の世代へ大切なものを引き継いできました。協同組合のアイデンティティ（価値・原則）もそうして継承されてきました。日本の協同組合の黎明期は大正デモクラシーに遡ります。協同組合の歴史をつくった先人たちの献身的な取り組みがあったからこそ、今があります。

『宮城の協同組合人 一三人の足跡』は、多くの忘れられない協同組合人のなかから、宮城の協同組合の発展につながる先駆的な事業と運動に足跡を残し、道標を示した二三名の物語です。多数のリーダーのなかから限られた方々となりましたが、各協同組合に残されている資料と関係者からの聞き取りをもとに、先人の取り組みがより生き生きと甦り、後世の私たちがそのときどきの気持ちを感じとれるようにまとめています。高い志を抱き、知と技術を磨き、組織の力を高め、深い愛情と信頼に満ちた人間関係を大切にした二三人の物語は、協同組合の魅力を再認識する機会になることでしょう。

この出版企画が具体的に動き出したのは、二〇一四年秋でした。二〇一一年三月一日、東日本大震災・東京電力福島原発事故で未曾有の被害を受けた被災者・被災地は、全国そして世界からの支援を受けながら、復旧・復興へと一步一步前に進んできました。多くのつながりのなかにも協同組合としての支援の輪があり、「地域に協同組合があつて本当によかった」との思いを新たにする日々でした。

ICA（国際協同組合同盟）は、二〇一二国際協同組合年にあたり、「協同組合がよりよい社会を築きます」と宣言しました。大震災からの本格的復興、少子高齢化の進展、エネルギー・環境問題、平和憲法をめぐる状況など、私たちの生活や地域も困難な課題に直面しています。ともに、新たな社会のあり方を模索し、貢献したいと考えている協同組合の可能性を広げていきたいものです。

出版にあたっては、コープこうべ協同学苑、吉野作造記念館をはじめ多くの方々から資料提供・聞き取り・写真提供などのご協力をいただきました。関係者のみなさまに心からお礼を申し上げます。また、宮城県協同組合こんわ会の各連事務局で構成した編集委員会（安齋明修・我妻武昭・小川静治・小野寺基純・亀山豪紀・工藤信・佐藤伊久衣・野崎和夫・早坂裕・磨有司）、執筆・編集・製作のみなさまにも深く感謝申し上げます。

『宮城の協同組合人 二三人の足跡』は県内の大学・短大・高校・公立の図書館と県内オピニオンリーダーのみなさまに寄贈させていただきました。本書を通じて、協同組合の理念に共感をいただくことができましたら、心から嬉しく思います。

「宮城の協同組合人 二三人の足跡」編集委員長

（宮城県生活協同組合連合会顧問）

齋藤 昭子

宮城県協同組合こんわ会 構成団体連絡先

宮城県農業協同組合中央会

〒980-0011 仙台市青葉区上杉1丁目2-16

Tel 022-264-8245

宮城県生活協同組合連合会

〒981-0933 仙台市青葉区柏木1丁目2-45 フォレスト仙台5F

Tel 022-276-5162

宮城県漁業協同組合

〒986-0032 石巻市開成1-27

Tel 0225-21-5740

宮城県森林組合連合会

〒980-0011 仙台市青葉区上杉2丁目4-46

Tel 022-225-5991

日専連宮城県連合会

〒980-0014 仙台市青葉区本町2丁目16-12 仙台商工会議所 4F

Tel 022-266-3541

宮城の協同組合人 二三人の足跡

発行日 2015年9月15日
発行所 宮城県協同組合こんわ会
事務局 宮城県農業協同組合中央会
〒980-0011 仙台市青葉区上杉1丁目2番16号
Tel 022-264-8245
編集 宮城県協同組合こんわ会
「宮城の協同組合人 二三人の足跡」編集委員会
制作 株式会社ル・プロジェ ハヤサカ広告制作事務所
印刷製本 株式会社東北プリント

© 宮城県協同組合こんわ会
2015 Printed in japan

文章および画像の無断転載はお断りいたします。

